薪　朝　文　庫

英国寮生物語
(2)

祥曲星祈/和海　共著

仔牛ともぐら舎版

目　次

一　ある晩秋 (Side vision of Saga)……(一一)

二　ある晩秋 (Side vision of Aiolos) ……(七二)

ある晩秋 (Side vision of SAGA)

ある晩秋

1. In the middle of October, 1987

「…はい。それでは、明日引き落としに行きます。…父上も、お元気で。」

耳元に届く生活の気配が途絶え、機械的な電子音に変わったのを確かめて、受話器を置いた。寮の廊下で立話をする者の姿はなく、暫く自分の姿が見えないとそれとなく探しに来るアイオロスの姿もまだ見えない。ほっとしたら、溜息が口をついた。訊かれてもどうにか誤魔化せる内容だが、なるべくなら、まだ内緒にしておきたい。まだ数枚握っていた手の中のコインが小さな金属音をたてたので、ポケットから革の小銭入れを出して仕舞った。

顔を上げると、「長電話禁止」と少々乱暴な字で大きく書かれた張り紙があり、その上の時計は既に八時を指していた。

実家に向けてある報告を行うため、寮の電話の受話器をとったのが七時四十分。思ったよりも時間がかかった、というのが正直な感想だった。

新学期以来、一度も家に電話しなかったせいもあるだろう。この学校に入学してからというもの、それまで比較的好きに過ごさせてくれていた父は、ひどく干渉的になった。月一度の学業報告、必要最低限の生活費以外の金銭出納の報告、学期ごとの総合成績の提出…父の言葉通り、素直にイートンあたりに行っていればこれほどではなかったのだろうが、将来の人脈を築くにはあまりに基盤の弱い片田舎のスクールでは、せめて成績だけでも突出していなくては伯爵家の将来に差し触る、と考えているようだった。

その考えには異論はないので、今の所、何とか約束の首席を守って二年が過ぎている。

初めの頃、少しでも月例報告が遅れると小言めいた一言を抑えかねていた父の態度は、このごろ漸く軟化して、三か月に一度ほどの連絡でも許される状態に落ち着いていた。であるにも関わらず、まだ十月の段階で電話を入れたのは、ある巨額の出費を認めてもらう為だ。

来月の三十日、一番の親友であるアイオロスが十六歳の誕生日を迎える。

その誕生日プレゼントを入手するための予算獲得が、今回の電話の主旨だった。持ち合わせがない訳ではないが、どうにも私が自由に動かせる金額の限度を超えていたので、銀行から引き落とす前に許可をとらざるを得なかったのだ。

父は勿論理由を訊ねたし、私もそれには正直に答えた。大変世話になっている友人の誕生日が近く有り、そのプレゼントという名目でお礼をしたいのだ、と。

入学からこれまで、アイオロスには本当に世話になった…と言うか、彼が居なかったら、おそらく私はまともな学校生活を送る事は出来なかったと思う。父が最後までイートン、それが駄目ならハーロウかウィンチェスターに固執した理由を、私は入学初日から思い知らされる事になった。普通の学生のように、普通に隣の席のクラスメイトに声をかけたら、彼は目を丸くして一瞬言葉に詰まり、こう返答したのだ。

『こんにちは！　これからどうぞよろしくお願いします！』

彼の名誉の為に述べておくが、彼は私の挨拶を聞いてこのように返したのだ。それほど畏まった挨拶をしたつもりはなかったが、私も少し緊張していたから、発音が少々堅苦しかったのかも知れない。

十三歳の少年の最初の挨拶として、この言葉を特に不思議に思わなかった事が、更に事態を悪くした。気がつけば、私の回りにはぬるく淀んだ被膜のような空間が出来ていて、周りとの接触を計ろうと足掻くほど、その膜は静かに堆積して更に空間を広げていた。

己自身ではどうにもその被膜を破れず、呆然としていたところへ、見かねたアイオロスが声をかけてきてくれたのだ。私の世界の流儀に合わせるのではなく、彼自身の確固とした流儀で。

以来、彼の態度はどんな時にも変わらない。私をとりまく環境はこの二年で確実に変化し、有難いことに数人の友人も出来た。最近では、これまで話した事のない相手からも声をかけられるようになった。それでも、依然として初めて会った時のまま、アイオロスは一の子分である私の世話を焼いてくれている。

…本当に、有難い、と思う。

正直なところ、私がこの学校での生活に慣れたら、彼は私の前に現れた時と同じようにごく自然に私から離れて行くのだろう、と思っていたから。

私が、彼の子分という立場を卒業しても彼の友人の一人に加えてもらえる程度には、彼に対して何か印象づけるものを持っているということなのか、それとも彼から見ればまだまだ手のかかる子分の立場を卒業しきれていないというだけなのか、本当のところは分からないのだけれども…。

いずれにしても、今年の彼の誕生日には、どうしてもこの二年間のお礼をしたかった。その為には、私に出来る範囲で、掛け値無しに彼に楽しんでもらえるものを探して来る必要があった。彼に比べて、私の世界は決して広くはないから、選択肢はそれほど多くはなかったけれども、幸い、ロイヤルオペラハウスのこの秋の演目がその条件を満たすように思われた。

プラシド・ドミンゴとジェシー・ノーマンによるワーグナーの「ローエングリン」だ。

ヒステリックなドラマティック・ソプラノは嫌いだというアイオロスも、柔らかで丸い声を持つノーマンには一目置いているから、きっと気に入ってくれるに違いない。

折角楽劇を鑑賞するのなら、是非いい席で観て欲しかった。

桟敷に近い学生席や、立見席でオーケストラを聴く楽しさを、私はアイオロスから教わった。管の生音が飛んで来るような席では、奏者の息づかいを耳元で聴くようで面白かったし、演劇でさえ、大道具の裏が見える桟敷席から覗くのは、まさしく舞台裏の人の動きが分かって楽しかった。

だが、ワーグナーの楽劇は、演劇、音楽が一体となった総合芸術だ。バイロイトでは、オーケストラ席の譜面台の明かりが舞台に漏れて物語を邪魔しないよう、ワーグナー本人の指示によってオーケストラ・ピットの上に覆いをしてしまったという。それほどまでに『劇』の部分を重視した(因って、ワーグナーは自分の作品を「オペラ」と呼ばず「楽劇」と呼んだ)ワーグナーの意図を正確に理解しようとすれば、やはり正面の席から鑑賞しなければならない……。

夜の部の鑑賞は未成年だけでは無理なので、マチネーの売り出しをずっと待っていた。大変タイミングの良い事に、先々週末に十一月二十九日のマチネー追加公演が決定し、今日の売り出しを待って昼休み中にチケットを二枚確保した。

…本当は、ボックス席あたりにしたかったのだけれど。

ボックス席は四枚一組でしか買えないから、二階の正面席をおさえた。二枚で三三〇ポンド。父には、今年度一年、演奏会には行かないと約束するしかなかった。

父は、息子の恩人がどんな人物であるのか興味を持ったらしい。それとなく、アイオロスの父親の職業を探るような質問を繰り返したので、半ば苦笑を堪えながら、名のある弁護士の息子だと告げた。勿論、その息子ともどもアメリカに暫く滞在していた、とは言わなかったので、父はそれなりに安心したようだった。…本人を見たら、きっと想像していた人物像とのあまりの違いに驚くだろう。

首尾よく貯金取り崩しの許可が降りたので、アイオロスに再度二十九日の予定を確認しようと談話室へ向けて歩き出した。

その時だった。まるで待ち構えていたかのように、背後から落ち着いた声が聞こえて来たのは。

「チェトウィンド、ちょっと時間をもらえないかな」

同学年からは、ファーストネームで呼ばれるようになって既に久しい。慌てて振り返ると、はたしてそこには同じハウスの一つ上の学年のステファン・ランバート上級生が立っており、その隣にはパークハウスの先輩であるエリオット・リード上級生が立っていた。

「はい。…何か?」

常に控え目な態度のエリオット・リードがもの言いたげな眼差しをしているのを見て、用があるのはこちらだな、と直感した。既に消灯時刻は一時間後に迫っており、さもなくばわざわざ隣のハウスを訪ねる理由がないからだ。

案の定、ランバートは彼の旧友の肩を叩くと、「じゃ、俺はこれで」と残して談話室の方へと去って行った。

残された私とエリオットは、暫くの間、互いに言葉を探して、

張り紙を剥がされた跡のある壁やハウスカラーの深青色の絨毯に視線を泳がせていた。…エリオットの用件は何だろうか。気が付けば肩に力が入り、背筋が緊張していた。…嫌な予想が当たらなければよい、と思う。エリオットは非常にピアノが上手で、ついこの間まで音楽の授業で私と組まされていたから、互いに普通の友人よりはよく知っていると言ってよい間柄だった。

「お話とは……」

「サガ」

口を開いたのは、互いが同時だった。

エリオットは、音楽の授業以外で私のことをファーストネームでは呼ばない。以前、音楽棟の外で私をファーストネームで呼び止め、周囲にいた人々の驚愕の視線を浴びたからだ。

「あ…すまない。こんな時間に、急に訊ねて来て……」

「構いませんよ。…こちらで話しませんか？　差し支えなければ」

談話室で話せる内容ではなさそうだと見て、私は談話室とは反対の方向へ歩き、食堂に通じるドアを開けた。この時間の食堂は片付けも済んで誰も居ない。一番奥のテラスに面した席の部分にだけ明かりをつけると、中庭の芝生にぼんやりと人口の明かりが落ちた。

「どうぞ。」

振り返ると、食堂の入り口のドアがあった空間に、直立不動の人影があった。

「ああ…ありがとう。…もっと早い時間に来るべきだった。…君を外に連れ出せる時間に。」

暫くの間、何と返答すべきか、答えにつまった。…外に呼び出されていたら、多分応じなかっただろう。このように上級生の呼び出しを受けるのはこれが初めてではなく、以前呼び出されて出掛けていった際に大変後悔をしたからだ。

「…先輩。その……」

「サガ、君に聞いて欲しいことがある」

カツン、カツン、と、靴音が大きく耳に響いた。背筋を伸ばし、まっすぐに前を見て歩く――いつもの印象とは打って変わったエリオットの姿に、私は嫌な予感が九割がた的中したのを悟った。…私は、彼が好きだった。彼のピアノは純粋で、欺瞞がなかったから。終止穏やかな彼は、ピアノに向かう時だけ、彼の奥深くに仕舞われている本当の芯の強さを現した。私もひとたび楽器を握れば容易に折れない性格だから、しばしば、私達のデュエットは火のような激しさになった。

その彼が、音楽室以外の場所で、私に話があるという…しかも、彼は先刻からただの一度も私を姓で呼ばない。話の内容はおよそ見当が付いていたし、私が返さなければならない答えも決まっていた。人間的に好きな相手であり、尊敬もしている人物だからこそ、その瞬間を思うと胸が痛んだ。

「…君にとっては、聞き飽きた言葉だろうと思う。君を呼び出して無礼を働いて、強烈なしっぺ返しを受けた上級生は僕のハウスの先輩でもあるから…二月の仮装大会以来、君が再三

色々な人物からの呼び出しを受けて辟易しているという噂も聞いた。だから、本当に、言うべきか否か迷ったんだが……」

君が好きだ、と、エリオットは一つ息をついて静かに言った。

「初めは、君の音楽に惹かれた。デュエットをしていてこんなに楽しい相手は、他にいない。君はいつも本当に紳士然としているけれど、ヴァイオリンを手に持ったときには驚くほど大胆で、情熱的になる…そんな君のヴァイオリンに合わせたくて、必死でピアノの課題を練習した。音楽奨学生を除く一般課程の学生の中で一番になれなければ、ヴァイオリンのトップである君とは組ませてもらえないからね。…そうして、音楽の時間に合わせられるなら、それだけでもいいと思っていた」

エリオットは、そこで僅かに視線を下に下ろし、唇を噛み締めた。

「…それが、今期の成績で、今年入学した第三学年のカミュ・バーロウに抜かれた。…もう、君と組めないと知った瞬間、本当に、口惜しさに胃が捩れる思いがした…自分でもびっくりしたよ。自分が、君を誰にも渡したくないと思っていたこと、僕の生活の中で、君と組める音楽の時間がどれほど重要な位置を占めていたかということ…いつの間にか、君は音楽のパートナーと言うだけでなく、僕の中で人間として本当に大切な人になっていたんだ。…だから思った。どうしても、君と二人で過ごせる時間を諦めたくない、と。音楽の授業で組めなくても、個人的に、付き合ってもらえないだろうか、と…」

エリオットの呟きの余韻が消え、部屋はしんとした空気に包まれていた。私は、何度か、喉元まで上がって来た言葉を飲み込んだ。…何を言えば良いのだろう。確かに、去年の仮装大会以来、このような交際の申込みを度々受けるようになった。真剣な告白であったこともあれば、単に飾りのように連れ歩きたいだけだというのが明白な場合もあった。

だが、いずれの場合も、相手は私のことなど何一つ知らなかった――彼らが欲したのは、あの仮装大会の夜に数時間だけ現れた『淑女』であり、ただの幻に過ぎなかった。だからこそ、私も何の遠慮もなく、私と『彼女』は別物であることを思い知らせるだけで良かったのだ。

エリオットは違う。少なくとも、私のことを全く知らないわけではない。互いの音楽をぶつけ合えば、会話はなくとも相手について多少のことは知れてしまうものだ。アイオロスあたりが聞けば『惚れっぽすぎる』と一言のもとに切り捨ててしまいそうだが、共に音楽を創る相手を日常生活のパートナーとみなしてしまいたくなる気持ちは、私にも覚えがあった。

恋愛感情にはならなかったとはいえ、私自身もいつの間にかエリオットを信頼し、尊敬できる先輩の一人とみなしていたのだから。

音楽の授業以外の接点など、ほとんどなかったにも関わらず…。

「…すぐに付き合って欲しい、というつもりはないんだ。…ただ、君が、君の友人達と過ごす時間を、週に一度だけでもいい、僕と過ごす為に空けてくれないか？　音楽をするのでも、た

だ話をするのでもいい。…かなうなら、君のことをもっと知りたい、と思う」

真摯な、本当に真剣な言葉が、重く胸に降り積もった。その息苦しいほどの重みの中で、私はある決意をした。彼には、本当のことを言うべきだ、と。まだ、自分の中でも完全に答えが固まった訳ではない、ある感情のことを。

「…大変申し訳ありませんが……」

無理矢理、言葉を押し出した。エリオットの肩がびくりと震え、緊張したのを感じた。

「交際を前提としたお話なら、たとえ週一度でもご一緒することは出来ません。…何故なら……」

エリオットはじっと息をつめたままこちらを見詰めている。私は、もう一度、息を深く吸い込み、何故なら、と口に問いかけた。口にするのは、存外勇気が要った。

「…他に、好きな人が居ます。だから、交際は出来ません。」

暫くの間、エリオットは瞬きもせずにこちらを見詰めていた。信じられない、といった表情が、素直にその面にありありと浮かんでいた。確かに、驚きもするだろう。私には浮いた噂のひとつもなかったし、最もそういった恋愛関係に疎い人種であることに間違いはなかったから。

たっぷり五秒ほど、エリオットは絶句していた。それから、漸く我に返り、その瞬間に気の毒なほど赤面した。

「…ああ……すまない！　そうだ…君ほどの人なら、当然彼女がいるに決まってるのに……いや、婚約者かも知れないな……僕は何を、一人で空回りしていたんだろう…肝心の君が、フリーかどうかも確かめないで……」

それから、額がテーブルに付きそうなほど深々と頭を下げて、何度も謝った。

相手がいることを確かめもせず、ストレートの君に失礼な頼み事をした、と。

「先輩…違うんです。どうぞ、頭を上げて下さい」

私は、なるべく丁寧に、ゆっくりとそう繰り返した。彼女が居る、と勘違いをされたのなら、そのままでもいい。だが、彼がこんなに恐縮しなければならない理由はひとつもなかった。

「違います…彼女も婚約者もいません。まだ片思いでしかないし、女性を思うことがストレートの定義だと言うなら、ストレートでもありません」

「……え？」

「…この学校の、ある人物が好きです。…だから、少なくとも今は、先輩のお気持ちに応えることは出来ないんです。」

私はただ、彼に自分を責めることを止めて欲しかったのだ。ただ的外れな頼み事をした、というだけでなく、エリオットは明らかに彼の申し出が私を侮辱したと思い込んでいた。だから、真実を伝える事で、彼が誤って背負ってしまった負い目を解いてもらいたかったのだ。

エリオットは、私の言葉を聞いてなおゆっくりひと呼吸分ほど、机の上の花瓶を見詰めていた。それから、静かに顔を

上げてこちらを見た。
このときの印象を、私はおそらく一生忘れないだろう。エリオットの瞳は、彼の音楽さながらに、激しい感情の嵐に揺れていた。こんなに情熱的な瞳を見たのは初めてで、その瞬間に、私は全身の毛が逆立つような、冷たい緊張を覚えた。
恐怖、という言葉が、一番正しいのだろうと思う。
こんなに真剣な眼差しを他人から向けられたことなど、これまで一度もなかった。
急激に、後悔が襲って来た。…どうして、黙っておかなかったのだろう。婚約者がいると勘違いしていた方が、彼にとってどれほどましであったかということに、何故考えが及ばなかったのか。
「…その人物とは……」
小さく、エリオットが呟いた。私は、何も言えずに組んだ掌に力を込めた。
「…君と同学年の、アイオロス・エインズワースなのか……？」
そうだとも、違うとも言えなかった。ただ、その迫力に圧倒されるように、気が付けば私は小さく頷いていた。
「そうか…やっぱり……」
エリオットは、暫くの間、その言葉を胸の内で反芻するかのように黙り込んでいた。それから、テーブルの上に置かれた両手をゆっくりと組み直すと、まるで祈りを捧げるかのように頭を垂れた。
彼にとっても、私にとっても、辛い時間だったと思う。
私達は、何も話さなかった。ただ、エリオットが再び頭を上げるのをじっと待っていた。
暫くして、彼は漸く顔を上げた。くすり、と小さく笑った眼差しは静かで、その表情は、少し苦しげな影を宿しつつも、いつもの穏やかな先輩の顔に戻りつつあった。
「…悔しいけど、確かに君にとって、エインズワースと量りにかけられる人間じゃないな…僕は。」
「先輩…」
「君が非常にエインズワースを頼りにしていることは知ってるよ。…女性の相手がいるなら仕方がない。でも、この学校の誰かが君の片思いの相手だというなら、僕にもまだチャンスがあると思った。僕は、音楽を通して、君のことをその辺の人間よりはよく知っていると自負してるからね。…でも、彼はそれ以上に君のことをよく知っているだろう…」
彼は、じっと手元を見詰め、それでも、と小さく言葉を継いだ。
「もし…もしも君の思いが実らなかった時には、どうか僕のことを思い出して欲しい。僕はピアノくらいしか取柄がないけれども、君が語る音楽の相手をすることは出来るよ。…無論僕も、来期にはきっとバーロウを抜いてもう一度君の相手ができるよう努める。だから…」
エリオットが、右手を差し出した。ショパンの繊細な指を思わせる、細いけれどしっかりとした、ピアニストの手だった。
「いつかまた、一緒に演奏してもらえるかな…？」
「…ええ。また、いつか。」

消灯二十分前にパーク・ハウスに戻っていったエリオットを見送りながら、私はこれまでの彼との記憶を思い出していた。初めてヴァイオリンを弾いて聴かせた時の驚いた表情、音楽室の中だけだったにしろ、他の下級生に対するのと同じようにファーストネームで気軽に呼んでくれた時のこと、競うように難曲に挑んだ日々…。

だが、その記憶のどこを探しても、そこには穏やかな先輩の顔しかなかった。彼は同学年の間では、それほど目立つ存在ではなかったようだ。むしろ、気の弱い性質の人間だと思われている向きがある。そんな中で、先刻目の当たりにした彼の情熱的な眼差しは、私にはあまりにも突然でありすぎた。受け入れることに戸惑う一方で、これが恋愛感情なのだと、己のもっとも直感的な部分で悟らずにはいられなかった。

顧みて、自分の発言を思う。好きな人がいる、と。だが、『好きな人』、と本当に言っていいのか。アイオロスに対し、自分はあれほどに激しく情熱的な感情を抱いているだろうか。

実は既に五か月間、私はこの問題で悩み続けていた。事の発端は、二月に行われる毎年恒例の仮装大会だった。この行事が引き金となって五月にある事件が起こり、その事件について週末にアイオロスから呼び出しを受けた。そのときに彼がたった一言漏らした言葉が、私自身の彼に対する感情を己に問い直すきっかけとなったのだ。

漸く二週間前に、その答えの確かな手掛かりを掴んだと思ったのに…。

あまりに慣れない、制御不能な感情に対する自信は、僅かな出来事でこんなにも簡単に揺らいでしまう。

何となく、人の居る場所に戻りたくなくて、ふらりと外に出た。ぼんやりと灯る淡いオレンジの外灯の元で、季節外れの雛菊が小さな花をつけていた。丁度こんな雛菊が満開の頃の出来事で、あの時も、ロンドンから疲れ果てて戻って来た目前に、この白い花が満開で咲き誇っていたことを覚えている。もう一度、初めから思い起こしてみよう、と、そう思った。

2　Reminiscences

我々のスクールでは、二月に謝肉祭シーズンにちなんで、皆が好きな仮装をしてダンスを踊る。ただダンスパーティというだけではない点は、このパーティを通してハウス対抗のコンテストが行われているという点だ。各ハウスは、エスコー

ト役の紳士一名と、そのパートナーになる淑女一名を選出し、立派な紳士として女性をエスコート出来る事を証明しなければならない。審査は教官・学生全員で行われ、優勝したハウスにはポイントが与えられる。審査の対象となるエスコート役には上級生が選ばれるが、当然男子校に淑女は存在しないから、こちらに関しては下級生が女装をしてパートナーをつとめることになる。

今年の一月、我々の学年には『淑女役を選ぶべし』との指令が下った。誰も好んでやりたがらない役であることと、数人の上級生からの指名もあって、私はかなり早い段階からその最有力候補に組み込まれていた。候補に挙げられた学生は皆一様になんとかその責を逃れようと必死であったし、私自身も決して積極的にやりたいとは思っていなかったが、そんなときにアイオロスが一言言ってくれたのだ。

「なんでやんないんだ？　やれよ、お前。一回ハジけると、友達増えるぜ？」

その頃、オーケストラのメンバーを中心に私の交友関係は若干改善していたものの、やはりまだ他のハウスの人間や忙しい運動部のメンバーとのコミュニケーションは円滑に進んでいるとは言い難い状況だった。

俺が手伝ってやる、とアイオロスのかなり積極的なサポートを受け、私は結局この淑女役を引受けることにした。早くもアイオロスの言葉通り、その瞬間に私は他の候補者と普通に話せるようになったし、翌日からは談話室に居るだけで同学年、上級生、下級生の区別なく声をかけて貰えるようになった。このコンテストにおける我々スミス・ハウスの成績は近年芳しくなく、上級生が非常に今回の結果に期待をかけていることも、行事の当事者になってみて初めて分かった。今まで見えていなかったスクールの生活のエッセンスの部分が、見え始めた瞬間だった。

アイオロスは、ただ有り合わせの衣装を着せるのでは面白くないと、数人の仲間を募って新しい衣装の調達に乗り出した。結局、平均より高い私の身長に合うものはオーダーメイドにならざるを得ず、一同が諦めかけたころに再びアイオロスが言った。

「サガ、お前の母さんの身長ってどのくらいだっけ？」

この質問には、私も流石に驚いた。それはつまり、母の衣装を借りろという提案に他ならないのだから。

「丁度私と同じくらいだけれど…アイオロス、それは無理だよ。とても衣装を借りて来るなんて出来ない。仮装大会で女装するなんて、父に知れたら大変なことになる」

「ばーか。誰が本当の事なんて言うんだ。チャリティーの演劇をやるのに衣装が足らないから貸してくれ、とかなんとかだろ。お前、その頭の固いの何とかした方がいいぞ？」

その場に居た自称衣装係の面々も、アイオロスが漸くつないだ可能性に瞳を輝かせて私を見つめていた。…結局私は、溜息を一週間分ほどついた後で、母にこっそり頼んでみることを承諾した。アイオロスがそこまで拘る理由が分かってい

たからだ。『やるんだったら、優勝しなきゃ意味がない。他人にとって価値のある結果を出せて初めて、他人に自分の価値を認めて貰えるんだ。そうすりゃ、貴族だガリ勉だって邪魔な固定観念がふっ飛ぶ』と、彼は最初に私にこの役を勧めた時から言っており、その考えは私にも十分納得できるものだった。

それに、その場に居合わせた仲間の期待に満ちた眼差しを裏切るのはあまりにも辛かった。彼らはハウスの勝利の為に、足代がかさむのも構わず何度もロンドンに赴き、私の衣装を探してくれていたのだ。

承諾してしまった後で、私はふと、いつのまにか自分がハウスのメンバーに仲間意識を抱いていることに気付き、自然と口元が綻ぶのを感じた。確かに、私は色々な意味で羽目をはずすということを覚え始めていて、それが少しずつ私の友人関係を広げていたのだ。母への説得も、きっと何とかなるだろう、と少し楽観的な気分になれた。ただ、パブリックスクールの生活に関してその内情を身を以て学んでいる父には、やはり内緒にするしかないだろうけれども。

結局、母への説得は難なく進み、母は演劇をやるなら宝飾品も必要でしょう、といくつかのイミテーションを貸してくれた。本物の石を埋め込む前のデザインの段階でデザイナーが持って来たもので、イミテーションとはいえ合成の石と銀の地金で作られており、本物と比べてもそれほど遜色ない。休み明け、古い母の衣装を目の当たりにしたハウスのメンバー達は、初めて見るアンティークドレスへの驚きと今期の順位予想に沸き、私とパートナーの上級生はその期待を受けて毎日ダンスの特訓をやらざるを得ない羽目になった。多くの人間が誤解しているようだが、今年我々のハウスが優勝出来たのは、骨董品のようなアンティークドレスのお陰ではなく、ハウス代表になった我々がそれなりに練習したからだ――上級生のフレデリク・ガーディナーはAレベルテストを控えていたにも関わらず。

アイオロスの読んだ通り、この二月の経験は私にとってかけがえのないものをもたらしてくれた。今でもやって良かったと思っているし、サポートしてくれたハウスの仲間には本当に感謝している。ただひとつ予想外だったのが、仮装大会以降ぽつぽつと持ちかけられるようになった交際の申込みだった。元は勘違いとはいえ、真剣に私に対して向かってくる感情にどう対処したらいいのか、最初の頃は本当に何も分からずに悩み続けた。思えば、私はそれまでそうした剥き出しの本気と正面から向き合ったことがなかったのだ。だが、だからこそ、私はこの問題を自分一人で解決するものと捉えていたし、他の誰にも、アイオロスにさえも相談する気はなかった。相手の感情はまっすぐ私に向かっているのだから、私にとっては自明のことであったし、仮装大会では得たものの方が大

きかったから、まさかアイオロスがこの件に関して負い目を感じているなどとは想像もしなかったのだ。

アイオロスは、私の元にそういった話が持ち込まれている事にかなり早い段階から気付いていたようだ。彼は彼らしい責任感で、彼が私を淑女役に推したために私が面倒に巻き込まれている、と気にかけていた。それでも、私が何も話さないので、それとなく側にいてより面倒な事態が起こらぬよう、気を配ってくれていたらしい。私はそんな彼の好意に気付かず、なるべく一人で解決出来るよう、そのような申込みを受けた時にはわざとアイオロスから距離をとって行動していた。彼が想定した最悪の可能性までが当時の私に見えていた、と言ったら嘘になるだろう。私は確かに、パブリックスクールでしばしばどんな事件が起こるのか知っていたし、それに対する用心も怠っていないつもりだったが、結局その認識の甘さを突かれてしまったのだ。

事件が起こったのは、五月の下旬、丁度週末に誕生日を控えたその週の月曜日だった。パークハウスの最上級生デニス・フェルトンからの呼び出しを受け、私は指定のラグビーグラウンドまで赴いた。ラグビーのスクールチームが目の前で練習をしていたし、彼自身も非常に紳士的に振舞っていたから、最初の警戒心は徐々に薄れ、私はいつものようにどうやって相手が納得する形で断ることが出来るかを真剣に考え初めていた。デニスは明るく話し上手で、初めに交際を断った私にも全く気落ちした様を見せない。そのうちラグビーのグラウンドを回りながらゲームやルールの説明を始めたので、私はただ有難く元選手の講義を拝聴するしかなかった。――もっとも、彼の講義自体は色々知らなかったことばかりで面白かったのだが。

異変に気付いたのは、コートを一周して、往路から復路に差し掛かったところだった。コートを指し示すデニスの指の先を見詰めながら、暇を告げるタイミングを見計らっていた私は、その時初めてラグビーのグラウンドがL字型に配置されていることに気付いた。L時の底辺の部分は、ハウスのある一角からは木立に隠されて見えないのだ。更に間の悪い事に、今まで練習をしていた現役選手が引き上げ始めた。これ以上はまずいと思い、そろそろハウスに戻りたい、と言った瞬間、両肩を掴まれて地面に引き倒された。チームの後輩には、予め黙殺するよう言い渡してあったのかも知れない。明らかにまだ人がいるうちに仕掛けられた暴行だったのに、誰一人気付かなかったのだから。

柔らかい草地ではなかったため、倒れた瞬間にひどく背骨を木の根に打ち付けた。一瞬、痛みに目が眩み、再び両目を開けたときには両眉と共に両足も地面に縫い付けられていた。

ごめん、好きなんだ、とか何とか、言われたような気がする。だから、卒業する前に一度だけ、と。

殆ど無意識に、倒れた瞬間に手に触った棒切れを掴んでいた。

「好きだから」どうだと言うのか。卒業前に記念のように体の関係を持ちたいという気持ちも分からない。本当に好きなら、

何故時間のあるうちに言わないのか。初めから意志の疎通を諦めているくせに、別れる直前に己の都合のみを相手に押し付けることにどんな事情があるというのか。

考える間もなく、手にした棒を喉元に突き付けていた。何の躊躇もなく、言葉が口を溢れた。「このまま屈辱を受けるくらいなら、少年院送りになった方がましだ」と。

デニスは、確かに一瞬怯んだらしかった――だが、その表情はすぐに先刻までの余裕に満ちた笑みに変わった。ラグビーの試合で怪我慣れしている彼には、この私の片腕の筋肉だけでただの棒切れを喉に突き刺すなど不可能だと、すぐに気付いたのに違いない。余裕を取り戻して、お前に俺が倒せるか？と訊いた。

今にして思えば、何故あのときあんな事を言ってしまったのか分からない。もし負けたら、本気で彼の相手をするつもりだったのかと言われれば、その場になってみないと分からないと言うより他ない。

私は、決闘を申し込んだ。もし自分が負けたら、卒業まで彼女として相手をしよう、と。

デニスは勿論、この提案に乗った。彼にしてみれば、ラグビーチームで鍛えた自分が四学年も下の下級生に負けるはずがない、と思ったのだろう。私は自由になり、我々は互いにその辺に落ちていた棒切れを拾い上げた。

結論を言えば、私はデニスに勝った。彼が最上学年であり、既に体育の授業が終わっていたことが幸いした。彼は、私のフェンシングの成績を知らなかったのだ。ただ、私の方も無傷というわけにはいかず、頬に棒の先が擦って出来た傷が一筋残っていた。

私にとって幸いだったのは、デニスが己の言葉と技量にそれなりに正しい自尊心を持っていたことだろう。思いがけず敗北したことで、彼は衝撃を受けて去った。これが中途半端な自信であったなら、逆に返り討ちに遭っていたかも知れない。剣術ならば勝てる自信はあったが、格闘技に持ち込まれて勝機を掴める相手ではなかった。私はかなりほっとしながら、乱れた服を整えてハウスに戻った。幸い、部屋には誰も居なかったから、急いで着替えて土のついたシャツをまとめ、シャワー室に向かおうと部屋のドアに手をかけた――その時だった。

ノブが勝手に回り、扉が勢いよく開いた。アイオロスの少し不機嫌な顔が覗き、それから、両の瞳が見た事もないような形に見開かれた。彼の視線が、自分の頬と、手に抱えていたシャツに落ちた時、何かが本能的な危機を告げた。『気付かれた、ただでは済まない』と。

実際、次の瞬間に見たアイオロスの姿は、私が全く今まで知らなかった姿だった。バン、とものすごい音をたてて、彼は隣の部屋に面した壁を蹴りつけた。そうしてそのまま、背後の衣装棚と部屋を区切る薄い壁に凭れ掛かり、部屋を出よ

うとした私の進路を塞いだ。蹴りつける壁が逆側だったなら、彼は間違いなく壁に穴を開けていただろう。

「とうとう取っ組み合いの喧嘩も覚えたか？」

その声にいつもの明朗とした響きはなく、呟きは低く掠れていた。顔色は赤を通り越して青ざめていたし、いつも肯定的な表情を失わない瞳は細められて、針のようなするどい光を宿していた。何故彼がここまで怒ってしまったのか、その時の私には検討もつかなかった――ただ確かに言えるのは、先刻デニスに襲われた時でさえ、これほど恐ろしくはなかった、ということだけだった。

如何に、自分が今まで彼に甘やかされていたかを実感した。アイオロスは、彼のそういった激しい部分を私の目前から完全に覆い隠してきたのだ。入学した時から、今まで。

「…違う。アイオロス、落ち着いてくれ」

私の声も、少し掠れていたかも知れない。咄嗟に、もっとも無意味な台詞を口にしていた。怒りに震える相手にただ落ち着けと言ったところで、何の酬いがあるだろう…だが、この状態のアイオロスには、何一つ話せるものではなかった。彼は、私に怒っているのか、それとも私に手を出した相手に怒っているのか？　もしも後者であったなら、上級生に襲われたなどと言おうものなら、彼は七つのハウスをかけずり回っても相手を探し出し、徹底的な報復処置に出るだろう。

アイオロスには、暴力を振るって欲しくない。彼はやはり、こんな風に怒っているよりは、笑っている方がいい。

「落ち着いているさ、十分」

アイオロスの声はまだ掠れている。深く息を吸って、彼は言葉を続けた。

「十秒数える。…相手の名前を言え」

「全然落ち着いていないよ。君は名前を聞いたら、その足で報復に行くつもりだ。…だから、言わない。」

「報復？　話し合いに行くだけだ」

ふわっと、アイオロスは笑った。だが、こんなに物騒な笑みがあるだろうか。眼差しの光は先刻と変わらず、獲物を追いつめる豹のようだ。

私は、溜息をついた。どうしたら、怒りを収めてもらえるのだろう。

「…アイオロス。君が何を想像したのかは分からないが、幸い、私の身に危害は及ばなかったんだ。相手もそれなりにダメージを受けただろうし、多分二度と声をかけて来ないだろう。…申し訳ないが、今の冷静でない君にこれ以上のことは言えない。私にとっては過ぎた事だから、君も見なかったことにしてくれれば有難いんだが…」

数瞬の間、アイオロスは硬直したようにその場に固まっていた。それから、痛いほどの集中力でこちらを睨み付けていた視線を外し、目蓋を伏せて浅い息をついた。

怒りだけでなく、それほどに私を心配してくれているのだという事は、私にも分かっていた。

だからこそ、何も言えないのだ。彼の性格なら、心配の種

は徹底的に叩くに違いないのだから。

暫くして、アイオロスは今何を訊いても私が口を割らないことを悟ったようだった。先刻よりも更に冷たい視線を上げると、私を睨み付けたまま、有無を言わさぬ口調で言った。

「五月三十一日、十曜日、お前、空いているよな？」

歯の隙間から絞り出すように、言葉が続く。

「一日遅れだが、お前の誕生日、きちんと祝おう。俺んちに来い」

いいか、とも尋ねなかった。これで適当な理由をつけて逃げようものなら、今度こそ完全に手綱が外れて怪しい人物を手当たり次第に締め上げかねない。

分かった、と答えるしかなかった。一週間先に問題を先送りしたに過ぎないが、少しはアイオロスの頭が冷えていることを祈りながら。

そうして、五日後の三十一日に、私はアイオロスにつれられてロンドンに向かった。電車内での会話に始まって、夕刻暇を告げる時刻になるまで、アイオロスはあの手この手で問題を起こした上級生の名と今回の事件の顛末を聞き出そうとした。一週間前の煮えたぎるような怒りは、内心はともあれ既になりを潜めていた。五日前に彼が冷静でないことを理由に説明を拒んだ私は、今度はデニスの名前を隠すのがやっとの状態にまで追い込まれ、結局二月からこちらの出来事を全て語らざるを得ない羽目になった。驚いた事に、アイオロスはそのほとんど全てに気付いていた――私が申込みを受けた時は全て相手と私の二人きりであったにも関わらず。

何故気付いたんだと訊いたら、夜中に起き出して考え事をするどこぞの馬鹿がいるから、知りたくなくても分かってしまう、と窘められてしまった。

私が夜中に考え事をしていたのは初めて申込みを受けた日の夜だけだから、つまりは私が知らぬ間に溜息をついたり浮かない顔をしていた、ということなのだろう。

彼は今や、第二の事件が起こる事を真剣に心配していた。このような面倒の原因は仮装大会で煽りすぎた自分にあるのだから、何か手伝わせてくれ、と。いつも揺らぐ事なくまっすぐに相手を見つめる両の瞳が、切迫感さえ浮かべて、真剣に私を見詰めていた。何度か、私は思わず口を開きかけた。彼にこんな眼差しをさせるのは心苦しかったから。…だが、何を手伝ってもらえば良いのだろう？　確かに、彼が隣に居てくれれば滅多な誘いはなくなるかも知れない。アイオロスの睨みはそれなりに有名であるから。だが、それは私が自立する為には選んではならない選択肢だった。早く彼に手間をかけさせずともやっていける人間になりたかったし、私と相手の二人だけの問題に他の誰かを巻き込むのは、どうしても己の矜持が許さなかった。

もし事が起こってしまったとしても、それは己の至らなさが原因だ。

全ての手を尽くし、万全の準備を行ってもなお危険が迫る時には、きっと一番にアイオロスに相談するだろう。でも、今はまだその時ではない。

日もすっかり傾き、いつしか部屋には倦んだなまぬるい空気が満ちていた。言葉数も互いに少なくなり、最後には疲れきった溜息がたまに吐き出されるのみとなった。このまま続けても、互いに平行線を辿るだけだということは、火を見るよりも明らかだった。時計の針は既に五時を指している。六時間あまりも攻防を繰り返していたことを知り、私はそろそろ学校に戻らねば、と切り出そうとした。

その時だった。

アイオロスがぽつり、と言ったのだ。

お前、もし俺が付き合ってくれって言ったらどうするんだ？と。

…もし……。

一瞬、倦みながらも惰性で動いていた時間が止まった。少なくとも、私はそう感じた。

普段の私なら、言葉と、その言葉に隠された意図を理解しようと努めるだろう。だがその時、私の思考はその作業を完全に放棄していた。いや、放棄した、と悟る前に、勝手に口が何の意味もない言葉を吐いていたのだ。曖昧な、どうとでもとれる笑みと共に。

「…さぁ…先輩には断ってしまったからね……」

馬鹿なことを言っている。先輩に断ったからどうだというのだ。全く質問の答えになっていない……。

人ごとのように、理屈を捏ねることを放棄しなかったもう一人の自分が、私の言葉に冷めた批評をした。それが堰であったかのように、私の思考は再び稼働を始め、考えもなく言ってしまった台詞の遅すぎる理屈付けを始めた。アイオロスが悪いとは言っていない。これまで真剣に告白してくれた人々には、自分がストレートであることを理由に断ったのだから、アイオロスでなくても駄目なのだ、と。一番大切な友人に、一番傷がつかない答えではないか。良いとも駄目だとも、それすら明らかにしていない。あとは、アイオロスが彼に都合のよいように取ればいい……。

それがどんなに卑怯な答えか、私は知っていたが、理性の方はそんな穴だらけの論法に容易く丸め込まれてしまった。アイオロスは、そんな私の狼狽に気付いたのか、唇の端に疲れた笑いを浮かべて言った。

「いっその事、俺と付き合っているとでもしとけばちょっかいの数も減るんじゃないのか？」

そうして、彼は机の上に何時間も置かれたままだった冷めたコーヒーをとり、一気に呷った。

居心地の悪い沈黙が、部屋に落ちた。その瞬間、私は何かが弾けて消えたのを感じた。それはアイオロスの真意を辿る糸口であり、その時は直視することを拒否していた私の中のある種の期待でもあった。それら諸々のものが混じり合い、決してひとつではない何かが消えたのだと知った時、その喪

失感を埋めるように、ああ、そういう意味だったのか、と言葉が胸に落ちた。そういう意味だったのか、それならば、適当に流しておいて良かった、と。

だがそれは、故意にある事実を無視した結論だった。会話とは、常に互いの反応を見て初めて成り立つものだ。彼の質問が私の答えを引き出したように、私の答えが彼の次の言葉を引き出したのだ。彼の真意がなんだったのか、私の曖昧な答えを聞いた瞬間に、おそらく彼はもっとも素直に開かれた心情の扉を閉ざしてしまったのに違いない。再び帰って来た言葉からは、もはや彼の真意を探る手がかりは何もなくなっていた。

五月の事件は、この最後のアイオロスの言葉で幕を閉じた。

アイオロスは、それ以来、全くこの件に触れては来ない。カモフラージュに付き合ってみるか、という彼自身の提案も、全くなかった事になっているようだった。

私はと言えば、スクールに戻って一週間ほど経った頃、漸く様々な感情が息を吹き返し始めた。アイオロスの質問の意図が何だったにせよ、心にも無い台詞を返してしまったことへの負い目、その答えを聞いた瞬間、一瞬だけ過ったように見えたアイオロスのはっとしたような表情　そしてそれを見た瞬間に感じた心臓付近の針が刺すような痛み…

時が過ぎる程、私は私自身のそれらの感情に何がしかの説明をつけなければ済まされないと感じるようになっていった。アイオロスの方はもうすっかり普通に戻ってしまったのに、自分だけ考え続けることに意義があるのか。何度も自問し、その度に、この問題を無かったことに出来なくなっている自分に気付かされた。私の関心は既に、アイオロスが何を思ったのかではなく、私自身が彼をどう思っているかに移っていたのだ。

今、この瞬間、相手を好きだと思う。

たったそれだけで、好きな人と言ってしまえるなら、どれほど楽だろう。

相手の容姿や性格や価値観を並べ立てて、だから好きなのだと納得してしまえるなら、どんなに楽だろう。

美しいと思う事、好きだと感じる事、それらに『何故』があるなら、その奥にはもっと根源的な感情があるのだ。狭量な理屈が幅をきかせる隙もないほどの。

今、アイオロスを好きだと思う自分は、明日になってもまだ好きだろうか。

彼の真っ直ぐな性格を好ましいと思う。どんな困難に向かっても、決して挫けることなく希望を見い出すしなやかさを心から尊敬している。それは一生きっと変わらないと、自信を持っ

て誓う事が出来るのに、明日も彼を思うことで幸福になれる自分がいるかどうかは分からないのだ。

何度も何度も、自分の気持ちを確かめる。朝起きた時に。夜、眠りにつく前に。

祈ることもなく、安堵することもなく、ただ、今の自分を見つめる。そうして、日々が積み重なっていく。

こんなに長い間、集中して自分を見詰めたことはなかった。いつ終わる作業なのか、考えもしなかった。ただ、いつか、きっと分かる日が来るだろう、と漠然と信じていたように思う。そうして、実家での夏休みが終わり、新しい学年が始まった時、ある日唐突に理解した。

ああ、そうだったのだ、と。

コントラバスの新入生募集に奔走し、Tシャツに宣伝文句を書くことを頼みに来た日。やっと掴んだ一人目の新入生の事を、満面の笑顔で誰よりも先に報告しに来てくれた日。折角コントラバスに入って来たミロに、ヴァイオリンへの転パートを勧める苦渋の決断をした日。そして、ミロがヴァイオリンに転パートする決意を告げに来た日……。

私は自分が、誰よりもアイオロスに近い場所にいる事を疑いもしなかった。ひとつひとつの笑顔、葛藤、落胆、そして再び顔を上げようとする決意、どんな時にも懸命さを失わないそれらの生様が、誰よりも私に対して開かれていることに、沁みるような幸福を感じた。その誰にも穢すことの出来ない美しさが愛おしくて、もっと側に近付きたいと願い、遂にはこの手で触れたいとさえ願った。そして、十年先、二十年先にも、自分にその権利が与えられている事を望んでいた。

十年先！　十年も先のことなど、どうして分かるだろう……私はもはや気侭な一学生ではないし、アイオロスも自分の道を歩き初めているだろう。ましてや二十年先のことなど、想像するのも恐ろしい。何も分からないうちから一つの姿を思い描くのは、己の世界を狭めてしまうようで……

それが、私という人間であり、事実これまでただの一度もそんな未来のある姿を想像したことはなかった。けれど己の希望の方は、いつの間にか、そんな恐怖を軽く飛び越えていたのだ。

ちり、と小さな音を立てて、傍らの外灯が瞬きを繰り返し、ふつりと消えた。窓から零れる明かりで腕時計を確かめると、あと十数分で九時、という時間になっていた。

…結局、自分の事に関して、他の誰かと比較しても始まらないのだ。漸く狼狽から立ち直った理性が、淡々とそう告げた。何故なら、自分の決断に責任を取れるのは自分だけなのだから。

確かに、私の感情はエリオットが見せたものほど激しくはないかも知れない。けれど、五か月間考え続けて、どうしてもそれを捨てきれない自分を知った。十五年間消えることのなかった恐怖をあっさり超えて、アイオロスが側にいる未来を望んでいる自分を知った。黙っていることが辛いなら、これが私という人間だと、飾らず素直に見せる以外に何が出来るだろう……たとえそれが、アイオロスにとって取るに足らない感情であったとしても。

大きく息を吸った。二週間前、今度のアイオロスの誕生日、正確にはその前日の二十九日に、自分の気持ちを打ち明けようと決めた。ならば、あとはその結果を正視するだけのことだ。

門限の迫った玄関から戻り、三階の自室への階段に向かって歩いた。シャワーはもう明日朝に浴びるしかないだろう…ぼんやりとそんなことを考えながら歩いていたら、突如後頭部を何か柔らかいもので叩かれた。

「なーにやってるんだ？　こんな所で。」

びっくりして振り返ると、フランス語のノートを丸めたアイオロスが腕を組んで立っていた。

「…ああ！　…すまない。ちょっと。」

正直な所、かなり焦った。頭の中にはまだ、先刻の決意がその形のまま居座っていたので。

うっかりすべらせた余計な一言を、アイオロスは聞き逃さなかった。

「…なんか謝るようなことしたのか？　お前」

「いや、そんなことはないよ。それより、何？」

後ろめたい事など何もないはずなのに、こんな風に探るような眼差しをされると心臓が跳ねる。…アイオロスは、エリオットと居た自分を見かけなかっただろうか。五月の事件以来、彼は私に対するこの類いの呼び出しにかなり敏感になっている。エリオットがそんな過去の暴徒と同一視されてはあまりにも気の毒だ。

「何って…お前、食事の後からずっと部屋にも談話室にも居なかっただろうが？　フランス語の課題でどうしても分からないところがあるんだよ。しょうがないからお前をずっと探してたわけ。」

仏語選択者じゃないお前に聞くのも癪に触るんだけどな、とアイオロスは眉間にしわを寄せた。

「でも、もう消灯時間なんだよな…。」

参ったな、と頭に手を遣る姿からは、今まで私が何をしていたかに気付いた素振りは見えない。ほっとした途端、知らずにこもっていた肩の力が抜け、少し余裕が出来た。

「取り敢えず、速攻で終わらせるから時間貰ってもいいか？」

「勿論かまわないよ。私で分かる事なら。…私も訊ねたいことがあったし。…来月の二十九日、本当に大丈夫かな？」

「？　大丈夫かって…一応空けてあるけど」

二十九日に空けておいて欲しい、という要望は、二週間前に既に頼んである。今さら何を聞くんだと、訝しげだったアイオロスの二つの琥珀色の瞳がじろりとこちらを睨む。

「お前、何企んでんだ？」
「内緒。もう予定を組んでしまったから、キャンセルはなし、ということでお願いするよ。…それじゃ、部屋に行こうか」
何事も自分から積極的に動くのが好きなアイオロスは、逆に他人にリードを取られるのがどうにも気に入らないらしい。そのいかにも居心地の悪そうな表情が思いがけなく新鮮で、つい足を踏み出した瞬間にアイオロスの背中を軽く押してしまった。アイオロスがよく私にする仕草だ。ふわっと、柑橘系ともウッディノートともつかない残り香が鼻腔をくすぐった。彼はそのあたりに置いてあるシャンプー等他人の忘れ物を平気で使ってしまうので、髪の匂いなどはその日によって違ったりするのだが、このラストノートだけはいつも同じ匂いがする。
一瞬たじろいだかに見えたアイオロスは、何を思ったか、口元を綻ばせてついとこちらに手を伸ばした。こういう顔をしているときは要注意だ、と思った瞬間、背中を押した腕を掴まれて思いきり引かれた。
「……あ！」
姿勢を立て直す暇がない。転ぶ……！
身体を支えようと前に出した手が床に着く前に、何かが腰を支えた。アイオロスの左腕だ、と知覚する間もなく、もう一方の手が頭の方に伸びて来て滅茶苦茶に髪をかき回した。
「馬鹿！　何を――――」
「わかった。わかった。内緒な。でも、フランス語は内緒にするなよ。それをやったら本当、お前かわいくないからな」
一瞬、私が拳を固めたのを悟ったらしい。アイオロスはそれ以上の手出しを止め、さっさと廊下を階段の方に向かって歩き出した。私はと言えば、暫く呆然として、アイオロスの今にもスキップしかねない足取りを眺めていた。
…何だったのだろう？　今の行動は…。人が見ていなかったから良かったようなものの……。
そこまで考えて、あの程度のこと、誰でもやっているという至極当たり前の事実に気付く。たまたま、私にそのようなコミュニケーションを仕掛ける人間が居なかった、というだけのことだ。
先刻の思考を引きずっているのか、どうも、冷静な判断が出来ていない。
「何やってるんだよ、さっさと来いよー」
アイオロスが振り返って呼んだ。口元が笑っている。…あれはこちらの動揺を楽しんでいる笑顔だ。腹の虫が猛烈に反抗を訴えた。そう長い時間、楽しい目を見させてなるものか。
私はなるべく平然と振舞って、アイオロスの横に並んだ。アイオロスが少し残念そうな表情で、私達の部屋のドアのノブに手をかけた。
お生憎様。これからしばらくは君の最も苦手なフランス語の時間だ。
どうしてもこれだけは譲れないらしい、紳士が淑女にするようにアイオロスが開けてくれたドアを有難く通り抜ける。

その瞬間、先ほどと同じ残り香が一瞬鼻腔に忍び込んで来て、漸く平常な脈拍に落ち着いた心臓がまた大きく跳ねた。

…どうかしている。意識し過ぎて、当たり前の事にまで過敏に反応してしまっているようだ。

アイオロスは、私の動揺には気付かず、そのままさっさと自分の席についてノートを広げた。私の横を抜ける時には、同じようにきっと私の匂いがしたに違いないのに、こちらはとんと気付いた気配もない。羽交い締めでもなんでも出来るわけだ。彼にとって私は、完全に、子分または悪友の範疇にあるということなのだろう……じゃ自然なことではあるが。

てきぱきと学習の準備を始めるアイオロスを眺めながら、今一度思う。

たとえそうであっても、来月には、きちんとこの五か月間考えたことを伝えよう、と。

その結果、もしかしたら今のような親密さはなくなってしまうかも知れない。けれど、少なくとも私の彼に対する感情は、以前の私からは変わってしまった。変わってしまったのに、それを隠して同じ付き合いを続けるとしたら、それは虚構だ。

変わってしまった自分を責めたこともあったが、今は、どうにもならないことだと納得している。

世の中には、どんなに努力しても、どうにもならない事がある――それが、この五か月で私が学んだ、一番大事なことであったかも知れない。

「それじゃ、先生、宜しく！」

振り返って笑う口の悪い生徒（その割に言う事はきちんと真面目にきく）の為に、私は大きくひとつ息をつき、頭を学問の方向に切り替えた。

3. In the end of November, 1987

新学期から何かと慌ただしく、時間は飛ぶように過ぎて行く。気が付けば十一月ももう終わりで、これから降誕節、定期演奏会、冬期休暇、ジルベスターコンサートと更に慌ただしい行事がめじろ押しだった。勿論、今年度の終わりにはGCSCテストがあるし、第五学年になって一段と増えたレポート課題もある。それでもまだ私は去年のうちに数学、ラテン語、フランス語の三科目のGCSCを受けてしまっているので比較的余裕があるが、殆どの学生は最低九科目を今年度の終わりに受けなければならない。皆、口に出しては言わないが、明らかに今年に入って授業に対する熱の入り具合が変わって来ていた。

学業、クラブ活動共に私の身辺が漸く落ち着いたのは、ほんの先週のことだった。最後の事件は、先々週の夜に行われた大掛かりなRaid（夜に新入生の部屋に忍び込み、布団蒸しにするというたちの悪い悪戯）の報復に、オーケストラの最上学年が奮起して立ち上がった。童虎は温厚にして勇猛、シオンは沈着にして苛烈であるから、本番を一か月先に控えて最上学年全員が自宅謹慎といった最悪の事態を避けるため、この報復作戦会議に呼ばれた私はアイオロスと共に慌てて童虎の部屋に向かった。

後から聞いたところによると、ミロにも責任があると勿体を付けていたアイオロス自身も、事件の中核になった我々の同級生をどう締め上げるかを真剣に考えていたから、猛る最上学年をとどめるつもりは毛頭なかったらしい。

私はと言えば、怒りにまかせて彼らの暴走を煽る訳にもいかず、事件発覚後、つとめてオーケストラ内部の空気に気を配っていた。管打楽器は全員報復で一致している。低弦も然りだ(あのシュラでさえ、猛るコントラバスを抑えようとしなかった)。ヴィオラは、特に自己主張はしないがミロに同情的で、今から報復後の逆報復を心配している。問題はヴァイオリンだった。ファーストヴァイオリンは上級生が多い事もあってシオンに賛同する者が多い。だが、セカンドは……。

今期、音楽の授業で組むことになったカミュが、同じ懸念を口にしていた。

曰く、ミロは同学年とのコミュニケーションが出来ていない、と。

Raid事件は、必ずしもオーケストラの外の出来事ではないのだ。

ヴァイオリンという集団行動を要求されるパートの中では、まず何にもまして同学年の結束が必要になる。結束したそれぞれの学年が、互いに信頼関係で結ばれて初めて、十数人からなる音が一つになるからだ。そして元来自己主張が強いのに常に自制を要求されるヴァイオリンパートの人間は、一般に集団の和を乱す人間に厳しい。

同学年に未だ溶け込めていないミロは、確かにどう贔屓目に見てもコントラバスパートの上級生と話す機会が多かった。その上、アイオロスに対しては明らかに敬語を放棄していた。アイオロスがそんな些事など気にも止めない人間であることは、オーケストラの誰もが熟知しているはずなのに、一部の人間にはそれが生意気と映るのだ。

ミロがほどほどにしか弾けなければ、ただの生意気な新入生で済んだのだろうが…。

聞けば四歳からレッスンを受けているというミロのヴァイオリンは、十分に上級生の一軍に溶け込めるレヴェルだ。だからこそ、ほんの少しの逸脱が、生意気を通り越して傲慢だとみなされてしまう。

そしてその眼差しは、そのまま私に向けられたものでもあった。

サン＝サーンスを乗り切る為に、そこそこ弾ける人間は皆ファーストヴァイオリンに配属された。結果、次代のコンサートマスターもファーストに配置となり、異例ながら私が通常より一年早くセカンドヴァイオリンのトップを勤めることになった。

だが、自分より若いパートリーダーの後につかねばならない上級生はどんな心境か…。

ミロへの不満は、そんなミロを御しきれていない私への不満であり、結局私のリーダーシップに対する不満なのだ。

そんな構造が見えていたので、私はなんとか暴力沙汰だけは避けなければならないと気を揉んでいた。一対多の卑怯ないじめを撲滅するために働くのはやぶさかではないが、その為にアンドリューが心配するような逆報復が起こっては元も子もない。あまりやりすぎて、逆に報復を受ける側が同情を買ってしまってはミロも余計にやりにくいだろう。特に、セカンドヴァイオリンのメンバーの中には、最上学年から特別に可愛がられているミロに反感を持つ者が出るかもしれない。

怪我をさせるほど酷い報復ではなく、絶対に教師陣に悟られず、たとえ逆報復があったとしてもミロには絶対に向かない方法……私には、ひとつだけ考えがあった。話が暴力的な方向に向かったらこの案を提案して、少し頭を冷やしてもらおう。そう思っていた。

その後、ローズハウスの童虎の部屋に辿り着き、扉を開けた後に見た光景、その先の議論の行方、更に作戦実行時の狂態については、…今もあまり思い出したくない。

ただ、童虎の部屋から戻って来た私の制服はすっかりアルコールの匂いに染まっていたし、アイオロスはかなり良い気分で出来上がっていた。私の意見は、既にアルコールの海に漬かっていた上級生から大幅な変更を受けたものの採択され、報復は私の望んだ通り、誰一人怪我させることなく行われた。今に至って、まだオーケストラの最上級生に対する呼び出しは行われていないから、報復された連中も誰一人として教官に訴えることをしなかったのに違いない。

万事うまく事が運んだ、と言ってしまえばその通りなのだが……。

ほんの一瞬、見るつもりはなかったのだが見えてしまった今回の犠牲者（敢えて犠牲者と呼ぼう）の姿を思うと、もう少し美しい所で留めておく方法はなかったのか、と淡い後悔を覚えてしまうのだ。

（だからといって、彼らに同情する気持ちは毛頭も無いが。）

そんなこんなで、ここ一か月、私には自分自身について考えるゆとりがほとんど無かった。それでも、一月前の決意は、ただその存在だけで明らかに私の心身を変化させつつあった。一度彼を想う事を己に許せば、彼につながる全てのものが異なって見える。自分の彼に対する感情はむしろプラトニック

に近いと思っていたのに、しばしば彼の残す香りに平常の脈拍を乱されるようになった。

実のところ、アイオロスは同年代の少年よりもかなりませて大人の女性にも関心を見せる割には、本人はそれほど性的な雰囲気を纏っていない。私の知らない所では別の顔も見せているのかも知れないが、写真雑誌を指差しながら楽しそうに笑っている姿は、実践を期待するよりはむしろ大人の世界を覗いて楽しんでいるといった雰囲気だ。

私の方はと言えば、この一月の間に、これまで私に対して交際を申し込んできた人々に一様に潜んでいたあの埋み火のような熱を、漸く理解し始めていた。…身の内に抱え込んだ熱は、少しずつ己を内部から浸食していく。そうして本人も知らぬ間に、己の五感も思考も侵されていくのだ。その相手しか見えないように。その相手の事しか考えられないように。そしてその熱は、吐き出され昇華されない限り累積し続け、我々の器である肉体を圧迫する…。

きっと彼らは、言わずにはいられなかったのだろう。心身を圧迫するその熱が苦しくて。そう思うと、知らなかったこととはいえ、何処かでその熱を煩わしく思っていた自分を申し訳なく思う。

因果は巡る、という。もしかしたら、そうして幾人もの情熱を切り捨ててきた私が、今度は逆に切り捨てられるのかも知れない。

大部分の諦めと、ひとひらの雪ほどの僅かな希望との挟間を行き来しながら、私は十一月二十九日の朝を迎えた。

十一月から十二月にかけてのイギリスの朝は、一年でもっとも低い温度にまで冷え込む。

日の出も八時に近く、目覚ましをかけた時間より五分前に起きてカーテンの向こうを見た空は、まだ薄赤い闇の中にあった。

同室のアンドリューとシュラがまだ眠りの中にいることを確認して、目覚ましのスイッチをオフにする。アイオロスは、昨夜から実家に戻っていて居なかった。

平日は七時過ぎに起床する彼らも、冬の土曜日には九時近くまで寝ていることが多い。かく言う私も、大抵八時頃まではベッドでぐずぐずしている。眠いわけではないのだが、外の陰鬱な暗さと、明け方の寒さがベッドから起き上がる勇気を挫く…実家にいた頃は許されなかった悪習慣だが、この数年のみの自由と承知して朝のぬくもりを満喫している。

そんな私が、今朝七時に目覚ましをかけたのは、ある手紙を書くためだった。

私はよく、考えをまとめる為に手紙を書く。相手は決まっている事もあれば、自分自身であったりもする。大抵、書かれた手紙は使用されずに層雲行きになるので、紙は適当なルーズリーフかメモ用紙であることが多い。

だが今日は、入学時に父から贈ってもらったSmythsonのレターセットを使った。

もしかしたら、この手紙を使う事になるかもしれない、と思っ

たので。

可能ならば、きちんと口で言えた方がいいに違いない。けれど、もし予想外の出来事でそんな時間がとれなかった場合には、この手紙を渡そう、と決めた。

ルーズリーフに二三枚下書きして、万年筆で清書をした。最後に、少し迷いながらも、Saga Ethelbert Shrewsbury と書き記した頃には、遅い冬の陽もようやく昇り始めていた。Chetwynd というのは私の公式の爵位であって、父の所有する爵位の二番目に相当する。だから、本当の姓は Shrewsbury なのだ。私も、親戚や父の友人等には本名を名乗る。だが、スクールの友人に対してこの名前を使うのは初めてだった。

書くだけ書いてしまったら、気持ちも落ち着いてすっきりした。もう、これ以上この問題で頭を悩ますこともないのだ。私は自分の状態に結論を出したし、それをアイオロスに伝える覚悟も決めたのだから。

シュラが身じろぎしたので、私は急いで下書きのルーズリーフを細かく折り、足下の屑籠に捨てた。今書いたばかりの三枚の便箋には、吸い取り紙を当てて、三つ折りにして封筒にしまう。手元の封蝋をとり、大きな音をたてないようにマッチで火をつけ、四、五滴封筒の上に垂らしてシールした。今度は、アンドリューが小さく伸びをした。そろそろ、彼らも起床する時間に差し掛かっていた。

着替えを持って、シャワーを浴びに行った。今日の服は、父が演奏会等の折に使うよう揃えてくれたものだ。スクールから着て行くと悪目立ちするが、丈の長いコートとマフラーでなんとか目立たないレヴェルまで覆うことにした。ロイヤルオペラハウスに着いてしまえば、それほど奇異には見えないに違いない。

食事はあまり取る気になれなかったので、コートのポケットの中のチケットを確かめ、先ほど書いた手紙を入れて、早々に寮を出た。最寄りの駅からロンドンのチェリングクロス駅まで四十分。そこから待ち合わせのコヴェント・ガーデンまでは数分の距離だから、十一時前には目的地に着くことになる。少しカフェに寄って、軽い昼食をとるくらいの暇はあるだろう。

土曜日のコヴェント・ガーデンは露店が立ち並び、行き交う人々の装いも華やかだった。立ち寄ったカフェでベーグルとミルクティをとり、約束の十二時より十分前に店を出た。明け方には重い灰色の雲に覆われていた空は、今は久々に穏やかな陽光を覗かせている。暖かい紅茶で少し暑くなり、マフラーをとってコートのボタンを開けた。そろそろ、オペラハウスに向かって歩く人々の姿が見え始めている。

地下鉄の改札に面したジェームズ通りには、ほぼ五十フィート間隔で大道芸人が立ち並び、その周りを観光客と思しき人々が好奇の眼差しで取り囲んでいた。じっくり眺めるのはアイ

オロスと合流した後のこととして、人波に逆らい改札前の街灯の下まで辿り着くと、辺りは同じく待ち合わせをする人々の姿で溢れていた。

アイオロスはどんな格好で来るだろう、と想像し、何も思い浮かばない自分に苦笑する。実のところ、彼の正装と言えば制服より他に見た事がないのだ。別に制服でも問題はないが、多分それは彼の矜持が許さないだろう。

十二時三分前、また一本の電車がコヴェント・ガーデンに到着した。この小さな駅は、ピカデリーラインだけが乗り入れており、狭い地所のためか地上まで続く階段もない。乗客はリフトで直接プラットホームと地上との間を行き来するのみで、電車が到着すると地上に留まっていたリフトが地下に呼ばれるため、すぐに分かるのだ。ほどなくして、三基ある改札前のリフトの扉が開き、黒々とした人の集団が狭い箱から溢れ出た。アイオロスは、滅多に待ち合わせの時間に遅れない。きっとこの電車に乗っているとみて、私は押し寄せる人の流れに視線を走らせた。

溢れ帰る人波を全てスキャンするのは結構大変な作業だ。結局目指す姿を見つけることが出来ず、どうやら次の電車か、と一息ついた所、おい、と目の前の背の高い紳士に声をかけられた。

…え？

思わず、口を開けて目の前の紳士を見上げてしまった。普段よりも更に数インチ高く見える身長（これは何も底のある革靴を履いているからというだけではあるまい）、緩く締めたタイと、セミワイドスプレッドの大きめの襟。溜息をついて頭にやった手の袖口には、瞳の色と同じ琥珀のカフスボタンが覗いている。…何よりも、いつも洗いざらしのまっすぐな髪がムースで柔らかく流されていて、それがゆうに年二つぐらいは加算させて見せている。

呆れ顔を隠しもしない、普段よりも数段大人びた姿のアイオロスが目の前に立っていた。

内心で、制服姿しか想像出来なかった自分を詫びた。アイオロスのセンスは決して悪くはないから、それなりの格好をして来るとは思っていたけれど、これほど印象が変わるとは思わなかったのだ。

「…ああ、びっくりした…　そんなきちんとした格好見たこと無いから…」

本当はそれだけではなくてかなりどきりとしたのだけれど、咄嗟にそう言い訳をしてしまった。流石に、目前で声をかけられれるまで気付かなかったのはきまりが悪い。と、人いきれで暖められた風が改札の方から押し寄せて来て、再びどきりとした。…どうも彼は、コロンをつけているらしい。

アイオロスは、私が全く彼の姿に気付かなかったことに痛く気を殺がれたらしく、暫くの間脱力していた。彼ほど見栄えがいいと、脱力していてもそれなりに様になるから得だ。それから、諦めたように軽く口笛を鳴らして言った。

「やっぱりそういうの似合うな、お前」

…折角紳士の格好をしているのだから、口笛は止めた方がいいんじゃないか？　アイオロス。

それでも、その瞬間覗いた普段の悪戯っぽい表情に、少々固くなっていた息がほっと緩んだ。

「君もよく似合っているよ。失礼だけど、本当に見違えた。…たまには他の人にも披露すればいいのに」

心底からの言葉だったのに、アイオロスはやる気なさそうに肩をすくめる。

「首がきつくて敵わない」

思わず、声を立てて笑ってしまった。そう言えば、彼は出会って二言め、こう言ったっけ。

『制服の第一ボタンを留めているのはゲイの印だ。外しとけよ』

よくわからない文化だと思ったが、その場で外したことを覚えている。家で彼が第一ボタンまで留めているとは到底考えにくいから、つまりは彼はほとんど襟元までボタンを留めたことがないということなのだろう。

「そんなこと言ったって、君だって大人になって働き始めれば、毎日タイを締めて出勤しなければならないんだよ？」

折角の男前が惜しいので、もう少し粘ってみる。と、アイオロスは想像もつかなかった解決策を提示して見せた。

「出勤に使うのは、今やってる首絞め（ネック・タイ）じゃなく、首巻（ネック・ウェア）だろ？　首に飾られてる事に意義があるんで、ボタンで止めてたってバレなきゃ平気さ」

「…そんな物が有るのか？！」

つい、声を高くして訊ね返してしまった。

ああ…そういえば確か以前に、テレビで日本の高校生の特集をやっていて、女生徒の制服のリボンがボタン式になっていたのを見たことがある…蝶結びが初めから綺麗に作られていて、それに紐がついており、その先にボタンがついて制服に留めるようになっているものだ（紐でぶらさげているのが丸見えで、あまり美しいとは思わなかったが。どうせなら蝶タイのように、ちゃんと首に一周まわして紐が見えないようにした方がいいと思う）。でも、彼らも、男子生徒のタイはちゃんと結ぶようになっていたと思うのだが…

言葉をなくしてアイオロスを見詰めていたら、彼は更に恐ろしい事を言った。

「少なくとも、Tシャツにネクタイプリントしてジャケット着てるってのは、アメリカにはあったな」

…唖然。

二三秒して衝撃の去った頭でぼんやりと考えた。…流石は合理化の国、アメリカだ。時折、その狂的なまでの合理化への執念に、呆れを通り越して感嘆してしまう…少なくとも、便利なのか不便なのか分からないアイデア商品に比べれば、ネクタイプリント付きTシャツはアイオロスのような人間にとって天恵に等しいものだろう。

思わずその場で固まっていたら、アイオロスがふいと顔を背けた。何故か、彼は面白くなさそうだった。そんなに今日の正装が息苦しいのだろうか。そうだとしたら、少々悪い事

をしたかも知れない。
「まぁ、いいや。で？　どこに連れてってくれる訳？」
早足で歩き始めたアイオロスに、慌てて並んだ。やはり、どこかつまらなそうだ。私は彼の内心に近付きたくて、もう一歩彼の隣に寄った。つまらないのは私がまだ行き先を内緒にしているから？　そんなに、他人にエスコートされるのは面白くないのか？
「察しのいい君の事だから、この駅で待ち合わせた時点で既に予測がついていると思うけれど」
コートのポケットから、チケットの入った封筒取り出してアイオロスの方に差し出した。アイオロスは歩みを緩めない。祈るような気持ちで、私は彼がこの封筒を受け取ってくれるのを待った。中身は、決して安くはない贈り物。アイオロスが何の躊躇もなく受け取るとは思えなかった。
それでも、どうしても二人で観たかったのだ。きっと観始めてしまえば夢中になってくれると思えばこそ、高額の贈り物をする世間知らずと言われても諦めたくなかったのだ。
「ロイヤルオペラハウスのローエングリンだよ。…それなりに一生懸命考えたのだけれど、このくらいしか思い浮かばなかった…君の誕生日のお祝いに。…受け取ってもらえるかな？」
依然として前を向いたまま歩いているアイオロスの瞳を出来る限り覗き込んで、今度は言葉で頼んでみた。アイオロスは観念したように封筒を受け取り、予想通り、その中身を見てその場に立ち尽くした。
…ああ…やっぱり、このチケットの金額に驚いている……当然だろう。ただの演奏会ではない。オペラの一番いい席のチケットなのだから。
私は、用意して来た答えをもう一度頭の中に並べ直した。次に来る言葉は、きっと『こんなもの受け取れない』だろう。もしかしたら、非常識だとお説教が続くかも知れない。
そうしたら、今日のところはとにかく謝って、席を押さえてしまったことを理由に付き合ってもらうつもりだった。後日、非常識だと分かっていてやったのだと、ゆっくり弁明するしかないだろう。本当に、私自身が行きたかったのだと言葉を添えて。
アイオロスは、たっぷり五六秒はその場に固まっていた。やがて、彼は小さな溜息をついた。どうか、もう帰るなどと言わないで欲しい。そう祈っているところに、思いがけないアイオロスの言葉が届いた。
「……ありがとう…。滅多にない機会だから有難く鑑賞させて貰うよ。」
柔らかい、今日の陽差しのような穏やかな笑みが、今度は眼差しを逸らすことなく、真っ直ぐに私の方を向いた。何も言わず、私の贈り物を受け取ってくれたのだと、そう悟った瞬間に、言葉にならない痛みが、静かに胸の芯を締め付けた。
きっとこういうのを、切ない、と言うのだろう。もしかしたら、こんな高額な贈り物は彼のプライドを傷つけたかも知れない。それでも彼は、ただ微笑って受け取ってくれた。私の好意を

疑わずに信じてくれたことが嬉しかったし、その内心の戸惑いを思うと苦しかった。

きっと、私はひどく心配げな表情をしていたのだろう。アイオロスは今までの静かな笑みを崩しておおらかに笑い、いつものように私の髪に手を差し込んでくしゃくしゃにかき回した。…今日はそれなりにきちんとした格好をしているのだから、髪を乱すのは勘弁してもらいたいのだけれど…。

「ローエングリンか…俺、ちゃんと観るの初めてなんだよな…。お前は観た事有る？」

すっかりいつもの口調に戻って、アイオロスが再び歩き始める。

その軽やかな足取りを追いながら、言い訳がましいけれど、後日ではなく今きちんと言おう、と決めた。

これだけは、分かって欲しい。決して、軽い気持ちで購入したチケットではないということ、私が君と観たかったのだという事実を。

「私もないよ。以前、バイロイトの映像を一度観ただけ。流石にワーグナーのオペラでこの席をおさえるのは私も金銭的に厳しいから…でも、ローエングリンは去年の定期演奏会の演目だったし、どうしても君と観たかったんだ。それで、この先二年演奏会はおあずけという約束で、父に貯金取り崩しの許可を貰った。私が観たくて誘ったのだから、遠慮なく楽しんでもらえたら嬉しいな。…何しろ、こんないい席、父と一緒の時だってとれた事がないからね」

アイオロスは、ほんの一瞬立ち止まりかけ、それからまた思い直したように歩き出した。顔は真っ直ぐに、オペラハウスの方向に向いたままだ。その毅然とした姿の中に、却ってアイオロスの動揺を感じた。流石に、貯金を取り崩したとは思っていなかったのかも知れない。

スクールの同級生は、私が自由に使える小遣いに不自由していないと思っているようだが、実際には同学年の平均より下回っているというのが実情だ。その分、生活に必要な道具や今日の衣装など、社会的に必要とされるものは支給してもらっているので不自由はしないが、私が自分の判断で使える金額は月に十数ポンド程度で、休日外出する際の移動費も勿論これに含まれる。

アイオロスは私の普段の生活を見ているから、きっとそんなに金銭的自由がある訳ではない事を知っていただろう。それだけに、今回のチケットの出所が不審だったのかも知れない。

また小さく、アイオロスが溜息をついた。…どうにか、納得してもらえただろうか？　心配になって、真っ直ぐに前を見詰めて歩く横顔を覗き込む。ふと、その首が巡り、軽く私を見下ろした。いつの間にかその表情は明るく澄んで、本当に楽しそうないつものアイオロスの笑顔になっていた。

「了解」

ロイヤル・オペラハウスの歴史は古く、一七三二年のシアター・ロイヤルに始まる。当時人気のあった「乞食オペラ」で成功をおさめたリンカーンズ・イン・フィールズの役者、ジョン・リッチがその成功資金で創設したものだ。そんないきさつで、もともとは芝居やパントマイムの上演が主だったが、数年後にはかのヘンデルがシアター・ロイヤルの為に書いたオペラやオラトリオが上演されるようになり、より芸術的な意味合いを持つ劇場へと変貌した。

その後、一八四七年の大改造、火災による焼失を受け、現在の原型である劇場が建てられたのが一八五八年。名前も、シアター・ロイヤルからロイヤル・イタリアン・オペラを経て、一八九二年に現在のロイヤル・オペラハウスとなった。

建設から既に約一世紀半を経ている劇場は、老朽化が激しい。近々、この重要な文化遺産の保存と劇場の更正の為、大規模な改修工事が予定されているという。私としてはクラシカルなオーディトリアム（観客席）のデザインが気に入っているので、改修後も是非このデザインを残して欲しいと願うところだが、一階のオーケストラ・ストールから四階の天井桟敷席まで縦長に積み重なったこの設計では舞台が一部見えない席が大量に出来てしまうため、観客の収容率という意味ではあまり効率は良くない。劇場側が現在のデザインを採択するか否かは、五分五分といったところだろう。

我々の席はグランド・ティアの正面席最前列なので、私はアイオロスを伴って階段を上がった。グランド・ティアで観劇するのは初めてではないが、正面の最前列を確保出来た事は流石にない。今回も、追加公演のマチネーでなければ間に合わなかっただろう。ハウスの電話から、休み時間に何度もコールした成果だ。選択肢としては、オーケストラ正面のオーケストラ・ストールを押さえる道もあったが、本日のプリマドンナがノーマンである事と音響とを考えて、少々距離を犠牲にして二階席を取った。音響は確実に二階の方が良い。…後は見栄えの問題で、ノーマンは確かに素晴らしい声を持っているが、十代のエルザ姫を演じるには少々ふくよか過ぎる…相手のドミンゴが決して大柄ではないので、近くで見ると余計に圧迫感が増してしまうのだ。

席について辺りを見渡すと、我々の両隣りは落ち着いた身なりの老夫婦だった。軽く会釈して席に着き、先刻買ったばかりのパンフレットを広げる。見れば我々のような若年のペアは皆無に等しく、アイオロスはどうも先刻から落ち着かないようだった。私もたまにちらちらと投げられる好奇の視線に気付いてはいたが、いずれ暗くなるまでのこと、と構わず解説に目を通していた。ローエングリンはドイツ語の楽劇だ。フランス語はそこそこ分かるが、ドイツ語はまだよほど注意して聞かないと聞き取れない。

話のあらすじを読み、歌詞に目を通す。と、その集中力が途切れたところで、ふと隣から投げられる視線に気付いた。顔を上げる。視線が合う。どきり、と心臓が波打った。

アイオロスが、ひどく真剣な瞳で、こちらを見ていた。

「…何？　始まるよ？」

思わず、黙っているのが気恥ずかしくて、そう訊ねた。彼は明らかに私の顔を見ていて、その眼差しはまるで工芸品か何かを吟味するかのようだったので。

「あ、いや暇だから見てた」

彼は特に慌てることなく、さらりとそう言ってそのまま舞台の方を向いた。

…暇だから、という理由で他人の横顔をまじまじと見つめるという習慣は、私にはないのだけれど。

彼がそう言うのだから、この年頃の友人関係とは、そういうものなのかも知れない……。

オーケストラ・ボックスから、細いAの音が幽かに流れ始めた。これまで銘々にソロをさらっていた管の音が、一本のAの音に集約していく。私はそれまでの思考を打ち切り、舞台の方に意識を集中した。

『ローエングリン』は三幕からなるワーグナーの比較的初期のオペラで、全曲を通すと三時間ほどかかる。彼の後期の代表作『ニーベルンゲンの指輪』が全曲十五時間を四夜に渡って上演することを思えば短い方なのだが、クラシック音楽に慣れていない人間にはかなり冗長に思える時間に違いない。

クラシック音楽を聞くようになって三年目のアイオロスにとって、この三時間という時間は退屈だろうか。些かの不安もないではなかったのだが、彼は結局、最後まで熱心に舞台を見詰めていた。

舞台が終わった後、私は同じオペラハウスの中にあるレストランに、食事の予約を入れていた。レストランは二つあって、一方はとても私の手の出る額ではないが、バルコニーにあるオープンエアの方ならばそれほど値段は張らない。今日は二人ともそれなりの正装をしていたので、いつものようにどこかその辺に腰を下ろしてフィッシュ&チップスという訳にもいかなかったし、折角オペラを楽しんだ後なのだからゆっくり余韻を楽しめる方がいいだろう、と、予めファックスしてあったものだった。

ところが、その旨を伝えてバルコニーに向けて歩き出そうとしたら、アイオロスがまた目を丸くしてその場に立ち止まった。

「レストラン？」

「え…？　そうだけれど、何か…？」

それほど奇異なことをしたつもりはなかったので、もう暫くアイオロスの言葉を待ってみる。果たして更に二三秒の後、アイオロスは自分の額をパチン、と手のひらで叩いて言った。

「……いや…十六、十五のお子様が連れ立って予約席付きのレストランか…って思っただけだ。…普通、外のチップス！とか、ここなら露店やカフェ、適当な店なら山ほどあるだろう…」

それから、口の中で小さく、少なくとも俺はレストランにお

前を連れて入った事はないな、と呟いた。
そうは言っても、君も私も今日の装いでは、とても十六、十五のお子様には見えないと思うのだが…。
ムースで流した前髪が少し額に落ちかかって、先刻より若干ラフなイメージになったとはいえ、アイオロスの雰囲気は依然としてオックスブリッジかロンドン大学の学生、といったところだ。
普段は私よりよほど周囲がよく見えている彼であるのに、今我々がそういったファーストフードに入ったらそれはそれで周囲の注目を引く、ということには気付いていないらしい。真面目な顔をして自分の年齢を挙げるアイオロスに、今まで知らなかった一面を見たような気がして、思わず口元が綻んでしまった。
こんな風に、年齢相応の戸惑いを見せることもあるのか。
私の目から見る彼は、いつも同級生より一、二年先を進んでいて、戸惑ったり焦ったりすることなどまるでないように思えるのだけれど。
「いや、実は年齢を三歳ほど誤魔化したんだ。ファックスだったしね」
私が今感じている喜びが表情に現れないよう、注意しながらそう言うと、アイオロスは天を見上げながら、漸く私の我侭に降参してくれた。
「手回しがいいこった。」
「たまにはね。」

折角折れて頂いたので、クロークまでは彼の意志を尊重して有難く先導してもらう。アイオロスは、こういった人込みを歩く時は必ず体一つ分自分が前に出て、私が歩きやすいように道をあけてくれる。これは私だけでなく、誰に対してもそうなので、意志というよりは殆ど彼の習性なのかも知れない。
クロークから先は私が先に立って、殆ど初めてと言って良いコンダクターを勤めさせてもらった。これで乾杯のワインを見立てておけば完璧だったのだけれど、何処で知人が見ているか分からないので、流石に酒類を注文する訳にはいかない。ジュースというわけにもいかずミネラルウォーターを頼んだら、アイオロスがなんとも気の毒としか言い様のない表情をした。
気持ちは分かるけれど、お楽しみは明日ご両親のもとで、ということにして貰おう。
「では、一日早いけれど。十六歳の誕生日おめでとう」
「…一応、ありがとう…十五歳君」
あまり積極的でない礼の割には、勢い良くグラスの水を飲み（半分自棄だったのかも知れない）、それからがっくりと首を落とす。
「水…で乾杯って…虚しくないか？」
心底脱力した声音だったので、覚悟して口に含んだものの、予想以上に衝撃が来たのかも知れない。
「本当は、虚しい、ということを知っていること自体が問題なのだけれどね？」

「アルコール性水酸基は化学でやっただろう？　知らないことの方がこの年になったら問題だ」
アイオロスはまだ恨めしそうにグラスの水を睨んでいる。流石に少々気の毒になって、私は早々にこの話題を切り上げ、話を今見たばかりのローエングリンに移した。
「で、どうだった？　ドミンゴのローエングリンは。」
私自身は、ドミンゴがもともとバリトンの出身だったこともあって、彼と並び称されるパヴァロッティ、カレーラスの中では一番好きだ。所謂テナーの見栄を切らせるとパヴァロッティに及ばないが、テナーには珍しい知性的な雰囲気がある。…と、世の中のテナーが怒りそうなことを考えていたら、アイオロスは更に失礼なコメントをさらりとつけた。
「イタリア人のローエングリンってのは、イギリス人のロミオと比べてどっちが許されると思う？」
「…え？」
イタリア人のローエングリン、という観点は私にはなかったので、思わず返答に窮して何の捻りもない反応を返してしまった。ドイツ人テナーの重い声の方が良かったと言うことか。あり得る感想だ、と思っていたら、アイオロスは全く私の考えもしなかった観点から、このドイツの名楽劇を一刀両断にした。
「もしローエングリンがイタリア人だったら、あそこで別れるなんて真似は絶対にしないだろう。っていうか、聞かれなくったってあったことでもなかったことでも自分の事をペラペラ喋って、エルザに呆れられて、離縁状叩き付けられて、跪いて許しを願い出てるってパターンだろ？　あれって実は最高のコメディの可能性をねじ伏せて悲劇に仕立ててないか？」
…思わず、口に含んだスープを吹き出すまいと口を押さえてしまった。確かに今日の配役では、エルザ姫の貫禄の有り様といい、そちらの方が理に適っているかも知れないが…。だがドミンゴも十分健闘したし、それなりに良い出来だったのだ。
「…いや、確かにワーグナーにはちょっと軽い声かなとは思ったけれど…そうだな、イタリア人にはない精神性かも知れない…何しろ、中世騎士道の手本みたいな楽劇だからね。ドイツ人テナーと聞き比べてみたら、気になるかもしれない」
でも、と私は先を続けた。アイオロスはいまひとつお気に召さなかったようだが、私はワーグナーだからドイツ人でなくてはならない、ということはないと思うのだ。エルガーはイギリスのオーケストラでなくてはならない、とか、ウィンナワルツはウィーン・フィルでなければ云々、というお約束は、マニアの間ではよく交わされる会話だが、私は音楽の可能性というものはそれほど狭いものではない、と思う。勿論、もっともワーグナーらしいワーグナーはやはりドイツのオーケストラの十八番であろうし、どんなに下手なイギリスのオーケストラでも威風堂々だけはエルガーらしく演奏する、という地域色はあるだろうけれども。
そんなことを考えていたので、つい多分に誤解の火種をは

らんだ台詞を口にしてしまった。
「確かにイギリス人のロミオでは情熱的に口説けないかも知れないけれど、私がジュリエットだったらラテン系のロミオの口説きには落ちないよ。世の中、多種多様のロミオがいていいんじゃないかな？　ローエングリンも然り」
「お前がジュリエットだったら？！」
ああ、やはり…その一言にひっかかってしまった。
内心で己の迂闊を悔んだがもう遅い。言ったことに嘘はないが、これから告白しようという相手に向かって、警戒させるような発言をしてどうするのだろう。
案の定、アイオロスは大仰に天を仰ぎ、まるで芝居の台詞を読み上げるかのような口調でよわばった。
「ラテンの情熱にも融かされず、アングロサクソンの理性にもほだされず、そうするとジュリエット＝サガはどんな人種の口説きになら落ちるんだ？」
それから一変してくすくすと笑い、小さなミニトマトを突き刺したフォークを掲げて言う。
「お前のジュリエットって全然誰にも靡かずに、結局修道院にでも行きそうだ。お前って、なんかそんな事よりも好きな音楽とか『学問』とかやってる方が幸せだろ？」
ここまで引っ張るのはむしろ脈があると思っていいのだろうか。つい希望を含みがちになってしまう予想を、アイオロスの楽しくてたまらない、といった表情を見て即座に訂正した。…矢張り、ただ面白いからからかわれているのだろう。だが、ここまで来たら間違った認識は正してもらわなければ困る。
「いや、そんなことはないけれど…いい人がいれば考えるよ？」
本心からそう言っているのに、アイオロスは「でもお前のいい人の基準て凄く高そうだな」ときれいにこの話をおさめてしまった。
…その「いい人」が、目の前にいるのだけれどね……。
漸く、零れそうになった溜息をかみ殺した。ここで言ってしまえばよかったのだろうか、と思いつつ、もしアイオロスが断った場合、互いに食事が不味くなることを考えると、やはりああ答えるしかなかったとも思う。折角誕生日祝いをしているのに、この後の食事がいたたまれない雰囲気になってしまうのは忍びない。最初の予定通り、別れる間際に言おうと決めた所で、アイオロスがぽつりと言った。
「ローエングリンってあんまり共感出来ないんだよな…。自分が惚れた相手と親父の掟と量りにかけて、掟の方を選ぶもんか？　結婚しといてあっさりさよならってどうも『アホか？』って思うんだよなぁ…」
この一言を聞いて、漸く、私は彼がドミンゴに突っかかる理由を理解した。彼はドミンゴが気に入らないのではなく、ローエングリンの役柄そのものに納得がいかないのだ。
成程、彼がローエングリンであったなら、掟に背いても、父親と戦う事になっても、一度守ると決めた相手を見捨てる真似はすまい。その感想がいかにも彼らしく、私には好ましく思えた。

「喜楽と同時進行で、芝居ほど話が進まないから、どうしても物語はご都合主義になってしまう向きはあるよ。それでも、ワーグナーは結構物語の主題にも気を配った人物なのだけれどね」

事実、ワーグナーの集大成とも言える「ニーベルングの指輪」では、父であるヴォータンに背く娘ブリュンヒルデという図式（ただしこれは彼女の愛の為ではない）もあれば、愛の為に近親相姦を犯してジークフリートを産むジークムントとジークリンデという関係もある。ワーグナーの楽劇は、後期になるにつれてより人間的に、言い換えれば泥臭くなっていく。だが、この比較的初期の楽劇にも、その人間的な感情の片鱗は見えているのだ。

「…でも、ローエングリンはこう言っている…『聖杯に背いてここに留まっても、私に与えられた力は全て奪われてしまう』と。ブラバンド公国の王として迎えられた自分が弱くなる事は許されない、とも取れるし、自分自身に与えられた聖杯の力を無くしたくない、とも取れる。…もっと穿った見方をすれば、もはや聖杯の恩寵を失った自分を、エルザが見限ることを恐れたのかも知れない。私は勿論君のような考え方の方が好きだけれど、そこで躊躇してしまう気持ちも分かるような気がするよ。…当たり前のように持っていたものをなくしても、人は変わらずにその相手を愛し続けることが出来るだろうか？」

実のところ、私がこの楽劇を気に入っているのは、この部分に共感を覚えたからだった。たった一度の契約違反の為に、何故ローエングリンは去らねばならなかったのか？　ワーグナーの後期の作品は、もっと直接的に人間の弱さを表現する。この「ローエングリン」も、一般の解説書ではエルザの弱さばかりが強調される。だが、本当に弱いのはローエングリン自身ではなかったか。

「お前は、それが至難の事だと思う？」

ふと、アイオロスが琥珀色の双瞳をきらめかせてこちらを見た。先刻までのどこか納得いかない表情ではなく、既に胸の内に確固とした答えを得ている眼差しだ。彼は空になった皿の上にフォークを置くと、両手を顔の前に組み合わせ、その指の上に顎を乗せた。何か議論をする時、相手の言葉を待つ時の、アイオロス本人も気付いていないらしい彼の癖だ。

彼の言葉と眼差しは、言外に彼が私とは反対の主張を抱いていることを伝えていたが、私はそのまま自分の疑問を投げかけた。

「エルザは、聖杯の掟を知ってなお、ローエングリンを引き止めた。でも、そのままの言葉を信じて彼が公国に留まったとして、彼らは本当にその後幸せに暮らせただろうか？　エルザは、夢の中に現れて、彼女の危機を救ってくれた強いローエングリンを愛したんじゃないのか？　夫がもはや強くないことをその目で目の当たりにした時、彼女はそれでも変わらぬ愛情を夫に対して抱き続けることが出来ただろうか…」

エルザはおそらく、模範的な公女であったのだろう。彼女は確かに、一度夫となった相手を最後まで敬い続けたかも知れ

ない。だが、人の感情はそれほど理性的ではない、と、私は思う。ローエングリンは、その事を知っていた。だからこそ、一時の感情に惑わされず、引くべき時に引いた。その後ろ向きな態度に柔弱さを感じる一方で、それが結局最も平和な終わり方だったのだと、彼の決断を認める自分がいる。

続けて、と先を促すアイオロスの言葉に、私は遂にどうにも拭い去れない己自身への不審をあらわにした。

「器量が良い、お金や地位がある、強い、という魅力も、本人そのものに起因する性格や価値観からくる魅力も、どちらもただそれが『在る』という事実によって人の感情が動かされる、という意味では変わらないよ。お金や地位がどうしても大事な人には、その他の全てが些事に見えるだろう…相手の性格を愛した人が、その他のことに全く頓着しないように。そこに卑俗な愛か高尚な愛かといった区別を付けたがる人も居るけれど、私には大した違いがあるとは思えない。ただ、一生のうちの些細なことで相手を失いたくなければ、互いに相手のより失われにくい部分を愛することを祈るだけだ…人を好きになるという感情も、その感情がある時失われてしまうことも、己の意志ではどうにもならない事だから。」

思いがけない、深刻な沈黙が我々の間に落ちた。こんな固い話をする為に誘った訳ではなかったはずなのに、私は既にこの話の行く先をコントロールする努力を放棄し、この議論に没頭していた。アイオロスは、真面目な話をする相手に対し、絶対にいい加減な対応はしない。それを信じているから、つい甘えが出てしまったのかもしれない。

アイオロスが、組んでいた指から顎を外した。そうして満足げに一つ息を大きく吸い込むと、椅子の高い背もたれにゆっくりと背中を預け、右手の五本の指を私の前にかざした。

「お前の言っている事はこうだよな？　まず一番目」

親指を折って、言葉を続ける。

「聖杯の力を失ったローエングリンが、自分自身の価値観の再確認とエルザの自分への感情の再確認を強いられる事になっただろうと言う事」

一呼吸空けてもう一本、左手で右手の指を折る。

「二番目、人が人を愛し続ける場合、相手のより失われにくい部分を愛せた場合にその関係が長続きする可能性がより高くなるのではないか」

三本目の指を折る。

「三番目、人を好きになる感情も、それがある時消えてしまう事態が発生する事も、意志の範疇にない」

三本の指が折り畳まれたところで、そう言う事だよな？と彼は私に確認した。こんな風に、人の話を簡潔かつ的確にまとめ、すぐに列挙する事が出来るのはアイオロスの優れている点だ。私がただ二言イエス、と頷くと、彼はＯＫ、と笑って身を乗り出した。

「まず三番目からいこう。…意志の範疇に無い相手への好意は、like であって love じゃない。affection でもない。人を永続的に愛して行けるかどうかは強い意志が必要だ。覚悟、信念

と言い換えてもいい」

たまたま通りかかったボーイが、アイオロスの台詞を小耳に挿んだのか興味深げに私達を眺めて去って行く。アイオロスは、かまわずに続けた。

「相手の何かが自分に好ましく写る。それが惹かれると言う事だ。そして、相手の好意を得たい、と願う事そこにあるのは既に意志だ。自分の意志によって相手に自分を認めさせ、自分も相手を認め、その関係が長く続く事を希望する。全て、相互の意志だ。その意志と強い欲求が無い限り、好きという感情がふらふらしたって当然だ」

意志、という言葉を何の躊躇いもなく使う彼は、続く二つの懸念も容赦なく一蹴した。

「一番目。相手のより失われにくい部分を愛せた場合…なんて弱気な事を考えるんなら、最初から止めとけ。結局この問題は相手の上辺を愛しているかどうかって事だからな。卑俗・高尚なんて考える事もナンセンスだ。自分にとって必然性のある上辺なら、どんな努力をしてもそのオプションを相手が取り零さないようにしてやればいいんだ。『金持ち』が大事な問題なら、すってしまった金を相手が取り戻せるように、自分が相手にもう一度付けてやればいいんだけだ。『容姿』に価値を持ったんなら、相手のそれが失われないように自分も努力すればいい訳だし、失われたら整形でもなんでもしてやればいい」

そこには何の異論もない。黙って次の言葉を待つ。

「それをせずに、相手のそれが失われたから愛が冷めましたってのは手抜きだ。出来合いの物が好きなんであって自分がその相手の魅力の保持に力を出すという手間暇を出し渋ってるんだ。『金持ち』『容姿』なんだっていいさ。そこに惚れたった、惚れられたっていうんなら死守すればいいだけだろ相手も自分も。だから、意志が必要だ。そこに執着されるのが辛いっていうんなら、それは最初から愛し合ってた訳じゃない。そこの確認も怠った、さらにお粗末で手抜きな『こっこ』だ」

アイオロスの言葉は正論だ。その一片の隙もない正論を聞きながら、私は漸く己を理解した。本当に私が恐れているのは、相手から愛すべき何かが失われることではなく、ある日突然その愛すべき美点が己にとって最も大事なことではなくなってしまうことだ、と。

「最後の一番目。以上の俺の考え方から行くと、そこに必要なのは失われた聖杯の力をどうやって取り戻すかって事であって、別れるか別れないかの話じゃないだろ？　父親に返して貰うのか、ブラバンド公国でそれに代わる力を自分で得るのか、そりゃローエングリンの考え方次第だが、何にせよ行かないでくれと言われたんだ。そこにはエルザのまだローエングリンを愛し続けたいという意志があるんだろうから、もしエルザに愛して貰いたければ死ぬ気でなんとかすりゃいいし、それが出来ないんならエルザの事を愛してたって訳じゃなく、聖杯の力を持つ自分が自慢だったってだけだぜ？　あの男。却下だ。結婚なんか一生するな、相方に迷惑だって感じだな。

あ！　だから親父はなんとかバカ息子を売りに出したかったのかもしれないぜ？　無理矢理あんな条件出して押し付けてきたのかもしれないな。全くいい迷惑だ」

最後を笑いに紛らせて、アイオロスはただの一度も淀むことなく彼の主張を述べ終えた。

…何か言わねば。そう思いつつも、すぐには言葉が出て来なかった。

これらの言葉は、アイオロスそのものだ。彼という人間を形作るもっとも根底の幹の部分が、これらの言葉にあますことなく現れている。そのことを心から好ましく思うのと同時に、少なくとも今は私が抱える不安を共感してもらえることはないのだろう、と寂しさを覚える。

おそらく最初の出発点から、私達の問題意識は異なってしまっているのだ。私には既に、相手の何かが自分にとって好ましく映る、というその事実が己の制御下にはない。だからこそ、失われる前に守る為の努力は行えても、いざ本当に失ってしまったときに必ずしも同じ努力ができるとは限らない、と思うのだ。自分にとって一番大切だった美点が相手から抜け落ちてしまった時に、人は何を感じるか。その瞬間に相手への執着が失せてしまったら、取り戻す為の努力など出来る筈もない、と思うからだ。

相手から大切な何かが失われたと知ったその瞬間に、己の執着の行方を努力によって操作出来るならば、それはその執着を自分自身が制御出来るという事にほかならない。だが私は、少なくとも私自身に関しては、その努力が如何に虚しいものであるかを知っている……自分が相手に向ける情熱を抑えることはある程度可能だが、情熱を抱けない相手に情熱を傾けるのは不可能だ。存在しないものは、何をどうしようと「無い」。

アイオロスはどうなのだろうか、と改めて考えた。彼の言葉によれば、失われたら取り戻す為の努力をすればいい、と言うのだから、彼自身の情熱や執着は制御出来ると言う事なのだろう。あるいは、たとえ執着をなくしてしまっても、失われた美点を取り戻すための努力をし、取り戻せればよいのだと言うかもしれない。その時には、彼の中の執着もまた復活するのだろうか。

いずれにしても、その努力が出来ないなら、所詮最初から本気ではなかったのだと彼は言うだろう。

「…君らしいな……」

漸く、その一言が口から溢れた。それ以上は胸が一杯で、何も言えなかった。

もはや、何を訊ねる必要もなかった。彼の主張は一貫している。愛情とは努力で培うもので、そこに愛という感情が時折持つ非常に狭量な一面を認めない。そのような狭量を含むものは、初めから本物の愛ではないと言い切っているのだ。

だが、私にとっては、そのような狭量こそ、恋愛感情が思考の生み出した幻想ではないことの証だった。だからこそ、どれほどこの狭量を嫌っても、どうしてもこの感情を「なかったこと」には出来なかった。自分の愛情は狭量だ。だが、そ

の厳然とした事実に挫けてしまいそうになるぎりぎりの境界で、一筋の希望を見る。アイオロスだって本当はそのはずで、彼自身もそのことは分かっているのだ、と。それでもなお、彼は努力が起こす奇跡を信じている。

そうでなければ、何故、突如尋ねられた質問にあれほど淀みなく答えることが出来るだろう？……

彼の言葉は、おそらく、彼自身が何度も己に問いただして得た信念なのだ。

そうして、そんなふうに、地に足を付けて努力の「力」を信じることの出来る彼を、たまらなく好きだ、と思う？……。

長い弁論にたった一言の感想しかつけなかった私に対し、アイオロスは、少々残念そうな表情をしながらも、そうか？と軽く笑っただけでこの話題を流してくれた。いつか、私の中の不安が過去のものになる日が来たら、今日の日の心象について語る機会もあるかも知れない。私は、アイオロスに対する申し訳なさをそんな淡い希望で宥めながら、その後はとりとめもない話に談笑しつつ、比較的のんびりとした夕食を終えた。

オペラハウスを背に駅の方へと歩きながら、私はコートのポケットに押し込まれた手紙に触れ、たったひとつの問いを繰り返していた。本当に、私にも、努力の起こす奇跡を信じることが出来るのか？　と。出来ないのなら最初から止めておけ、と、アイオロスの自信に溢れた、しかし容赦のない言葉が耳に蘇った。その覚悟がないなら相手に迷惑だとまで言い切ったアイオロスは、私の弱気など、きっと認めないに違いなかった。

私は、アイオロスに見損なわれたくなかったのだ。たとえ私の告白に彼が驚き、戸惑ったとしても。

中途半端な覚悟で、相手の迷惑も顧みず同性に告白するような人間だと軽蔑されるのは、嫌悪感を抱かれるよりずっと辛かった。

彼に告白するならば、最後までこの思いが持続するよう、努力しつづけなければならない……

後に、その難しさを思い知らされる事になる私も、このときはまだ、十五年目にして初めて生まれた感情を無かった事にしたくないという思いが勝っていた。迂闊にも、私は出来る限りの努力をしてみよう、と心に決めた――その「努力」とはどんなものであるのか、思い描くこともなく、確かな表象もないままに。

チェリングロス駅でヘイスティング行きの電車の時間を確かめ、寮に届けた帰寮時間までまだ間がある事を確認した。この列車は、アイオロスの家から近いロンドンブリッジ駅を経由し、その後ケント州方面に南下する。

思いきって言った。「ロンドンブリッジ駅まで送って行く」と。

「なんだ？　それじゃまるっきりデートコースだぞ？」

切符を買っていたアイオロスが、からかい半分、不審半分

の眼差しで私を振り返った。

…こういう台詞を聞くと、彼の本当の気持ちはどうなのだろう、と考えても仕方のないことを考えてしまう。自惚れているつもりはないが、結構贔屓に入られていることは知っている。おそらく、過去には、ただの友人以上に意識されていた期間もあっただろう（そうでなければ、五月に見せたアイオロスの怒りの説明がつかない）…。だが最近は、アイオロスの私に対する行動は極めて普通だった。行動は普通なのに、時折、どきりとするような事を言う。

「…そうかな。」

どう返答したものか考えあぐね、ついいつもの悪い癖で曖昧な返事を返すと、アイオロスは軽く笑って、更に私の思考を混乱させるようなことを言った。

「そうそう。世間に疎い割にはちゃんと女の喜びそうなとこは押さえてる」

軽く流してしまえばよい台詞なのかもしれないが、先刻の若干不審気な眼差しが、簡単にそうさせることを阻んだ。

…これはもしかして、男性であるアイオロスはそういうことを喜ばない、という意思表示なのだろうか？

「…そんなに特別なことをしているつもりはないけれど…普通、一日楽しく過ごして、帰りの電車まで時間があれば、もうしばらく一緒に話していたいと思わないかな？」

思わず真顔になって、至極基本的なことを訊ねてしまった。

アイオロスが再三言うように、私はあまり同年代の少年が考える「常識」に詳しくないから、こんな単純な事でさえ、時折相手に迷惑をかけているのではないかと不安になるのだ。

アイオロスの方も、私が真面目に問い返した事が意外だったらしい。今度は素直に、賛同の返事が返って来た。

「ああ、なるほど。思うかもな」

何かすっきりしないやり取りの後で、私は地下鉄の切符を買い、アイオロスと一緒にチューブに乗り込んだ。夕刻になり、流石に休日の地下鉄も少し混み始めていたが、ウォータールー駅でジュビリーラインに乗り換えた後は人影もまばらになり、座席には二三の空席が出来ていた。二駅後で降りる事になる私達は座席に座ることなく、ドア付近の空間に向かい合って立った。既に身長百八十センチを超えるアイオロスは、丸く削れたチューブの肩の部分にひどく窮屈そうに収まっていた。

ふと斜め前方の席を見ると、音大生と思しき金髪の女性が、ヴァイオリンケースを膝に挟んで一心に手元のスコアを見詰めていた。その華やかな巻き毛は、私に彼女よりもっと明るい金髪の後輩を思い起こさせた…ミロ・フェアファックスだ。実際、彼がこうしてチューブに乗っていたら、やはり熱心に楽譜を見詰めているのだろう。彼は恐るべき集中力の持ち主で、音楽に対しては本当に勤勉だった。

ミロが加わってくれたことで、セカンドヴァイオリンの音のまとまりは格段に良くなった。ミロの音は、イタリア系の

非常に明るい音色で、それほど音量を要求しなくてもよく通る。はにかみやであまり自己主張をしないが、後ろからしっかりした音でパート員を援護して欲しい、と頼んだら、漸く伸び伸びと弾いてくれるようになった。その実力とセカンドヴァイオリン全体の音の変化は誰もが認めるところであり、もともとコントラバスに入団した彼をヴァイオリンに転パートさせた決断に異論を挿む者はない。

ないのだが……。

「アイオロス、ちょっと」

昨日見た光景を思い出して、私はアイオロスに声をかけた。コントラバスパートの面々が、オーケストラの団長とコンサートマスターを努める童虎とシオンに呼び出されるという、穏やかならぬ一面だ。

地下鉄の騒音が、声の伝播を邪魔した。さりとて大声を出す訳にもいかず、なるべくはっきりと二度程繰り返したのだが、もともとあまり通る質ではない私の声は目と鼻の先に立っているアイオロスにさえ上手く届かなかった。彼は二、三度首を傾げたあと、少し私の方に身を屈めて何かを小声で言った。聞こえない。私は少し身を乗り出した。すると、彼は今度は私の耳元数センチの距離まで顔を寄せて言った。「何?」と。

ふわりと、アイオロスの熱が頬と首筋に伝わった。瞬間、私は呼吸を止めていた。今、呼吸をしては駄目だ…この距離では気付かれる。私が、彼の匂いに反応してしまう事に。

告白するつもりで来たのに、今更気付かれるも何もないということに思い至るほど私は冷静ではなかった。

手摺を握る手に力を込めて、無理矢理気持ちを切り替えた。今は、ミロの話に集中しよう。

「昨日、コントラバスパートがシオンやドウコに呼ばれていただろう? 随分深刻な顔をしていたけど、何だったんだ?」

「ああ、あれ?ミロの蓑虫禁止令が発布された」

アイオロスは、言うだけ言うと、人目を気にしたのかすぐに体を起こした。

やっぱり……。意識の中空に引っかかっていた不安が、漸く有るべき場所に落ち着いた。コントラバスの面々は、根は真面目だが決して深刻にはならない。彼らの表情がパートの色に似つかわしくないものだったので、問題は彼らの外にあって、それはミロに関する事なのではないかと、薄々感じていたのだ。

練習前にコントラバスのソフトケースに包まって寝る習慣は、私も気にかかっていた。別に悪い事だとは思わないが、今のミロがやるには早すぎる行動だ、と。しかし、やっと伸び伸びとしてきたミロを畏縮させるようなことは言いたくなかったし、何よりもコントラバスの上級生が歓迎しているものをこちらの一存でやめさせる訳にもいかなかった。ヴァイオリンには、コントラバスから待望の新入生を引き抜いた弱みがある…。週明けあたりに、スチュアート上級生と相談してみよう、と思っていた矢先だったのだ。

「そうか…確かにその方がミロにとっては良いかも知れないけ

ど…でも、寂しがるだろうな。言うのは君が？」

なるべく背筋を伸ばし、アイオロスに近付いて訊ねたのだが、やはり届かない。アイオロスはもう一度、今度は唇が耳に触れそうな程私に近付いた。…この距離は少々辛いが、背筋に力を入れ雑念を払ってもう一度質問を繰り返す。と、手短ではあるが、声の振動が伝わるほどの至近距離から返事が返って来た。

「スチュアートが。一応、ベースの総意ってことで。後の細かいフォローは俺がする」

成程。それが最も、ミロにもショックの少ない方法だろう。彼が最も慕っているアイオロス本人に言われるよりは……

電車が、サザーク駅に滑り込む。ひとしきり、歯痛を引き起こしそうな金属音が耳を直撃し、我々は耳を覆って会話を中止した。チューブのドアが開く。私の右手の座席に腰掛けていた紳士が立ち上がり、失礼、とドア側に立っていたアイオロスに声をかけ、電車を降りて行った。電車が再び動き出す。油がきちんと回っていないのか、動き始める時にも再び派手な金属音が立ち上がり、結局我々が会話を再開出来たのは、電車がサザーク駅を出て一分ほど過ぎた後のことだった。

「君がフォローしてくれるなら有難い。ミロもそんなに落ち込まなくて済むだろうし…」

先刻、電車のブレーキ音にかき消されてしまった台詞を繰り返す。と、アイオロスはびっくりしたようにこちらへ向き直った。

「あいつって落ち込むのか？　取り合えずベース区域立ち入り禁止ぐらいは言っておくつもりだけど」

「立ち入り禁止？　どうして！」

今度は、私が驚く番だった。ただでさえ注意を受けて衝撃を受けるだろうに、その上立ち入り禁止とは……

「は？　どうしてって、あ！　着いたぞ」

また派手な金属音がして、列車はロンドンブリッジ駅のプラットホームに滑り込んだ。ここで別れるつもりだったが、ミロの話がまだ済んでいない。アイオロスの家まで送って行こうと決めて、一緒にチューブの改札を出た。寮に帰るには、ここから地下鉄ではなくヘイスティングス行きの列車に乗れば良い。

アイオロスは、一向に帰路につこうとしない私を怪訝に思ったらしかったが、駅を出てすぐの歩道に店を構える花屋から大きな百合の花を五本ほど買うと、何も言わずそのまま彼の家に向かって歩き出した。電車の高架を潜って外に出れば、既に日は遠く西空に傾きかけていて、成程これから人の家を訪ねるには遅い時刻に違いなかった。もとより彼の家に上がるつもりはなかったので、半年ぶりに訪れる街を眺めながら黙ってアイオロスの後を歩く。彼の住むサザーク地区は、対岸にソーホー地区やシティといった賑やかな一角を望む割には静かで、且つ生活の便も悪くない。私も最初の学年には再三彼の家に泊めてもらって、土曜日のバラ・マーケットやロンドン・ダンジョン、サザーク大聖堂などに連れて行ってもらっ

たものだった。
駅前の人込みを抜けて落ち着いた所で、私は改めてアイオロスの方に向き直り、先の疑問を質問の形にして口に上らせた。
「ミロは、漸く畏縮していた態度が和らいできたところなのに…唯でさえ堅苦しいこと言われてまた硬くなってしまうかもしれないのに、どうして立ち入り禁止まで？」
フォローとは気落ちしたミロのケアをしてくれる、という意味だとばかり思っていた私の質問は、アイオロスには理解は出来ても、その意図が分からなかったらしい。ちらりと車の流れを確かめ、あっさり赤信号を渡ったアイオロスは、ひどく怪訝な表情で眉を顰め、それから花束を抱えていない方の手を広げた。
「どうしてって…。それが道理だろう？　問題解決策として」
「道理？」
「問題は、あいつが練習前に蓑虫になってることじゃなく、そもそもコントラバスに入り浸ってるって事だろうが？」
「それは……」
確かにその通りなのだけれども…。
暫く、私はアイオロスに向けていた顔を正面に戻し、頭の中で渦巻いている思考の整理に集中した。アイオロスの言う通り、結局問題はそこにある。ミロは、ヴァイオリンパートに転パートしたはずなのに、ヴァイオリンのコミュニティには参加していない。普通なら誰かが声をかけそうなものなのに、コントラバスに対する負い目もあって誰もミロがコントラバスに遊びに行ってしまうのを引き止めなかった。そんな最初の僅かな食い違いが、どんどんと両者の溝を広げてしまった……。
折角楽しんでいるものを禁止し、居心地の悪いセカンドヴァイオリンに縛り付けようというのは可哀想だ、と思うのは、確かにその場限りの感傷だ。ミロの為にもよくないし、第一、そうさせてしまった自分の責任を放棄することでもある。
漸く、自分のすべき事が見えたので、私は大きく息を吸って、もう一度アイオロスの方に向き直った。
「そうだな…ここから先は私の仕事だな。わかった。後は私がなんとかするよ。」
「ちょっとまて。お前の仕事とか、後はお前がなんとかするとか、そういうことじゃないだろ？」
ずっと前方を見詰めていたアイオロスが、慌てたようにこちらを振り返った。今日一日、何か具合が悪いらしくアイオロスはあまり私の方を見なかったが、そんな鬱屈も吹き飛んでしまったようだ。
常に己に対し厳しく「何が出来るか」を問うアイオロスは、自分以外の誰か一人に責任を負わせてしまうのを好まない。彼がそのように答えることは計算済みだったので、私は彼が私を引き止めにかかる前に、急いで返答した。
「いや、私の仕事だよ。これはヴァイオリンパートの問題だ。正しくはセカンドヴァイオリンの、ということだけれど」
まだ納得のいかない様子のアイオロスに、続けて今考えた

内容を述べる。

「…ミロは、確かに他のヴァイオリンのメンバーとは少し違っているかもしれないけれど、仕事はきちんとしているし、練習にも遅れないし、それほど目くじらを立てられるような事はしていない。彼に向かっている不満の半分は、むしろパートをまとめきれていない私に対するものだ。…それが、より弱い立場にあるミロに向かってしまっている。私はミロに頼んでヴァイオリンパートに来てもらった。それならば技術云々より先に、彼がどうしたらヴァイオリンに溶け込めるか、真剣に答えなくてはならなかったんだ…それを怠って、ミロの技術ばかり重視した。今ミロが責められているのは、むしろ私の責任だ」

漸く、厳しかったアイオロスの表情が若干考え込む様子に変わった。私は、自分自身に対する決意も込めて、今の私に出来る限り前向きにこの話を結んだ。

「だから、私ももっと積極的にパートのメンバーと話をするよ。勿論ミロも連れて。どんなきっかけでもいい、まず声をかけなければ始まらないって、君が教えてくれただろう？」

不意に、アイオロスが驚いたような表情を見せて、立ち止まった。私としては、本当に思った通りのことを述べただけであったし、このような考え方が出来るようになったのは事実アイオロスのお陰だったから、何一つ特別なことを言ったつもりはなかったのだけれど…

いつのまにか、私達はサザーク大聖堂の敷地内まで歩いて来ていた。彼の背後にはサザーク大聖堂の、しっとりと落ち着いた姿がある。今や西の空に沈もうとする秋の陽光が、私達の進む方角から差し込んで、そのゴシックの石壁に零れ落ちていた。私より半歩前に立つ彼の表情は、オレンジの明るみに縁取られて、いつもより曖昧に見えた――と、その時、アイオロスが笑った。落ちかけた夕の光の中でも十分に分かる程、はっきりと。

「子鴨が、殻を付けた雛を連れて練り歩くわけだ」

そう言って、いつものように、彼は私の髪をくしゃくしゃにかきまわした。

その瞬間、今朝から、いやおそらくはもっと以前から、彼の中で何かわだかまっていたものが解けたのだ、と、私は感じた。そのくらい、その笑顔は自然だった。五月以来、あの誕生日の出来事がまるでなかったかのように、ずっと彼は「普通」だった…その「普通」に違和感があったことに、私はこの時初めて気付いた。

「…子鴨か……。まあ、シオンの親鴨に比べれば十分子鴨かもしれないけれど…」

思わずふくれつらをしてしまったのは、私もどこかで張りつめていた緊張が解けてしまったからだ。アイオロスはそれ以上言い返さず、代わりにもう一度私の頭に手を伸ばした。また髪を乱されるかと首を竦めた瞬間、今度は彼の大きな手が、撫でるように私の髪を掬い上げた。

「ここまで来たんだ。寄ってけよ」

そうして、どきりとするほど、優しい、滲むような笑顔で、こちらを見た。

もしかして――――

一瞬、そんな言葉が脳裏を駆け抜けた。その言葉のすぐ後ろを、危険、という言葉が、後に続く苦だったフレーズを抹消しつつ伝播していった。危険。確かに危険だ。今の私の観察眼は、全く信用ならない…。

何故、こんなにも彼に目を惹かれてしまうのか。何故、仕草や表情の一つ一つが美しく見えてしまうのか…。既に私は、私の目に映るアイオロスの姿が普段と違ってきていることに気付いていた。まるで内部から見えない光を放っているかのように、どんな場所にいても、彼の姿は輝いて見えた。数カ月前は、こうではなかったはずだ。それを知っているから、今の自分がおかしいのだということがよく分かる。

初めて出会ったころから、アイオロスは私に対して優しかった。あのころの笑顔と、今の笑顔が同じでないと、どうして言い切れるだろう…？　もしかしたら、違うのかも知れない、それでも、その違いを確信するには、今の私の感性はあまりにも平衡からはずれてしまっている。

改めて、他でもない自分が変わってしまったのだと、そう思い知らされて胸が痛くなった。

もし、彼にとって私が普通の友達だったとしたら――彼は、こんな風に変わってしまった私に対して何を思うだろう？

ただ、驚くだけだろうか。…それとも、裏切りだと感じるだろうか……。

気が付けば、私はアイオロスの言葉に頷いていた。彼が家に入る前に、自分の気持ちを打ち明けて帰るつもりだったのに、一瞬の弱気がその勇気を挫いた。焦りが、胸の奥深くを浸食し始めていた。延ばせば延ばす程、タイミングを捉えるのが難しくなる。彼の家に上がって、とりとめのない話をして、帰りがけに、きちんと言うことが出来るだろうか、と。

その所為だったかも知れない。今にして思えば消極としか言いようがないのだが、私は彼の部屋でその話をする可能性を全く考えなかった。もしアイオロスに嫌な思いをさせたら――その表情を見ている時間をなるべく減らしたいと、無意識のうちに考えていたのかも知れない。

アイオロスは、ちょっと待っててくれ、と残して、サザーク大聖堂の中に入っていった。彼の後ろ姿を見送ったその瞬間、急に外界の音が大きくなり、私は驚いて教会の門を仰いだ。オルガニストがクワイヤ・サーヴィスの伴奏を行う音色が、開かれた入口から零れて微かに響いてくる。今突如として始まったわけではないのに、そのことに私は全く気付かなかったのだ。

吸い寄せられるように、温かな光を零す入口を潜った。中では、二十人程の合唱団が若い神父に率いられて夕の祈りを捧げていた。…突如、とうに覚悟していたはずのひとつの言

葉が、私に重くのしかかってきた。ただ一言、『罪』と。

少年達の透明な声が、フルストップのオルガンの音の衣を纏い、高い天井を伝って覆い被さるように聖堂内を押し包んだ。

音の圧力に押し潰されて、動けない……。

膝が砕けぬよう、両の拳を握りしめて音に抗うのがやっとだった。いつも、どんな時にも救いをもたらしてくれた音楽が、美しい天使の姿で私の覚悟に楔を打ち込んだ。

……神様。

アイオロスは、人格を有する神の存在を信じてはいまい。私自身、イエス・キリストがかつて人間として存在したとしても、彼の記憶を有する万能の神が本当に存在すると信じているわけではない。

それでも、かの神に捧げられた音楽には、心から共感する。そしていつの頃からか、その共感に負い目なく浸りたい一心で、聖書の説く善悪を受け入れた自分がいる。

もう一度、神様、と胸の内で呟いた。呼吸を整え、足に力を込めて立った。…悪い事ではない。これは、決して醜いものでも間違った感情でもない。

だから、まっすぐに顔を上げた。臆するのでも、挑むのでもなく。

人が、人を愛おしく思う感情なのだから、きっと、赦しが与えられる事を信じて。

アイオロスの用事が終わる迄のつもりが、いつしか聖歌隊も退場し参列者の人影もまばらになっていたらしい。いつの間にか背後に立っていたアイオロスが、軽く指先で私の肩をこづいた。

「おい、もうそろそろいいか？」

「あ…ごめん！　待たせたかな……」

「いーえ」

天を仰いで諦めの表情を作るその姿が、少なくともコートをとり買った荷物を足下に下ろす程度には待たされた、と、雄弁に物語っている。と、不意にアイオロスは悪戯っぽい眼差しになって笑った。

「音楽には勝てません」

…つい、つられて笑ってしまった。…彼は、先の私の表情を見ただろうか。

こういう、さり気ない彼の優しさが、好きだ。

すっかり暗くなった教会の門を潜ると、そのすぐ西側の角に立つ建物がアイオロスの家だった。彼のご両親は大変気さくな人達で、忙しい時刻に急に訪ねた私を喜んで迎え、夕食に誘ってくれた。夕食は既に済ませてきた旨を母上に伝えて丁重にお断りしたら、何故か少し残念そうに、また次の機会にと仰って下さった。

アイオロスに先に部屋に上がっているよう言われたので、既に勝手の分かっている家の階段を昇り、二階の部屋に上が

らせてもらった。スクールではオーケストラに所属し、まって何年もクラシック音楽に馴染んでいるかのような堂々たる弾きぶりの彼も、家ではロック一辺倒らしい。壁には私の知らないロックバンドのポスターが所狭しと並んでいて、壁にかかっているTシャツも二年前のツアーのアイテムのようだ。全く知らないバンドばかりだと思っていたら、コンポのすぐ隣に、ゲイリー・カーのポスターがあった。世界で唯一、ストラディバリのコントラバスを使用しているコントラバス奏者だ。これがコントラバスかと驚くような超人技の持ち主で、一度だけテレビで見た時にはドボルザークのチェロ協奏曲を弾いていて度肝を抜かれたことがある。

コンポの前に散らばっているCDやカセットのタイトルを眺めようと扉を閉めたら、扉の裏側にはマライア・キャリーのかなり露出度の高い水着姿のポスターが貼ってあった…少々びっくりしたが、普通、我々の年頃の少年というのはそういうものだろう。

色とりどりの、何がつまっているのか全く分からないCDのパッケージを眺めていると、アイオロスがダージリンの入ったウェッジウッドのカップと、また私の知らないロックバンドの写真がプリントされたコーヒー入りのマグカップを持って上がって来た。小さなトレイには、綺麗にベリー類で飾り付けられたタルトが添えられている。アイオロスの母上は料理が上手で、こんな風に突然訪ねても何かしら手作りの菓子を振舞ってくれるのが常だった。私は母の手料理というものは食べたことがないので、こんな時にはふとアイオロスが羨ましくなる。…アイオロスに言えば、きっと顔を顰めるだろうけれども。

部屋に入るなり、アイオロスは早速タイを外し、襟元のボタンを二つばかり外した。やはり、よほど窮屈だったらしい。それから手持ち無沙汰に立ち尽くしている私の方に向き直って、愉しそうに笑った。

「何か興味ありそうなのある？」

絶対ないだろう、と、琥珀色の瞳が疑いもなく決めつけている。

「…一番静かなのはどれかな……」

私としては、そうとしか答えようがない。何しろ、ロックはうるさいもの、という自分でも偏見だと分かるような印象ぐらいしか、この分野には知識がないのだ。実のところ、音量の勝負をしたら、クラシックだってフルオーケストラのフォルテシモは十分にうるさいのだが。

アイオロスは、一瞬呆れたように絶句したが、すぐに気を取り直して一枚のCDを取り出した。

「静かって…お前…。まあ、いいや。取り敢えずこれとか聞いてみるか？ ウィ・ウィル・ロック・ユーとか、有名だぞ？」

ジャケットを覗き込むと、「Queen」というバンド名が目に入ってきた。…成程。名前だけなら知っている。

「知らない奴って、結構希少」

…いや、多分聞いた事はあると思うのだけれど…曲名とバ

ンド名を知らないので、確かめようがない。
取り敢えず、CDを受け取ってかけてみた。
八小節、十六小節、三十二小節……
ひたすら、黙って聞く。…それでも、抑え難い疑問がわき上がって来る。
…何故彼らは同じ繰り返しを何小節もやっているのだろう……
何故延々ホ短調なのだろう?…ベートーベンだってここまで同じコードの繰り返しはやらない……
ワーグナーのような半音階進行をやれとは言わないが、一小節同じコードを聞いたら次はせめて別のコードを聞きたいと思ったものではないのか?
思ったよりもうるさくなかったが、和声のヴァリエーションが固定されているのが、ものすごい閉塞感で息がつまる。
「…ふめん…。やっぱり合わないみたいだ……」
きっかり一四四小節聞いたところで、とうとう降参した。せめて一曲くらいは通して聞いてみようと思ったのだが、どうにも終わりが見えなくて辛くなってきたからだ。
つまらない顔をするかと思ったアイオロスは、私の弱音を聞いた途端に声を立てて笑った。
「そうだろうな…。まあ、サガには無理だろうな」
そうして、かけていたCDを取り出しながら続けた。
「ミロは結構Queenは好きだって言ってたぞ。そっちのは今度貸してくれって言われたからもってくやつ」
「レッド…何?」
「レッド・ツェッペリン。聞いた事ないか?」
「…名前だけなら……」
クラスメートの会話で覚えた名前だ。最初の頃は、新しいバンド名を聞く度にどういう作風なのかを訊ねていたのだが、毎度決まって知らない事に驚かれてしまうので、最近はそれもしていない。
「…やっぱり、普通は少しは聞くものなんだろうな…こういうのも。…慣れれば大丈夫なのかも知れないけど……」
思わず、溜息をついてしまった。オーケストラのメンバーとは話せても、クラスメートの大半とは音楽では話が通じないのだ。どんな話題でも、相手を失望させない程度には通じていなければならないと教わって来たし、実際その通りだと思うのだが、どうにも慣れるまでの作業が苦痛で、まだこの分野には足を踏み出せないでいる。
私は真面目に言ったつもりだったのだが、アイオロスにはよほど無茶な挑戦に思えたのだろう。私の言葉を聞くなり、彼は勢大に吹き出し、コントラバスの椅子に腰掛けた足をばたつかせた。
「…!絶対慣れないよ、お前は…!」
そして、無理するな、と私の髪をひとかき混ぜした。そうして、そのままその手で散らばっていたCDをかき分け、今度はこれはどうだ、と、その下に埋まっていたカセットテープを取り出してデッキにセットした。

「あ……」

ほっと、肩の力が抜けた。聞こえて来たのは、ピアニシモのヴァイオリン。最初の一小節が終わる前に、曲名が分かった。今日聴いて来たばかりの、ローエングリンの一幕前奏曲だ。

「…ああ、なんだかほっとする……」

やっぱり、弦の音は優しくていい。…と思っていたら、心地よく音に浸っていた全身に、再び軋むような硬直が走った。

「…間違った!……これ、去年の定期演奏会か?」

快調な滑り出しのお陰でプロの演奏に聞こえたが、どうやら我々の演奏だったらしい。八本のソロヴァイオリンの内の一本が盛大に音を外したのを聴いて、その他諸々の事件が記憶にフラッシュバックした。

…そういえば、最後のオクテットでも音程が崩壊したんだった……。

漸く辿り着いたクラシックで、我々の演奏をかけてくれるとは、アイオロスもなかなか意地が悪い。

「…前言撤回!胃が痛いかも……」

「あはは……バイオリンは全然気持ち良くないよな、この曲。一瞬だけおもいっきり弾けるかと思ったらまたかそけき音だもんな。オレだったらフラストレーションが溜まって堪まらないな。そのかわり、コントラバスは美味しかったぞ!」

あまりに愉しそうなので、つい憎まれ口を叩いてしまう。

「ああ、あの時は本当にコントラバスが羨ましかったよ。トゥッティに入ってからはどうせフルヴァイオリンになるのだし、自分一人くらいベースと一緒に半音昇進行やってても大丈夫なんじゃないか、と本気で思った。コントラバスの面々、本当に気持ちよさそうに弾いていたしね。…少々、音量が大きすぎたけれど」

「おいおい、そんな無茶な…!半音進行なんてボーイングが違うんだ、一発でバレるじゃないか!」

「ボーイングなんて、どうにでも合わせられるよ。いつも旋律ばかり弾いていると、たまにはベースもやってみたくなる」

実の所、パートとしては、主旋律を受け持つ高音のパートよりも中低音の方が好きなのだ。特に、和声の進行を決める低音パートには昔から興味があったのだが、オーケストラ入団時にヴァイオリンの経験を尋ねられ、問答無用でヴァイオリンパートに配属になってしまった。

アイオロスは、私の愚痴など最早聞いていないのか、うっとりと宙を見上げて言った。

「でも、確かに気持ち良かったよなぁ…。またやりたいな、オレは」

「いつか、きっとまた機会があるよ。在学中は無理かもしれないけれど、OBオーケストラもあるし…」

「…バランス、確かにベースが大きいな…。でも、ここ、チェロも一緒だったんだよな…。オレ達のせいだけじゃないぜ?シュラの奴も結構気持ち良く弾いてた」

曲は折しも、フォルテシモのクライマックスに差し掛かっている。それほど大人数ではないのに、ベースがかなり強く鳴っ

ていた。スチュアート上級生の音がはっきり聞こえる…と思ったら、クライマックスでシンバルが四分の一拍遅れた。

「まあ、ワーグナーだからね。これくらいペースが鳴ってるのも好きだけれど？　私は。ただ、気持ちよさそうなベースを横目に自分がヒステリックな高音を弾いていなければならない、というのがちょっと悔しいだけで」

「あ、思い出した！　そういや、お前、かなり神経質な顔して弾いていたよな？　シオンなんかは途中諦めてたけど？　一瞬、ホールの天井仰いでた。耳がいいのも考えものだな」

最後のオクテットを指しているのだと思い当たり、私は盛大に溜息をついた。現在最上級生のショーン上級生が、一か所だけ音程が上がりきらず、二拍の間不協和音とも協和音ともつかない和声がホールに鳴り響いてしまったのだ。四度の和声で、同じ音を弾いていた私はなんとか音程が不協和音にずり落ちない努力をしたのだが、霧の湖水を渡る白鳥と聖杯を表す澄んだ音色まではまだ程遠かった…

「ああ…思い出させないでくれ…あれは私の努力ではもうどうにもならなかったんだ…」

「いや、あれって、お前の努力でどうにかなるものだったわけ？」

「…いや…どうにもならないけど…でもこの和音は違う！　って分かっているのに同じ音を弾き続けると言うのは、かなりつらいものだよ？」

練習では完璧に上手くいっていただけに切ない。完全に人ごとのアイオロスは、またもや爆笑して、つま先だけ床についた足をぱたつかせている。

「成程な！そりゃ確かに辛いだろうな！でも、あの後、ショーン先輩、土下座せんばかりだったじゃないか。オレは、あの瞬間のオクテッドのメンバーの顔が忘れられないね！　円卓の騎士もかくやな表情だった！　でもまあ、低音は楽しかったよ、凄くな！」

「ヴィンス、ヴィンセント！　埃が落ちるわよ！」

先刻から、アイオロスが足をぱたつかせているのが下にも聞こえていたらしい。階下から母上の声が聞こえてきて、アイオロスは素直に標準より長い足をコントラバス椅子の足掛けに納めた。

…そういえば。

ふと、彼のベッドを見遣って、私はある事を思い出した。ロンドンブリッジ駅で彼が買って来た、大輪の白百合の花束がそこに置かれたままになっている。折角美しく咲いている花が可哀想で、私はつい話題を逸らせてしまった。

「ああ、そう言えば、あの花束、母上へのプレゼントじゃなかったのか？　持って行ってあげればきっと喜ぶのに」

その瞬間、アイオロスの表情から、何故か不自然なほど急に笑みが消えた。彼は、不意に私から目を逸らし、襟元に手をやって溜息をついてから、ああ、あれな、と小さく呟いた。

私は何か間違ったことを言ったのだろうか。理由の掴めない不安が、気の置けない会話に浮き上がった心を急速に冷やした。最近、アイオロスは時折こんなふうに急に顔を逸らし、

面白くなさそうな表情を見せる。何がまずいのか、私にはいつも全く検討もつかないのだが、理由を尋ねたところで曖昧に誤魔化されるだけだろう、ということだけは分かる…彼が、そのような不愉快を隠そうとしている努力だけは見えるからだ。

アイオロスは、大きく息をつき、ベッドの上の花束を手に取った。そうして、彼の机の椅子の上で硬直している私の前に立ち、ひどく真剣な表情で言った。

「…これは、お前に。今日の礼」

そうして、先刻までの騒ぎぶりがまるで嘘のように、紳士然とした態度で腰を屈め、私の前に花束を差し出した。

…一瞬、何が起こったのか、私には分からなかった。こんなに立派な花束を、何故私に？　数秒してから、漸く、アイオロスの言葉の意味が胸に浸透し始めた。時間がかかってしまったのは、彼の表情がその内容の割にあまりにも深刻だったからだ。私は、ゆっくりと胸中で呟いた。…では、今日のローエングリンは迷惑ではなかったのか、と。やっと知覚した時、ほっと暖かい感情が胸を満たし、漸く私はその柔らかい感動を享受することが出来た。

「…有難う……」

腕の中に引き取られた百合が、ふわりと甘い香りを辺りにふり撒いた。ほんの一瞬、このような礼は女性に対して行われるものではないだろうか、との疑問が脳裏を過ったが、そんなささやかな疑いなど打ち消して余りあるほど、アイオロスが今日の私の行いに対し、感謝を示してくれたことが嬉しかった。

それに、花は決して嫌いではないし……。

「…いい匂いだな……」

その時、不意に、左耳に暖かい体温が触れた。アイオロスの手だ――そう気付いた瞬間、再びどきりと心臓が跳ねた。

顔を上げる。視線が合う。

先ほどから私の髪先を玩んでいた彼の右手が、今度は私の耳を覆いながら、緩く頬にかけられている。

サザーク大聖堂の横で見た、あの、切なくなる程優しい笑顔が、静かにこちらを見下ろしていた。

ああ…まただ……。

きれいな、胸の痛くなるような、やさしい微笑。

何故、こんなに美しい表情を私に向けてくれるのか、分からない。いや、本当は分かっているのかもしれない……でも今は、そんな詮索に思考を費やす事もしたくない。

理由を探せば、また己自身の不安と期待に今の幸せをかき乱されるのだから。

本当に不思議なことに、私はその時、ただ一秒でも長く、この彼の微笑を見つめていたいと願った。お願いだから、もうほんの少しの間だけ、何も言わないで欲しい、と。もしかしたら、次の一言が、今の幸福を遥かに上回る幸せをもたらしてくれるかも知れない…それでも今の、この彼の最も美しい表情を私に向けてくれているという夢のような現実に、い

ま暫く浸っていたかった。それは、いつも結論に向けて邁進する事しか知らない私の性格とは正反対の心の働きで、私自身にとっても新鮮な驚きだった。

すっと、アイオロスが私の頬を撫でた。思考を止めた私の前で、彼は静かに彼の一歩を踏み出した。

「お前を驚かすと思う。不快にもさせるかもしれないし、怒りかもしれない。けれど、俺がそういう感情をお前に抱かせる事は、全く本意じゃなかったって事だけ信じて欲しい」

そうして、じっと探るように、私の瞳を覗き込んだ。

アイオロスにとっては、反応の返らない私の姿は不安をかき立てる存在以外の何物でもなかっただろう。私は意識の何処かでその事を思い、申し訳なく思ったが、それでも何故か身体は動かなかった。ただ息をつめて彼の瞳を見つめることしかしない私の姿は、一体彼の瞳にはどう映っただろう。

アイオロスが、ほんの少し困ったように笑い、私に触れていた手を離した。そのぬくもりを惜しむ間もなく、彼は静かに、彼の中の真実を告げた。

「お前が好きだ。お前がこの手の事で苦労しているのは知っているから、自分がこんな事を言うのはかなり良心が咎める。…半年ぐらい、自分で何とか制御出来ないかと努力して来た。それでも、お前に対する自分の…望みは変わらなかった。どうしても、お前に触りたいし、触れていたいと思う」

緩慢な思考が、漸く、アイオロスの言葉をひとつひとつ、ゆっくりと解析し始めた。

私を好きだと言う?…そう、それは知っている。最初から、彼に気に入って貰えていることは知っていた。

でも……私に触れたいというのは?

それはまさか……

「黙ってそういう目でお前を見てる方がお前に対して失礼だろ? だから、俺の今の状態をお前に報告しただけだ。今後、お前に余計な気を使わせる気はない。これでお前に丁重に断られたからと言って変にオレがお前に対しての態度が変わる事も絶対にない。ただ、知って貰いたかっただけだ」

言葉を失ったままの私を気遣うように、気の毒な程紳士的な補足がその後に続く。更に、アイオロスはそれでも反応の返らない私を心配したのか、過剰なスキンシップは控えるようにする、と心配げにアフターケアの約束までしてくれた。

…本当に、申し訳ないのだけれど。

いつもなら、十人並みには回転するはずの思考の速度が、全く追い付いていなかった。

私の思考は、まだ彼の告白の最初の部分で留まっていた。

Love、という言葉には、色々な意味がある。

私は両親を愛しているし、オーケストラの友人にも、皆それぞれ少しずつ違うけれど、ただ Like では言い尽くせない人々がいる。

きっと、存在する人間の数だけ、愛情の形も存在するのに違いない。

私にとって、側に近付くだけではなく、そこから更に手を延ばして直接その肌に触れたいと思う存在は、ただ一人だけだった。

二月からの体験で、それが異性ではなく同性であることにはさほど戸惑いを感じなくなっていたが、その分異性であれ同性であれ、互いが互いに向ける感情の種類を一致させることが如何に難しいかを、身に沁みて感じていた。

どんなに好きな相手であっても――その好きの種類が違っていたら、どうすることも出来ないのだ。大切な友人であるエリオットに、私が何も出来なかったように。

だから、皇室しいほどの期待と不安を抱えて祈る。…どうか、彼もまた、自分が彼を思うように、自分のことを思っていてくれますように、と。

「…まさか、先を越されるとは思わなかった……」

頭の中で呟いたつもりのその言葉を、うっかり口にしてしまったその瞬間、緩慢に流れていた思考が一気に正常の速度で動き出した。硬直して止まりかけていた血流がもとの流れを取り戻し、はっきりと赤面していることが知覚出来るほど、耳朶から頬にかけてが熱くなった。

嬉しい…嬉しい……嬉しい……!

…気を緩めたら、涙が溢れてしまいそうだった。顔を上げていられなくて、腕の中の花束に視線を落とした。

こんなことは、奇跡だ。異性の間でさえ、二人の感情の方向を合わせるのはとても難しいことであるに違いないのに……

「……有難う…本当に嬉しい……。少し悔しいけれど……」

「悔しい?」

アイオロスも、呆然としている。無理もない。石のように動かなかった私の反応を見れば、きっと失敗したと思ったに違いないから。

私は、激しく波打っている心臓の動機をどうにか収めながら、漸くずっと以前から用意していた言葉を告げた。

「つまり…私も、今日、君に言うつもりだったんだ…その…五月の質問の答えを……」

つまるところ、私もアイオロスに対し、如何にして自分の気持ちを伝えるべきかと、必死だったのだ。

彼が告白してくれたことは、本当に泣きたくなる程嬉しかったが、彼が告白してくれたから、ただそれを諒承したというわけではないのだということを、どうしても分かってもらいたかった。

この恋愛には、間違いなく数々の困難が待ち受けている。性別は勿論最大の障害に違いないが、私の実家の立場が第二の障害になるであろうことは、最初から分かっていた。

だから、私自身、自問自答を繰り返した上での選択であることを是非知っておいて欲しかった。将来、そのような困難に直面した時に、アイオロスが一人で責任を抱え込んでしまわないように。

…だが、それにしても、確かに私の告白は少々まどろっこしかったのかも知れない……。

「…まず、君に謝らなければならないことがある。5月に君が私にした質問に、私は正直に答えなかった…『先輩からの申込みは断ったから』なんて、一番狡い逃げ方だけれど、あのときは何かを考える前に勝手に口がそう答えてしまったんだ。…あとから考えて、何故あんな反射的に答えてしまったのだろうと思った」

私がそう口火を切った時、アイオロスはまだ半ば脱力したように、不思議な表情で私を見詰めていた。

「本当に君に対して友人以上の興味が無いなら、正直に言えばよかったのにと思った。『君は友達だ』とでも、『申し訳ないけれど同性に興味は持てない』とでも。でも、私はそうしなかった。…そうして、気付いたんだ。あの瞬間、これ以上話が進んだらまずい、と感じたのだと。これ以上のことを訊かれても、私はまだ答えを掴んでいなかったから…。だから、あやふやな状態でずるずると答えてしまうことは避けなければならないと、ほぼ反射的に思った。…君の言葉に嫌悪感を感じた訳でも、戸惑いを感じた訳でもない…私にとって、十分に受け入れられるものだったから、余計に警戒したんだ…」

必ずアイオロスの目を見て打ち明けようと決めていたのに、実際にその場になってみたら、恥ずかしくてとてもそんなことは不可能だと知った。膝の上に置かれた花束を見つめて、つとめて冷静に見えるよう話すのがやっとで……。そして、気を抜けば勝手に加速してしまいそうになる呼吸のコントロールに四苦八苦していた私は、アイオロスの口元が徐々に緩み、次第に笑いを堪える表情になっていることに、迂闊にも気付かなかった。

「…そこまで考えて、先輩に対しては駄目だったのに、どうして君なら受け入れられたのだろう、と思った。それは、きっと私自身が、君という人間に心を惹かれているからだ…ただの友人、という以上に。勿論、長い間、私にとって君は人生の先輩と言うか、兄のような存在でもあったから、そのためなのかも知れない、とも思った。…結論を出すまで、結局半年かかってしまった。君が、コントラバスの新入生をそれこそ君の持てるもの全てを使って集めようとしているのを見た時に、初めて分かったんだ。私は君の助けになりたかったし、喜びも悲しみも、君の背負っているもの全てを一番に分かち合える位置にいたかった…いつの間にか、私は自分がその位置にいることを疑いもしなかったし、その場所を誰かに譲り渡す気も全くなくなっていたんだ…」

目を閉じる。大きく息をつく。

これだけは、顔を上げて言おう。…たとえ、瞳を見ること

は出来なくても。

「…だから、もう、言ってもいいのだと思う…私は、君が好きで、いつも君にとって一番の地位にいたいと思っている…今だけでなく、これからもずっと。…一度そう気付いてしまったら、君の一挙一動が気になってたまらなくなった。君は私に触れたいと言ったけれど、私もずっとそうだった……。これは、普通の友達に抱く感情とは違う、と思う」

漸く言い切って、瞳を上げた。アイオロスは、何故か俯き、唇をきつく結んで小刻みに肩を振るわせていた。

……まさか、泣いている？

はっと一瞬突き刺さった心配は、しかしその次の瞬間にいとも簡単に覆された。彼は俯いたまま私の背に手を回すと、そのまま座っている私の肩口に顔を埋め、そのうちに失礼にもくつくつと笑い始めたのだ。

後に、アイオロスから事の次第を聞かされ、己の長口舌を若干反省した私も、この時は不意をつかれた形でひどく傷付いた。

「…どうして笑ってるんだ……？」

呆然として訊ねると、アイオロスはなんとその途端に激しく吹き出してしまった。

「ご、ごめん……」

謝る気持ちはあっても、笑いを収める気は全くないらしい。今や身を捩らんばかりに人の身体にしがみついて笑っているアイオロスの、震える背中を眺めていると、次第に面白くない気分になってきた。

…かなり真面目に、羞恥心を捩じ伏せて話したつもりなのだけれど。

それが、人の精一杯の真剣に対する返礼なのだろうか？

「アイオロス…。」

少し声音を変えて呼んでみたが、アイオロスの態度は一向に変わらない。私は急に膨れ上がった己の衝動を堪えかねて立ち上がり、未だ人の身体を支持棒にして笑っているアイオロスの身体を剥がそうと腕に力を込めた。

とにかく、恥ずかしかったのだ。

自分の言動もさることながら、目の前でこうも盛大に笑われては、曝け出してしまった自分の内面と、己をそうさせてしまった熱とがひどく場違いに思えて……。

このまま逃げ帰りたい心境で、背中にまきつく腕を振り払うと、漸く無理矢理笑いを引っ込めたアイオロスが、耳元で囁いた。

キスしたい。…いい？　と。

その瞬間、ぞくり、と背中に震えが走った。…そのくらい、その声は甘くかすれて、熱を持っていた。

散々、笑ったくせに。

君にとって、私の真剣なんて、笑いの種くらいにしかならないんだろう…？

拗ねた羞恥心が、私自身信じてもいない理屈を捏ねて抗ったが、拒否の言葉は出なかった。

肩に優しく置かれた手が、熱い。まだ私の耳元に顔を寄せているアイオロスの体温を、全身で感じる。

知らず、私は頷首してしまっていた。抗っても無駄なことだった。…アイオロスに触れたいのは、私だ。

アイオロスが、私の耳元に顔を寄せ、静かに唇を置いた。それから、まるで羽で触れるように、頬と唇にも。

それはまるで、キスというよりは、口付けという言葉そのものの行為で――その彼らしからぬ静けさに、私は少なからぬ驚きを抱いてアイオロスを見詰め返した。

…本当に、そんな程度でいいのか？

私の方は、もっと君を抱き締めたいのに。

呆然と見詰めていたら、また熱を帯びた声で尋ねられた。「…厭じゃない？」と。

…そうか。らしくないのではなく、私を気遣ってくれているのか。私は大きく首を横に振った。…大丈夫。まだ慣れていないけれど、厭じゃないよ。

「サガ…」

アイオロスが、ひどく切ない、いとおしげな眼差しで私の名前を呼んだ。胸が痛くて、幸せなのにそれ以上正視出来なくて、瞳を閉じた。

…笑いの種にしかならないなんて、酷い事を考えた。

アイオロスだって、きっと恥ずかしかったのだ。私だけが熱を帯びていたわけではないのだと、その小さな呟きが教えてくれる……。

生暖かい感触が、私の唇に重なった。僅かに息を継ぐ吐息が聞こえた。

目を閉じる。視覚を遮ると、その他の感覚はより鮮明に感じられた。唇に触れる、少し湿った柔らかい感触。唇が離れる瞬間に聞こえる、水音のような小さな音。触れあわせた部分から、ゆっくりと伝播する熱…。鮮明すぎて、あまりにも日常と離れ過ぎていて、正直何が起こっているのかよくわからない。

そこまで考えて、漸く気付いた。…分からなくて当然だ。私にはキスの経験がなくとも何かを返したくて、アイオロスの真似をすることにした。いつも溌溂として、全身バネの塊のような彼も、唇は柔らかいのだと知って妙な所に感心する。温かく柔らかな感触に触れているのは気持ちがいい…と、気持ち良く酔いかけていたところに、急に下唇にぬるりとした感触が走って驚いた。

「これ以上は、止めとく？」

つい跳ね上がってしまった私の背中を、やさしく宥めながらアイオロスは言った。

「…どうして？」

これからが本番なんじゃないのか？　…いくら私でも、普通の恋人同士のキスがこんなものではない事くらいは知っているのだけれど…。

アイオロスの手が私の体を離れる。今まで体温のあった場

所にそれがなくなるのは、何だか寂しい。
…と思っていたら、彼はそのまま右腕を挙げ、親指の腹で私の唇を柔らかくなぞった。何度も、何度も。
息苦しいような痺れが、唇から波状に広がった。思わず、両目を閉じてしまった。
大体彼は、何故こんな手管を知っているのだろう?……私と同じ年だというのに。
「びっくりしてただろ?」
「…嫌だ。止めない。…折角触れられるようになったのに」
アイオロスは、声を立てて笑い、掛けていた指を外した。よほど、私の物言いが可笑しかったのかも知れない。…私自身、こんな駄々を捏ねたような物言いをしたのは初めてだったので。
アイオロスは、今度はすぐに笑いを収め、またもとの優しい眼差しに戻ると、私の髪を撫でながら言った。
「腕、抱きしめて…」
請われるまま、私は抱えていた花束を机の上に置き、アイオロスの背に腕を回した。…分かってはいたけれど、アイオロスの体格は私よりかなりしっかりしていて、腕の中に抱えた体躯の質感に、安堵感と共に少しばかりの羨望を抱いた。長くアーチェリーを続けているだけあって、胸筋がよく発達しているのだ。着痩せする質なので、衣服の上から見ただけではよく分からないけれども。
アイオロス、と小さく呼んだ。普通に呼んだつもりだったのに、耳に聞こえた声は自分でもびっくりするほど甘くかすれていた。
…女々しいと思われただろうか。
気掛かりに注意を奪われた際に、再び合わせられた唇から、するりと冷たい舌が口の中に割り込んで来た。
うわっ……
一瞬、全身が緊張した。…何かを押し込まれる感覚というのは、咄嗟に身を引かせてしまうものらしい…けれど実際には、アイオロスの腕がしっかり私の身体を抱え込んでいたから、身を引くどころかむしろ引き寄せられたような形で、それが何故かひどく安心感をもたらした。
何か、理屈ではどうにもならない感情が、執拗に居座っていた私の理性を凌駕したのは、この時であったかも知れない。
私は、アイオロスの背中に回した腕に力を込めて、同じ仕草を返した。それまでアイオロスとの間に開いていた僅かな隙間がもどかしく、肌の熱を直接感じるほど抱き締めて、繋がっている唇の隙間から自分の舌を差し入れた。
激しいキスになった。甘く酔えるゆとりなどなく、ただただ相手との距離を限界まで近付けたい一心で。
流石に疲れて互いが互いを解放した時、私の息はすっかり上がってしまっていた。目蓋を上げると、やはり苦笑しているアイオロスの表情が目に飛び込んで来た。…どうも、何か間違っていたらしい。こちらも経験がないから、初めからうまくいかないのは分かっていたのだけれども。

あやすように私の髪を撫でていたアイオロスが、ふと私の耳元に顔を近付けた。そして何か言うつもりなのかと耳をそばだてた私の耳元に、ふっと軽く息を吹き込んだ。
「……！」
おもわず仰け反って硬直した瞬間に、視界が九十度回転した。何が起こったのかよく分からない…気が付くと、私の背中は柔らかいマットレスの弾力を感じていて、目は私の身体に手をかけたアイオロスの背後に部屋の天井を見ていた。
…全く、恐怖を感じなかったといったら、嘘になる。だが、終始落ち着いた表情のアイオロスの眼差しを見て、私はその不安を打ち消した。…アイオロスは、絶対私を傷つけることはしない。私が嫌だと言う事を無理強いすることも、あり得ない。
それでも、きっとよほど驚いた表情をしていたのだろう。アイオロスはまた苦笑すると、私の身体の自由がきくよう斜めにベッドに覆い被さって来た。
「俺はサガに触れたいけれど、サガは？」
触れたいと言うのは、どの程度なのだろう。流石に、つい十数分前に告白したばかりで、衣服を取って…というのはまずいような気がする。
けれどこのままでは離れ難いのは事実で、先ほどの安堵感をもう一度実感したかったから、何とも口にしにくい羞恥を抑えて答えた。
「…もう少し、抱きしめていてもいいかな……服の上から」
「服の上から？　下から触ってくれても俺は構わないけど？」
一瞬、アイオロスの唇の端が持ち上がったのが見えた。それは、どうみても是非素肌に直接触れて欲しいという願望よりは、こちらの反応を楽しむような表情で……きっと、どうせ出来ないと、またからかっているのに違いない。
「…それはまた今度。下にご家族も居る」
少しむくれて返したら、アイオロスは今度こそ悪戯っぽい顔になって、私の頭をついと横に向けさせた。
何をするつもりなのだろうと、詮索する暇もなかった。
アイオロスは、少し長めにしている私の髪の襟足を掬い上げ、その下の項を強く吸った。
「……っ……！」
驚いた。全身に、蕩けるような衝撃が走った。普通、驚いた時には全身が緊張するものだ…でもそれは、言葉では形容し難い甘い衝撃で、むしろ全身の緊張を瞬時に奪ってしまった。
力が入らない……。
危険だと感じた。抱き合うという事がどういう事なのか、その瞬間分かった気がした。
溺れることに危機感を感じる一方で、何もかも相手にあずけてしまう快感に抗えない自分がいる……。
「じゃあ、サガのしたいように触ってくれ。その方がお互い安心出来る」
耳元の囁きが、何故かぞくりとする快感を呼んだ。
おかしい…先刻まではこうではなかったのに。

押さえ付けられていた頭を解放されて、アイオロスの方へ向き直った。アイオロスの瞳は、それまでとは打って変わって真剣で、僅かに熱を帯びていた。

力の入らない腕を、何とか持ち上げた。アイオロスの右腕の下からくぐらせて背中にゆるく回し、それから今あるだけの力を込めて抱きしめた。

…抱きしめるという行為は、いつも私に緊張を強要する。幼い頃から、力を入れ過ぎてはいけない、と教えられて来た。その一方で、腫れ物に触るような力でもいけない、と。相手がどんな状態であっても、狼狽してはならない。相手の状態を見て、瞬時に相手が一番信頼出来る力、距離、表情、言葉を探る…『抱きしめる』という行為の表すものが通常以上の親密さであるが故に、そこには常に細やかな神経が要求される。それはあくまで相手の為に行う行為であって、最も自分の感情から遠ざけられた行為だ。

だから、知らなかった。自分の為に腕に力を込めるということ、何故人が抱き締めるという行為を好むのか、ということを。

目の前が昏くなるほど、陶酔した。一度知ってしまったら失っては生きて行けないと思う程、強烈な安堵感が全身を満たした。こんなに、全身全霊で感情をぶつけていい相手がいて、相手も同じようにそれを返してくれる…物理的に離れている間は考えもしなかった渇望が、急速に膨れ上がって心身を支配した。もっと、近付きたい。衣服を隔てた僅かな距離が、もどかしい。

アイオロスが、私の頬を両手に挟んで唇を近付けた。私は唇を開いて、彼の舌を招き入れた。

何故、という問いが意味をなさない事もあるのだ。ただ数センチを近付いて、一体何が変わるというのか。どれほど考えても、きっと答えは出ないだろう。それでも、その距離を少しでも縮めたくて、また腕に力を込める自分がいる。

生まれて初めて、意図的に思考を放棄した。たかが十五年ほど生きて来ただけの知識で解析出来る心の動きではなかった。分かったのはひとつだけ、ただ、賢しげに左脳を働かせるよりも、自分の感情を素直に相手に伝えることの方がよほど大切なこともあるのだ、ということだけだった。

しっかりと抱き締め返してくれていたアイオロスの手が、背中をすっと撫でた。…途端に、甘いとも辛いともつかない痺れが背筋を駆け抜けた。また、何故、と考えそうになった思考をわざと打ち切り、その感覚を追う。追えば追う程、初め感じていた刺激は更に強くなる。息をつめた。…下には、ご両親がいるし、隣に後輩のアイオリアもいる。音だけは決して立ててはならない。…と、今度は首筋にキスが落ちた。それから、首の付け根の鎖骨の辺りにも。

タイと胸元のボタンを外されていく。それでも、むしろその事を喜んでいる自分がいる。肌に直接触れる唇が思いのほか強烈で、思わず喉を反らせて息を飲む。

自分で触ったところで大して何も感じないのに…。

ぼんやりと散漫に、そんなことを思った。次の瞬間、鎖骨

を強く吸われて跳ね上がった息と体を抑えられず、アイオロスにしがみついた。アイオロスが最初にわざわざ体をずらして覆い被さってくれた意図は既に意味をなくしていて、私は自分からアイオロスの片足を自分の足の間に巻き込み体をぴったりと重ね合わせていた。

その無意識の行動をあさましく恥じずに済んだのは、幸いだったと思う。…本当はそうしたいのに、正気のときには何かと外面を繕って気のないふりをするのは、私の悪い癖だ。

二人共に横向きに横たわると、正面に普段とはまったく違った表情のアイオロスの顔が見えた。常日頃、彼はフレンドリーな第一印象の割に厳しい人間で、こんな溶けそうな甘い表情は絶対にしない。そんな特別が嬉しくて、幾つもキスをした。まばらに髪の落ちかかる額に、優しく笑っている瞳の上、上気した頬、意志の強そうな筋の通った鼻、そして少し開かれて笑みを零す唇に。どうか、今感じている幸せを分かって欲しい、と、息苦しいような衝動に急き立てられてまたキスを繰り返す。

アイオロスは、今度は私の左首についた痣に興味を示したらしかった。これは顎で楽器を支える時につくものだから、アイオロスのようなエンドピン（楽器を立てるためのピン）がある楽器の奏者には無縁のものだ。何やら興味深げに眺めていたのでじっとしていたら、軽くその場所を舐められた。…別に怪我ではないから痛くはないし、舐めても治らないのだけれど…。今敏感になってしまっている首筋を舐められるのはかなり刺激的で、自分からキスをする余裕などなくなってしまった。

それでも。何か返したい。胸の内に伝えたい感情が膨れ上がっているのに、何も出来ないでいるのは息苦しい。

優しく頭を撫でてくれていたアイオロスの手をとった。彼の大きな左手の指先には、私の指とは比べものにならないほどしっかりと固いたこが出来ている。コントラバスは楽器が大きくポジション移動の距離が大きいため、奏者はしばしば指先に摩擦熱による火傷をするのだが、アイオロスも例に漏れず、こうしてたこが出来るまでには何度か指先を傷付け、傷テープを巻いて顔をしかめながら練習に参加していた。

彼が乗りこえてきた痛みを癒すように、その指を舐めた。指を傷つけながらもオーケストラに残ってくれたことに感謝した。この手が大好きだ、と、心から愛おしく思う。それは、楽譜も読めなかった彼が、大変な努力を払いながら私の側に在り続けてくれたことの証に他ならないのだから。

アイオロスが、一瞬、僅かに小さく身震いした。つい少し怯んだ隙に、その彼の手をとっていた右手を握り込まれた。

手のひらで、手のひらの熱を感じる…。

直接触れる肌が、互いに相手へと向かう意志を、こんなにも雄弁に物語る。

しっかりと指を組み合わせて握り返した。また、細波のように心地よさが全身に広がった。普段何気なく道具のように使っている手が、一方で優秀かつ敏感な感覚器であることに

驚く。

甘いキスに酔っているうちに、呆気無く袖のカフスを外された。暖かい指が、手首の内側から肘、上腕をなぞり、肩へ這い上って来る。袖をたくし上げられて、外気に触れる部分と触れられている部分が感じる熱のコントラストのきつさに、吐息を噛み殺した。

段々、余裕がなくなってきた。お互いに、もう少し、もう少しと、触れあう面積が広がって行く。

アイオロスが、私のシャツの裾を引き出した。待ち構えていたかのように、私の手も彼のシャツの下に潜り込んだ。カフスを外された腕が、直接アイオロスの背中の熱を感じる。また、もう少し、と願ってしまいそうになる心を、ぎりぎりのところで制御する。これ以上は駄目だ。もし胴体が直接アイオロスの肌に触れてしまったら――きっともう、どんな制限も私達を止める枷にはなり得ない。

アイオロスの指は、ゆるく脊髄の上をなぞっていた。まるで、私の背骨を指板に見立てているかのようだ。きっぱりとしたスケールの指使いが、頚椎から胸椎に降りて来た――と、彼は其処から一気に腰までその指を滑らせた。

一瞬、視界が白く霞んだ。上ずったグリッサンドが喉から溢れなかっただけ上出来というものかも知れない。

アイオロスは彼の実験結果に満足したのか、そのまま私の体をひっくり返した。訳もわからず、飲み込んだ息を整えているうちに、更に意識を白濁させるような衝撃が襲来した。脊椎から、溶ける。腰椎のひとつひとつを強く吸われる度に、温度を増した熱で体の骨格も皿肉も全て溶けていく。

気持ちいいのか、と、私を後ろから抱きかかえたアイオロスが耳元で囁いた。普段の声より二度ほど低く、少しハスキーに甘くかすれた声に、私は暫くしてから頷いた。…実のところ、こうした感覚に耐えるのはどこか息苦しくて、本当に気持ちがいいのかよく分からない。でも、きっと今止められたらもっとずっと苦しい。周囲など気にせず、この感覚に全て委ねてしまえるなら……。

アイオロスは、ほんの少し驚いたようだった。小さく息を吐き、それからゆったりとまた背中に覆い被さり、小さな、しかし真摯な声で言った。

愛してる、と。

それはとても自然な音韻で――私の中に蟠っていた羞恥を吹き飛ばしてしまった。使い慣れない筈のその言葉を、敢えて今使ってくれたことに、溢れる喜びを覚えた。きっと、アイオロスは私の返事を知ったなら得意になるだろう。そう思いはしても、まさか、こんな自分を見て愛していると言ってくれるとは思ってもみなかった。

言葉と共に、アイオロスの口付けがまた背中に落ちる。

熱っぽい囁きに、意識が飽和した。体の反応がますます過敏になる。明らかに過敏になりすぎた反応に手を焼いたアイオロスが、そんなに暴れてくれるな、と苦情を申し立てた。そう言われても、わざとやっているわけではないからどうに

もならない…我ながら少々反応過多だと思いつつも、ついそうさせているアイオロスにその責を被せてしまう。

大体、何故彼はこんなに慣れているのだろう…？

明らかにこれは、既に一度はこうして誰かと抱き合ったことのある人間の余裕だ。

そこまで考えて、ふと、何処まで知っているのだろう、と気になった。別に、アイオロスに過去に恋人がいたところで不思議には思わないし、彼のことだから彼女とキスまでの関係で満足することもあり得ないだろう。そうは思っていても、本当に最後までいってしまった経験があるとまでは思っていなかった自分に気付いて、少し驚いた。

…これは嫉妬？

自分の中の、不思議な感情を見つめた。自分より前に彼と親密になった存在のことを、本当に気にしているのか？　それとも、全てにおいて先に進んでしまっているアイオロスへの競争意識がそうさせたのか？

息を整えて、もう一度自分を見た。…違う。これは、むしろ怯えだ。私の知らない関係に、このまま引きずり込まれてしまう可能性への。

経験があるのか、と、アイオロスに訊ねた。不躾なことだとは思ったが、私自身が覚悟を決めるために必要だった。

アイオロスは私の問いを何と思っただろうか。

彼は、もう一度私の背中を撫で、そのまま後ろから左手を滑らせて胸の辺りへ抱き込み、空いた右手で私の頭を撫で付け――耳を後ろから咬むようにして囁いた。一言、『ある』と。

鼓膜と肌とがその音の振動を受け止め、その波紋はわずかな緊張を乗せて全身に広がっていった。…そうか。知っているのか。ならばおそらく、近い将来、私達はそういう関係になるのだ。そうして覚悟を決めた瞬間、また体温がわずかに上昇した。

胸に回されたアイオロスの手に、自分の手を重ねる。抱きしめられない両腕がもどかしく、そのたった一本の腕を体を使って胸に抱き込む。

正面から抱いて欲しい、と頼んだ。熱く熱を帯びた体が苦しくて、その熱を移すようにアイオロスの体を抱き込んだ。アイオロスの足が腰に押し付けてきた。

…彼だって、同性と抱き合う方法は知らないだろうに。

それでも、私が思い付くよりはいくらでも方法を思い付くものらしい…。

すると、とシャツの中に滑り込んで来た手が、私の胸の突起を一度通り過ぎ、その後また戻って来た。

遂に、小さく声が漏れた。殺そうにも、間に合わなかった。

肌が感じる刺激とは違う。もっと直接的な、生殖器官に直結するような刺激だ。首を振って、どうにかそれ以上の声を堪えた。手で触れられるだけでも既に限界に近いのに、彼は今度は更にシャツをたくし上げ、今まで指で触れていた部分に唇を近付けた。

喉から、熱をもった吐息が断続的に溢れた。アイオロスの首に回した指に力がこもる。自分の方へと押し付けてしまう力を止められず、ただどうしようもなくアイオロスの体に縋り付く。

どうやら、体の方が具合の悪い事になってきていることを、むしろアイオロスの体を通して知った。コートを着てしまえば通行人にそれと知られることはないだろうけれども、今晩は暫く眠れないかもしれない。シャワーを利用するには遅く、溜まってしまった精を吐き出すには明日の朝まで待つしかない。

だが、アイオロスはそうは思わなかったようだった。彼は、私の体の変化を悟ると、私の首筋を甘く噛みながら、さり気なく私のスラックスの前ボタンに手を伸ばして来た。

「それは、ダメだ」

慌てて、静止した。こんなところで射精するなんて、以ての他だ。

「なんで？　気持ちよくない？」

心底意外そうな表情のアイオロスが、首を噛むのを止めて私を見た。…そんなにびっくりした表情をされても…彼がおおらかなのは先刻承知だが、この家にまだ三人、ご家族がいることを忘れているような気がする。

「下に、ご両親がいるじゃないか…」

本当は理由はそれだけではないのだけれども、もっとも強い理由を口にしてみる。だが、アイオロスはさらりと返したのみだった。『声を抑えてくれれば大丈夫』と。

…そんなに簡単に、声を殺しているように見えるのだろうか？　これでも、結構住るだけの自制心を総動員しているのだけれど…。

第一、もし万が一ご家族が上がって来た時のことを考えると、とてもそんな気にはなれない。今でも十分誤魔化せない状況であるし、今更僅かな自粛をしたところで意味もないとアイオロスが考えるのも道理だが、私には私なりに彼のご家族に対する遠慮があった。

何しろ、つい先刻告白したばかりなのだ。

流石にお互いの性器に触れるのはまだ早い。考えが古いと言われようが、これだけは譲れない。きっと、アイオロスのご両親もそう言うだろう。性別の問題を抜きにしても。

私は、声を抑えられないから駄目だと答えた。アイオロスはしきりに私の体を気遣ってくれたが、最早私にはそんな彼の好意を気遣う余裕はなく、ただ大丈夫だと応えるのが精一杯だった。

行き場を失った熱を注ぎ込むように、互いに互いの体を抱き締め合う。超えられないぎりぎりの境界で、せめて溢れる思いが相手に浸透する事を祈る――触れる指先から、合わせた唇から。どんなにか、これまでアイオロスが私のことを愛おしく見守ってくれていたか。今、この私を愛してくれているか。それを思う度、伝えたい想いで胸が一杯になる。

好き、では言い尽くせない。

それでも、まだ自分に使う資格があるとは思えない、その言葉を。

愛している、と、漸く呟いた。

今はまだその資格がなくても、きっといつか、その言葉を自信を持って言える自分になろう。

一度口にしたら、止まらなかった。何度も、何度も同じ言葉を繰り返した。アイオロスは、一瞬はっとしたように体を離し、それから、見た事もないような綺麗な、ひかる眼差しで私を見つめ返した。彼の強い腕に、全身の力がこもる。痛い程の抱擁の中で、I know, と、今一番欲しいものを与えてくれる言葉が返って来る。

私もまた、私の中に残っていた全ての力で、アイオロスを抱き締め返した。「わかっている」と、私の差し出した全てを受け入れてくれているのに、それでもまだもっと受け入れて欲しくて、また同じ言葉を繰り返す。

君を、愛している。

愛している……。

遠くで、鐘の音が聞こえた。

私は、そのビッグベンと同じメロディを、ぼんやりとした意識の表層で捉えていた。

本当は、鐘の音はそれほど遠くはないはずなのだ。何しろ大聖堂はすぐ隣なのだから。それが遠くに聞こえたのは、私自身がその鐘の音をあまり聞きたくなかったからかも知れない。

アイオロスが、はっとしたように僅かに身を起こした。それから、もう一度私の耳元に唇を寄せ、小声で囁いた。

「時間。そろそろ帰らないと門限を過ぎるぞ」

門限。

その言葉に、私はゆるゆると両目を開いた。

…離れたくないのに……。

先刻までの素直な自分が、ぽつりと一言胸の中に零した。半分眠らされていた理性はこの辺りが潮時だと告げていたし、かなり乱れてしまった私の衣服もそれを証明していたが、それでもなお私はまだ帰りたくなかった。

…このまま、最後まで進んでしまっても?

目を覚ますために、自問してみる。服の上から、と自分で断ったくせに、結局服の厚みに耐えられず、あと数ミリの距離を近付きたくて直接肌に触れてしまった。既に経験があると言ったアイオロスは、それでも最後までよく自制してくれたと思う。

だが、これ以上続けたら、きっとただ触れるだけではすまないだろう。

どんなに心地良く酔っても、これ以上進むわけにはいかなかった。まだ私自身の心の準備さえ出来ていないのだから。

つらつらとそんな事を考えていたので、目を開けてからも暫くベッドの上で微睡んでいた。アイオロスの方はさっさと起き上がり、上着まで羽織っている。既に先刻までの甘さの欠片もなく、この呆気無いほどの切替の早さは、意外なようでもあり、ひどく彼らしいようにも思えた。

「おい、サガ、時間だ。起きてるか?」

ひたひたと、アイオロスの大きな右手の指が私の頬に触れた。なかなか起き上がらない私を心配したらしい。もう一度私の上に覆い被さって、じっと私の目を覗き込んだ。

…何故、そんなに未練がましいことをしたのか、わからない。まだ、思ったこと即行動に移してしまう素直な自分が居座っていたのか。それとも、あまりにあっさりと離れて行ってしまった思い人に対する嫉妬だったのか。

私は、覆い被さって来た体をもう一度抱きしめた。また、ふわりといつものアイオロスの匂いがした。

…やっぱり好きだ……

ほんの少し恐れていた事が、杞憂に終わったのを知った。生々しい関係に踏み込んだら最後、怖じ気づいて冷めてしまうかも知れない、と、心の何処かで恐れていたものが、きれいに払拭されていた。

アイオロスは、一瞬びっくりした様子を見せたが、もう一度だけ、私の我侭に付き合って抱き締め返してくれた。時間は淀むことなく過ぎて行く。私は、最後にもう一度アイオロスの額にキスをして漸く身を起こし、その瞬間に鏡に映った自分の姿を見た。

…これは……。

一瞬、ベストのボタンを留める手が止まった。今まで見た事のなかった自分が居る。第二ボタンまで外されて寛げられたシャツの隙間や、カフスのなくなった袖口から、赤く内出血の痕が覗く。だが、何にもまして私が驚いたのは、普段とあまりにも違う表情をしている自分自身だった。

一気に、目が醒めた。何か、己の浅ましさを見せつけられたような気がした。

衝撃を悟られないよう、少し俯いて着衣を整えにかかった。否定的な方向に走ってしまいそうな思考を無理矢理引き戻す。…恥じることはない、これは不名誉でもなんでもない、と。

肉欲に引きずられたわけでも、自分の性別を放棄したわけでもない。

私がそうしたかったのだ。

アイオロスの与えてくれるものは全部余さず受け止めたかったし、私が彼の愛撫に酔うことが彼にとっても幸せな事なのだと知ったから、余計な見栄も羞恥も捨てて彼に添った。その結果がこれだというのなら、何を今更狼狽えることがあるだろう。

一瞬しか正視することの出来なかった、血を滲ませたような色の自分の唇を思い、軽く舌で舐めて湿した。…とはいえ、このまま電車に乗るのは、少々障りがあるような気がする。早いところ、普段より血行のよくなりすぎた顔から血の気をひかせたかったが、未だ熱のこもった身体は予想以上に重く、心で焦るほど機敏には動けなかった。

大体、こんな風に私が惚けている時は、要注意なのだ。

アイオロスは、人をからかうことの出来る好機を、滅多に逃したりはしない。特に私に対しては。

「初めてだったろ？」

果たして彼は、当然彼も分かりきっているであろう事をわざと聞いて来た。別にこの年まで付き合いのひとつもなかったことを恥じてはいないが、掌で遊ばれているようなその口調に、思わずむきになった。

「君が早熟に過ぎるんだ。キスまでならともかく、それ以上、なんて……」

この年で体の関係まで知っている人間は、クラスにもそうはいまい。同年齢の少年達の常識に通じてはいないが、流石にそのくらいは会話を聞いていれば分かる。

だが、アイオロスは私の剣幕をさらりと躱して、思いもつかなかったことを聞いて来た。

「そうか？　でも、俺が言う付き合いたいって、こういう事がしたいって事なんだけど？　純情なエルザ姫？」

姫、というその言葉に、一瞬どきりとした。羞恥と、目を逸らせていた現実を無理矢理見せつけられた衝撃で、頬が再び熱くなった。

ご丁寧に、袖を通せと言わんばかりに私のコートを掲げたアイオロスが、愉しそうに笑っている。素直に彼の手を借りて身に付けるのは流石に悔しくて、後襟に手をかけて片手でコートを取り上げ、そのまま余所を向いて羽織った。

…矢張り、あの姿はアイオロスにも女性的に見えたのか。

ただのからかいに過ぎない、と理屈では分かっているのだけれど。

恥ずかしさと、自分だけが過熱してしまったような悔しさで、どうしてもアイオロスを正視出来ない反面、それでもなお恬然として揺るがない彼に感謝している自分がいる。

…本当に、あんな私でもいいと言うのなら。あれを浅ましいと思わず、これまでと変わらない愛情で迎えてくれるなら。

「…一生君の素性など聞いてやるものか」

ローエングリンの物語に準えて、漸く一言、伝えたかったメッセージを口にした。若干ぶっきらぼうになってしまったが、それはその言葉に込めた意味で補ってもらうことにしよう。

アイオロスの方はというと、私の返事を聞くなりまたもや爆笑した。この頃になると、私も漸く今日のアイオロスには笑いの虫がついているらしい、ということを理解しかけていたが、それでもその僅か一言に込めた密かな意志などまるで気付かない様子で笑い転げている姿を見ると、またしても若干拗ねた気分になってきた。何もここまでひどく笑わなくて

もいいのではないか。今日は、真面目な告白をする度に、笑い飛ばされているような気がする…

たっぷり二、三分は笑った後、漸く疲れたのか、アイオロスは私の髪を撫でて言った。

「からかって悪かったよ。でも、本当に嬉しいんだ。嬉しくて、自分でも笑いが止まらない」

「…本当に？」

「ホントに」

口調がまだ笑いを含んでいるような気がした。アイオロスは相変わらず私の肩口に顔を埋めている。ならばそのまだにやけている顔を見てやろうと、一瞬体を引き、その頬に口付けようとした時だった。

…頬が赤い…？

驚いた。…アイオロスが照れている様など、初めて見たからだ。おそらく、スクールの人間の中にも彼のこんな表情を知っている人間はそういないだろう。

急に、その精一杯私に照れを気取られまいとしている姿が愛おしくてたまらなくなった。頬に口付けると、今度は真っ直ぐこちらをむいて「キスして」とねだって来た。

じっと、琥珀の瞳を見つめる。ゆるく目蓋を閉じ、僅かに唇を開く。そのまま互いの唇を触れあわせ、柔らかい舌を探る。

初めての時のように、すぐに同じ仕草を返そうとするのではなく、相手の気が済むまで相手の与えてくれる刺激に酔う。それから、ゆっくりと返す。どれほど気持ち良かったか、感謝と愛情を込めて。

アイオロスは、もう苦笑してはいなかった。

「ロンドンブリッジまで送るよ」

離れ難いのは、お互い様だ。アイオロスを送ってここまで来たはずなのに、その彼が見送りに来るという。

なんとか力の入らない背筋を延ばし、身なりを整えた。もう、アイオロスのご両親にご挨拶しても大丈夫だろうか。

玄関で、お礼の言葉を述べながら、ほんの少し、申し訳ない気持ちが胸を刺した。彼の母上は、息子の友人としての私を気に入ってくれているらしい…上品な物腰で、また来て下さいね、と誘って下さった眼差しを、私は深々と礼をすることで避けた。

いつの日か、このような気兼ねをせずに語れる日が来ればよいのだけれども…。

間に合わないぞ、というアイオロスの言葉で、私達は共に夜のサザークを歩き出した。サザーク大聖堂の門は既に閉まっているので、回りに張り巡らされた柵の外を歩く。凍り付くような夜気の中、薄暗い明かりの元で、大通りに出るまでと心得て隣を歩くアイオロスの左手を握った。アイオロスが物言いたげにこちらを向いたが、いつ人が通るかわからない通りでは、それ以上のことは出来るはずもなかった。

改札口で、アイオロスは百合の花束に加えてもうひとつ、私に紙袋を手渡した。

「もう一つおまけのお礼」お前に合うと思ったから買っちまっ

た」

サザーク大聖堂の紙袋だ。行きに訊ねた時は、降誕節の蝋燭だと言っていたけれど。

「有難う……」

私達は同室だから、この蝋燭は私だけでなくアイオロスも眺めることになる。きっと火を灯す度に、今日の日を思い出すだろう。アンドリューはともかく、シュラはもしかすると私達の関係に気付くかも知れない…決して、面と向かって私達にそれを告げることはないだろうけれども。

「帰るのは月曜？」

ふと、分かりきったことを聞いてみた。折角の誕生日なのだ。ご両親も、普段離れているアイオロスを簡単に手放したりはしないに違いないのに、どうしてもたった二晩を耐えるのが辛い自分がいる……。

「…の予定だったけど、やめた。明日帰る」

アイオロスが、また照れ臭そうに笑った。そうして、夜になるけど、と付け加えた。

お家の方には申し訳ないけれど、その瞬間、嬉しさに心が跳ねた。

夜でもいい。少しでも早く帰って来てくれるなら。

「…電車に乗る前に寮に電話くれるかな」

「なんで？　迎えにでも来てくれるの？」

どうしても笑んでしまう口元を抑えられない。ほんの少し、今日散々からかわれたお返しをしてやりたくなった。

…答えは、言わないよ。わかっているはずだから。

「それじゃ、また明日。」

私は、それだけ残して、改札をくぐった。

静かなコンパートメントを、遠く、列車の車輪の音が満たしている。

誰もいなくなった小さな一室で、暗い窓の外を眺めながら、私はまだ体に残っている僅かな熱を吐息と共に吐き出した。人の減った車内の空気は、少しずつ冷えていく。それでもなお、身の内に灯り続けている灯籠のような火は消えることなく、この夜を照らす蝋燭の灯りのように、私の内部をやさしく暖めつづけていた。

どうか、このやさしい灯りがいつまでも私の元にありますように。

遠く列車の外を眺めながら、今も少しずつ距離を離しつつある恋人に祈る。

ふと、大丈夫、とおおらかに笑うアイオロスの声が、聞こえたような気がした。

隣に置かれていた花束を胸に抱き、窓ガラスに頭を凭せかける。ふわりと、百合の甘い匂いと共に先刻まで居た部屋の匂いが鼻腔をくすぐった。

アイオロスは、どうしているだろうか。
一瞬、その微かな香りと共に蘇った甘やかな記憶を抱いて、
私はゆっくりと目蓋を閉じた。

"The Late Autumn" Side vision of SAGA, Nov. 1989.

ある晩秋 (Side vision of AIOLOS)

十一月二十八日、金曜日

ベッドに背骨がめり込んで動かない。耳元で、ピロピロと能天気な電子音が響く。去年の降誕祭に祖父から贈られたクロノグラフ・アラーム付の腕時計だ。

第四学年になると、ＣＦＦ（軍事教練）の授業が入る。降誕祭に合わせて滞在していた祖父は、俺の学校での評価を確認すると、上機嫌でクリスマス・ツリーの下にこの時計を置いてくれた。

父の家系は代々職業軍人で、祖父も海軍将校として先の大戦に参加している。父は姉一人、妹三人に挟まれた長男で、祖父としては当然自分と道を同じくすると考えていたらしい。

けれど、父は弁護士という職業を選んだ。祖父の怒りと落胆は激しく、俺が生まれるまではほぼ絶縁関係にあったらしい。

今も祖父は、俺か弟のアイオリアかどちらかが職業軍人の道に進む事を激しく熱望していて、アメリカに渡ってしまった父をイギリスに呼び戻し、パブリックスクールに俺たちを進学させるように勧めた。決して人品卑しからぬ人だけに、祖父の期待と愛情の深さはやるせない。父は俺たち兄弟には、まとも取り合うなと鼻を鳴らしているが、彼が祖父の想いを軽んじているかと言えばそうではない。誰よりも深く、父である祖父を誇りに思い、愛しているのは間違いなく父、ジョージ・レナード・エインズワースその人だからだ。

鳴り続ける電子音の源を探ると、左耳に冷たい金属の熱を感じる。

この目覚ましを掛けたのは…、サガだ…。

時計を覗くと、きっかり八時半。朝食は食べられないが、授業には間に合う。

今朝方、寝ぼけ半分に、「ぎりぎりまで寝てる」と返事した事を尊寿してくれたわけだ。お陰で小一時間程余分に睡眠を確保出来た訳だが、どうにも夢見が悪かったらしい。皮下組織一切が泥土に掏りかえられたように重い上、腹に力が入らない。

昨日の晩は、所属しているスクール・オーケストラのコントラバスパート上級生に、サプライズパーティーを任掛けられた。

明後日、十一月三十日、俺は目出度く十六歳になる。誕生日はいつも家族で外食を楽しむので、俺は今晩には週末休暇を取って寮を出る。それで繰り上げ祝いを企画してくれたわけだが、流石にベースの連中なだけあって、中身はどんどん『誕生祝い』なんぞではなくなっていった。

猥談やらその手のビデオ上映やら、果ては実技だ実践だの大騒ぎで、飲んでいなかったらやれなかった事柄のオンパ

レードだった。

仕舞いには、どこから湧いて出たのか管の上級第六学年も紛れ込み、壮絶を極める。俺がなんとか自室の四人部屋に帰還出来たのは、明け方の五時を回っていた。

後にした部屋で生き残っていた連中は、トロンボーンのワイズマン上級生とベースのスチュアート上級生、ファゴットのマコーマック監督生、以上の三人。残りのベース三人、トロンボーン二人、トランペット二人、いずれもノルマンディ沖にて沈没の体。あの狭苦しい個室、もとい大陸棚沖に堆積していた。

一つのベッドに互い違いに四人。床に倒れた面々は、海草に包まるラッコの様に互いに絡まりあって伸びていたっけ。

踏まずに辿り着くのが困難だった事と、もうそんな気遣いをする気力が果てた事、以上二点から遠慮なく踏んで渡った藻屑達はぴくりとも動かず、やっと手にしたノブを回し、振り返った向こうの光景は、ワイズマンとスチュアートのそこ抜けた、または壊れて外れっぱなしのと形容する方が適当な笑顔だった。

恐らく、一睡もせずアルコールの瓶に愛情を注いだ事だろう。惜しみなく…。スコットランド人マコーマックは完全に自分の世界に入っていたし…。

なかなかクールなサプライズだった…。

これが、少し早い十六歳への慕開けか、と考えると頭が痛い。俺は十分『平凡主義』だと思うんだが…。

溜息を付くと、息の七割方がアルコール成分という事実が突きつけられた。少々飲み過ぎたかという淡い反省が、霧のように顔の周りに漂ったが、やってしまった事は仕方がない。フットボードに引っかかったズボンを剥ぎ、足を通しチャックを引き上げ、ボタンを止める。止めようとした。けれど…。

ズボンには、ボタンが付いていなかった…。ぶら下がってもいない…。

ボタンが無いズボンを週末戻った家で、母に差出しボタンを付けて貰えるか？　否だ。

となると、売店でボタンを購入し、自分で付けるのか？　是、也だ…。

記憶が飛ぶ程飲んだ覚えは無いが、ズボンのボタンというものは、記憶に関係なく飛ぶものらしい…。

どっと肩が重くなった。

いっその事、二学年下のあの規格外れの新入生にやらせるか…。こないだも取っ組み合いの喧嘩して飛ばした上着のボタンを自分で器用に付けなおしていた。オケの休憩時間に。

派手な金髪と利かぬ気の強い青い目。入学して三週間目にオケのコントラバスに入り、四週間目にはバイオリンに転向していった。

五週間目にはきちんと音を出すようにとサガに言われ、困ったような表情をしてオケの合奏に未席ながら混じったら、居合わせた連中の度肝を抜いた。

アホか…そんなに弾けるんならとっとと出し惜しみせずに最初から目立ってろ、とシュラでさえ思ったに違いない。聞けば

四歳の時から楽器をやっているとの事。どうせ容姿で目立っているんだ。今更地味なフリしたって人群れに紛れ込める玉かどうか冷静に考えてみろと言うんだ。あいつは…。

姓に「Fair」などという接頭語を持っているのが「嘘だろう?」と思う程、奴は世間知らずの無鉄砲で…同じ世間知らずならサガの方がよっぽど「マシ」だったと思う今日この頃。

新入生入学から三ヶ月弱。これが、ミロ・フェアファックスのハンドラーを買って出た俺、アイオロス・ヴィンセント・エインズワースの現状だ。

コツン。

知らずベッドの柱木に額を凭せ掛けていた。

いかん。悠長に物思いに浸る余裕は無い。

まだぐらぐらする頭を鉄柱からひっぺがし、俺は、丁寧にブックバンドが掛かった今日の午前中の授業一式を肩に引っ掛け部屋を出た。洗顔は、途中の手洗いで済ませよう。

もう人気の無いガランとした寮を出ると、そこにはイギリスの誇るディケンズが書き残したように、何とも心情に痛い空が芝を窒息させんばかりに広がっていた。

十月までのイギリスには、それなりに景色に彩がある。けれど、十一月になるとがらりと掌を返したように寒々しい。鬱陶しく平べったい灰色の空と、じわじわと冷たく這い登る冷気。

十月はハロウィン、十二月になれば降誕祭にバザー、カウントダウンと華やかなイベントが目白押しな月に挟まれて、十一月は陰気で活気に乏しい。

お陰でこの月生まれの寮生は、多かれ少なかれ他の生徒のいい鬱憤晴らしの材料になる。

ひやっと首筋を撫でる外気に、思わず首をすくめた。ベッドが恋しい。

さて今月初め十一月八日。件の新入生、ミロ・アーヴィン・フェアファックスは一歩間違えばリンチとも言える『Raid』を仕掛けられた。十一月八日は、奴の誕生日だった。

『Raid』とは、数人で標的の生徒が寝入った頃に襲い、布団を剥ぎ取って隠してしまうという、ハウス内で行なわれる悪戯だが、入学以来二ヶ月分のやっかみ、その他諸々の鬱憤と面倒な誤解の苗床になったミロが標的にされたのだから可愛い『イタズラ』で済まされるわけがなく、第八学年の生徒を中心に上級第六学年まで参加しての夜襲となった。その念の入れようは恐れ入ったもので、消灯を過ぎた部屋に、明かりも付けずに押し入り、ミロ以外の人間はまず口を塞がれた。

七人部屋の第三学年新入生諸君は、上級生という名のゲリラに取り押さえられ、誰も部屋を出る事を許されず、目標物のミロは布団を剥ぎ取られるのでなく人間布団に押し潰され

るハメに陥った。

アイオリアが機転を利かせて部屋の壁を蹴り上げ、異変を感じた隣部屋のカミュ・バーロウが慌てて急を知らせに走り、ハウスマスターが駆けつけるといった一幕になった。

けれど、ハウスマスターが駆け付けた時には、お決まりの事。来襲者の姿は消え、後には半分パニックになった新人生と、咳き込んだミロが残されるばかりだった。時間にすれば十数分の出来事だったはずだ。

が…、ミロの上級生嫌いには拍車が掛かり、奴の同室で俺の弟のアイオリアや、オケでの同学年、パーカッションのカミュ辺りがそれとなく世話を焼いている様子だがどうなる事やら、だ。

暗い廊下を二、三の生徒とすれ違いながら早足で通り抜け、授業開始一分前、ラテン語の教室に滑り込む。殿、且つ壁際の席に俺はなるべく静かに落ち着いた。レポートの終わっていない学生が数人、必死にペンを走らせる音が響く。

受ける気は無くても授業を受けるのが学生の務め。無遅刻の学生である事は、見つからずカンニングしあう事と同じくらい教授の心象を左右する。自由に泳ぎまわりたかったら、柵を作る側の要求のうち、もっとも目立つ柵を越えずに居ることが肝要だ。

普段は割りと前方の席、というよりサガの相伴に与って最前列に陣取るんだが、何せ今日は障りがある。最後尾の隅で目立たないよう壁に凭れていたら、通常通り、最前列に腰掛けていたサガがするりと俺の隣にやって来た。

歩く歩幅は決して小さくないのに、足音一つ立てない。

猫みたいな奴だ。

背中に目でも付いているわけじゃあるまいし、人の気配に敏感な所もそっくりだな。俺は一人苦笑して、長椅子の直ぐ隣に腰掛けようとするサガを制した。

「ストップ！あまり近寄るな。酒臭いぞ」

一瞬動作を停止したサガは、納得したように呟いた。

「ああ：凄かったね。シュラは大分顔を顰めていたよ」

ああ、そうか、朝の時点で酒臭いのは分かってるか。同じ部屋だからな。

この分では、次にシュラに顔を合わせる時に上るであろうシュラの侮蔑の表皮も容易に知れるな。

乾いた笑いを浮かべていたら、大丈夫かと問われた。

生憎二日酔いと気の迷いは起こしたことが無いと言ったら、サガは少し困ったような笑顔を見せた。

？　ポイントのずれた返答だったか？　今の。

『少し困ったような』とは、多分俺じゃなきゃ気が付かないような、本当に微かな雰囲気で、それは俺がサガに関して自負しているものの一つだった。

『感情を面に出すな』と徹底的に躾けられてきたサガの本人も自覚していない、感情になる以前の気持ちの動きが、なんとなく、分かる。自惚れだと言われれば、確固とした反論も

出来ないが、どうしても譲れない頑迷さを持って、俺は判ると信じている。勿論サガ本人には一度も言った事は無い。

思考がさらに深く沈みそうになった時、丁度レナハン教授がドアを開け教壇に向かったので私的な話も個人の思索も打ち切りになった。

眠気を誘うラテン語の授業。

けれどサガはしっかりと前方を見詰め、ノートを取っている。

サガは、主席で卒業する事を条件にこのパブリックに入学した。その真剣な態度は入学当初から一ミリグラムも変化していないし、揺らいだ事も無い。見るとも無しに視界の隅に入るサガの白い横顔を眺めている間に、ついさっきの『大丈夫か』の意味が分かった気がした。

そんなに酷い有り様かな？　今の俺は。

本当に二日酔いでは無いし、眠い事は眠いが死ぬ程眠い訳ではない。ただ、ちょっと骨骨に力が入らないだけだ。ぼうっと考えていると、ある約束が頭に浮かんだ。

明日の昼、サガとコヴェントガーデンで待ち合わせている。

二ヶ月くらい前、廊下に呼び出されて十一月二十九、三十日の予定を聞かれた。日曜の昼はダメだが、土曜なら空いていると答えると、いかにもほっとしたというように、正装とはいかないまでもスクエアな格好で来て欲しいと頼まれた。日にちが日にちだっただけに、あまり強くも追求出来ず、おまけに「内緒」と返されてしまってはあれこれ考えるのも無粋に思えて二つ返事で了承した。

今はだいだい予想は付いているんだけどな…。

ロイヤル・オペラハウスの「ローエングリン」だ。

時間と場所から推測するにマチネーで、いつもの俺の私服じゃダメだって事はそこそこいい席なんだろう。

正直言って少し複雑な気分だった。

なんだか知らんが、サガは入学当初俺が焼いた世話を、過大評価している。

俺はちょっと足下の覚束無い奴を片手で支えてやっただけなのに。と、もう何十遍思ったか知れないボヤキを今日も繰り返す。

実際、入学してからクリスマス休暇を迎える頃には、同室の七人とは普通に会話できる状態になったし、オケでだってそれなりに一目を置かれる存在になっていた。

要は、直ぐにサガは十分一人でやっていけるようになったのだ。今の足下覚束ない某新入生が、まったく世話を焼かれている事に気が付かない上に、いつになったら目の前の壁にぶち当たらず歩いてくれるのか全く見当がつかない状態に比べてみて欲しい。そんなにして恩義に感じる必要は無いのに、とこっちが申し訳なく思う。

第一、俺も子分が出来たみたいで少しは得意だったのだから…。

明らかに水際立つ容姿と頭脳を持ちながら、自分にだけは真直ぐに信頼の眼差しを注いでくれる少年。自分の、決して

低くはない自尊心を一度も擦らなかったと言ったら嘘になる。結構調子に乗っていたと思う。正直言って。

そんなだから、最近サガの恩義の持ち方が少し苦しい。

俺にとっての普通の生活での『慣れ』が、サガには『凄い』事に映る。そこら辺の微妙なズレがサガに対する俺の強みだと、俺には冷静に理解出来ている。

つい二ヶ月前の出来事だった。結局バイオリンへの転向を決心したミロに、オーケストラの一員としては安堵したものの、始めて入ったベースの後輩への好意が存外の大きさになっていたことに少なからず衝撃を受けて堪えていた自分に、ブランデー付の紅茶を差し出したサガ。ブランデーの出所について尋ねた俺に、顔色一つ変えず、サガ本人のものである事、ずっと部屋に在ったことなどを報告してくれた。あの時、その驚きで一つで落胆が吹き飛んだ。

サガの行動で、自分の目の届いていない行動があったという事実。貴族社会外の、所謂俗世を全く知らなかった少年が、いつの間にか、強かで何事も楽しもうとする貪欲な好奇心を併せ持った一学生へと変貌していた実態。

酒の所持についてサガに入れ知恵をしたのは、上級第六学年でオケのコンマスであるシオンか、同じくオケの団長のドウコだろう。そんな風にして、サガは自分に触れるあらゆるものから吸収し学び、やすやすと生きていく術を覚える筈だ。

一瞬、冷たい感覚が頭の先から足の先までをカチッと光りながら消えて行った。本当に一瞬の火花だった。その冷たさがなんであったのか、気付きたくないと考えるより先に、感じた。

思い出す度、どうかしていたんだと頭を振って払いたくなる事があった。

今年の五月、サガの十五の誕生日、俺はサガをロンドンの家に誘った。

二月に女装をしてからというもの、サガにはマスコット的な存在、若しくは所謂ホモセクシャルな関係を望む誘いかけが膨れ上がり、それらへの対応は明らかにサガの神経を摩滅させていた。

それでもサガは俺に相談どころか、そんな誘いが在ることすら周囲にはもちろんの事、黙秘していた。後で判ったことだが、サガは俺が何も気が付いていないと思っていたらしい。

俺の方は、話したくないなら仕方が無いと、成るべくサガの挙動をそれとなく把握するようにしていたが、至らなかった。

五月下旬、丁度サガの誕生日の一週間くらい前だったと思う。オケの練習は休みだった。ちょっと目を離した隙に、俺はサガの所在を見失った。その辺を一回りして、見当たらなかったので、もしかしたらと部屋に戻ると、丁度部屋から出て行こうとするサガにかち合った。

その姿を見た時の衝撃は、今もきちんと言葉にする事が出

来ない。ただ、肺の中にライターか何かで火を付けられたようだった事だけはよく覚えている。カチッと音がして、ボッと燃えたんだ。肺の中の空気が。

サガの銀髪は、いつものようにきちんと櫛けずられていたと思う。服も綺麗にアイロンがあてあった。でも、何故かサガの姿に違和感を覚えた。そして、気が付いた。サガの髪は細かな土くれが付き、顔にも同じ土が付いていた。加えて、血の気の引いた白い頬には何かで引っ掻いたような細長い傷が出来ていた。小脇に抱えられた衣類には、赤土が付いている。

なんの怒りか判らない。でも、煮えくり返るような熱を腹に感じて、考えるまもなく足を壁に叩きつけてサガの進路を塞いでいた。反対側の壁に凭れ、腕を組みサガを見下ろした。腕を組まなきゃサガの襟首を掴み上げていた。怒りをぶつける相手はサガではないというのに…。目を細め、薄っすら笑みを浮かべてサガに質す俺の姿は、明らかに恫喝者のそれだった。問う声も、溢れる感情に掠れた。

「とうとう取っ組み合いの喧嘩も覚えたか？」

そんな風に言ったと記憶している。サガの気まずさを含んだ沈黙が、余計に俺の神経を逆撫でした。怒鳴りたいくらいの怒りなのに、怒りは在りすぎると出すこともままならないらしい。囁くような声でしか話せない。もう過ぎた事だからとかサガは言い訳したと思う。組んだ腕に力を込めて俺は言った。

「五月三十一日、土曜日、お前、空いているよな？」

これ以上の嘘と隠し事は沢山だ。そう思った。あらん限りの威圧を込めて確認という形の脅しを掛けた。

「一日遅れだが、お前の誕生日、きちんと祝おう。俺んちに来い」と。

それだけ言うと、歯を食いしばって壁から足を下ろした。全身の毛穴から怒気が漏れることを隠しもせず固まっているサガの脇を通り抜けた。サガが部屋から出て行った後、握り締めていた手をやっとの事で開いた。あんなに力を込めて手を固く握り締めた事はない。痺れた指は容易には伸びなかったし、掌に食い込んだ爪の跡もなかなか消えなかった。

土曜日、引きずるようにして連れて帰ったサガに、何とか今迄の事を吐かせようとしたが無駄に終わった。唯先日の事の顛末を聞き出せたに終わる。何か力になると言った俺の申し出は、やんわりと拒絶された。

俺がサガの横に居る時は、決して上級生の奴らはサガにちょっかいを掛けてこない。それが分かるだけに色んな事が歯痒いし、気持ちが治まらない。サガは、報復も、しっぺ返しも何も望まない。

結局、今までどおり、俺は蚊帳の外でうろうろ心配しているだけか、と疲れて脱力した時、ふと言葉が漏れた。

「お前、もし俺が付き合ってくれって言ったらどうするんだ？」と。

サガは一瞬言葉を無くし、けれど直ぐに何でもない事の様に言った。

「さぁ…先輩は断ってしまったからね…」

咄嗟にサガを見遣った俺は、けれど直ぐに疲れた笑いを口の端に浮かべて言った。

「いっその事、俺と付き合っているとでもしとけばちょっかいの数も減るんじゃないのか？」

作戦を装って、この会話の真実を無かった事に俺はした。

何故、もし…などと言うことを尋ねたのか知れない。けれどその答えを、本当は知っている。だから、気付きたくない。

脆弱な生の感情に、俺自身が誰より怯んだ。保護者を買って出た自分には許せない嫌を サガに掛けた。溜息を付いた。きっとサガはその溜息を誤解しただろう。サガの強情に対する溜息だと思ったに違いない。けれど、俺は、俺自身に向かって嘆息したんだ。

その日以来、今までにも増して自分をサガの保護者に仕立てて接してきたつもりだ。それが緩んだのは、先の九月、サガに頭を撫ぜられたとき以外に無いと断言出来る。

それくらい注意深く、俺はサガをある範疇から排除していた。話には聞いていたし、実際自分の目でも見てきた訳だから、存在は否定しないし、世間が言う罪悪なんてこれっぽっちも信じちゃいないが、俺がサガに持っていい感情では無いことだけは確かだ。

又溜息が零れる。一度言葉で認識した感情は厄介で…。

突然サガの右手が視界に伸びた。俺のノートの上を数度叩く。

いけね！授業中だ。

苦笑いして、俺は頭を切り替えた。

サガが俺に寄せる全幅の信頼、それを俺の都合で潰すのは気の毒だ。サガの望む自分でなるだけ長い間居てやろう。灰色のラテン語の授業で、俺は俺の決心を何度も鮮明な誓いに塗りあげる。もう何度目かしれない慣れた作業で、それは酷く寂しい作業に思えた。

昼食時間になって、大急ぎでバスルームに飛び込み身体を『洗濯』。

生き返った。頭もすっきりした。

濡れた髪もそこそこに食堂に飛び込むと、昼食の確保を遂行してくれたサガとその横にアンドリュー、向かいにはシュラが居た。

俺を見るなり、少しはまともになったなと嘯いたシュラには構わない。お前の基準を常に クリアしなけりゃならなくなったら、監獄だよ、俺には。

サガに「サンクス」と言って大急ぎで食事をかき込む。何せ朝食も食べてない。

「昨日は随分遅くまで帰って来なかったんだね」

アンドリューが言った。もう同室二年目に突入したこのスクールでの大切な仲間の一人だ。

同じスクール・オーケストラのメンバーでもある彼は、楽器の特性か、彼自身の特性か、ひどくおっとりとしているようでいて観察眼の鋭いヴィオリストだ。アンドリューは常に中庸を保てる類の人間で、嫉妬という感情にも遠いという美徳を持っている。第四学年になり、同室となったことでサガとも親しくなったが、サガにとっていい機会だったと思う。

また、同室三年目、オケも同じといった腐れ縁のシュラは、チェリストで完璧な個人主義者且つニヒルな保守派だ。しかし、紳士である事に命を賭けているような人間だからこれまたサガの同室としては文句なく得がたい人材だ。アンドリューとシュラ、この二人と同室になって、サガの足場はしっかりと固まったと言っていいだろう。

「遅く、じゃない。早く帰って来たんだ。今朝にな」

俺はアンドリューに答えた。つとライ麦パンを喉に詰まらせそうになり、慌ててミネラルウォーターを喉に流し込む。

アンドリューの呆れた、よくやるなぁとの言葉が耳に届く。アンドリューの感想に異議は無い。まったくだ。俺も呆れているよ、あの上級生達にはな。

「どうせならそのまま帰って来なければ良かったものを」

「シュラ、お前の寝顔がどうしても見たかったんだよ。冷たいことを言うなよ」

シュラから無言のパンチが飛んで来た。僅かによけ損ねて頭上に摩擦熱が走る。お前、本気だっただろう…。ソーセージを素早く一本頬張り、シュラと言葉の掛け合いを楽しむ。

「後でいいもの見せてやるから機嫌直せ」

「お前のいいものは当てにならん」

「いいもんだって。なんていったって、代々のベースパートの秘宝だ」

秘宝の言葉にアンドリューが話に入ってきた。

「秘宝？　代々ってどれくらいさ？」

ホント、素直でいい奴なんだよなぁこいつって…。あのシュラの疑い二百パーセントといった表情を一瞬でも見ておけば、そんな期待丸出しの声は出ないだろうに…。

取り敢えずアンドリューに笑いかけて、短く俺は答えた。

「戦中だ」

一同黙り込む。思案顔だが、答えを知っている俺には虚しい沈黙。さて、どうこの事実を宣告するか？　俺は淡々と簡潔に答えを提示して見せた。

「一九四二年発刊のビニ本さ」

場に、先程とは異なる沈黙が下りた。自分で口に出しても体から魂が抜け出てビニルの抜け殻になりそうだ。三秒後に、シュラが音を立て椅子から立ち上がり言った。

「サガ、行くぞ」

サガとシュラは、次はドイツ語の授業を取っている。俺はシュラの上着を咄嗟に握り締めて言った。

「照れるな。安心しろ。絶対に見せてやるからな。絶対だ」

ギリギリと力を入れている俺の手を、シュラの指が力ずくで外しに掛かり、骨が白く浮いている。

「下らんものを見せなくてもいい。この手を外せ」
「イヤだね。絶対に見せてやる。俺はケチな男にはなりたくないからな」
　癇癪を起こしそうな均衡は、アンドリューの七分前と言う言葉に崩れ、俺の口は残りの食料を掻き込みに戻り、シュラとサガはその場を去り、アンドリューも地理の授業に向かった。俺は倫理の授業だ。後三分で詰め込んで、二分で走るぞ。
　実は秘宝はちゃんと二つあって、一つは彼らにも公表した色褪せた一九四一年発刊の所謂抜き本。実際にここのパブリック卒の志願兵が戦場の友として戦地を歴々としたゴットマザーだ。
　来歴は確かに感慨深いんだが、めくった先に見える淑女の方々が、なんとも現代被れの若人には辛いところ。
　もう一つは、ちゃんとしたピカピカの最新号。これは有難くバックの底に沈めて家に持ち帰らせて貰う。寮に置いといたらそれはそれで面倒だからな。老淑女は、再来年、今年のコントラバスの新入生の誕生日に大仰なリボンに包まれて、また恭しく手渡される事だろう。
　それが、伝統というものだ。

　一通り午後の授業もこなし、ぼちぼちとオケの練習に音楽棟に向かった。楽器庫からソフトケースに入った愛器を引きずり出す。
　第三学年の初心者時にはスクールの楽器を借りていたが、今年の進学に合わせ、これまでの自分の貯金と今後十年は必ず使い続けるという契約を出資者である父と交わして手に入れた。特に低音の鳴りに艶があって気に入っている。卒業までにはもう少しいい弓を揃えたいんだが…大学に入ってバイトを始めるまでは無理かもしれない。
　リハーサル室の扉を開くと、練習開始まであと一時間はあるのに半分近くの人数は集まっていた。
　いい傾向だ。何せ本番まで一ヶ月を切ったのだから。
　巨大なビートル（甲虫）のようなベースをゆらゆら抱えて歩いてゆくと、ぐにゃっ、と何かを踏んづけた。
　……。
　俺の半開きの唇は、盛大な溜息を噴出。
　ミロ・フェアファックスが、先に練習を始めているクリスやスチュアート、ジェームズの愛器の抜皮に潜り込んで寝息を立てている…。
　何というか…ここ二週間で見慣れた光景になっているし…別に害も無いんだが…。
　五世紀頃よりドイツ北西部から移動し、グレートブリテン島に定住したゲルマン民族の一派、アングロサクソンの末裔、言葉も文字も持った人間の姿がこれでもいいのか？　と一瞬思う。いや、俺は好きだけどね、こういう奴。でもな…一応新人生なんだよな…こいつ…。

ここまですやすやと無防備に寝てくれると、いっそ清々しくも思えるから俺も怖い。

十二月の『Raid』以降、どうもベッドでの寝心地が悪いらしく、代わりに見つけ出した新しい寝床が『ここ』らしい。授業終了から、練習開始までの寸暇を惜しんで熟睡している。

変わった奴だ。

物凄く音や明かりに敏感で、眠りが浅いとアイオリアは言っていたが、一度自分が『安全』と認識した場所では恐らく天井が落ちても目覚めまい。

細く触れればふっつりと切れそうな神経と図太い神経がDNAの螺旋と同じように緻密かつ強固に絡み合い一個の人間を形成している。

周囲も良くしたもので、この新入生の奇行を『かわいい』の一言で容認してしまっている。斯く言う俺もついつい今剥がしたソフトカバーをこいつの上に掛けてやっているのだから、終わってるとはこの事だ。

こいつを取り巻く周囲の反響、一歩オケから外の世界に出た時と、今のこのギャップ。

ミロが、これを上手く自分の意志でコントロール出来るようになった時、パブリックに来て最高の智恵を学んだ事になるだろう。そうなってくれればいいが…、とそう思う。

取り敢えず、自分の興味のない者には見向きもしないというその美食を何とかしないとなぁ…。ま、言っても分からんだろうが…。

何せ三ヶ月見ていて最初の衝撃は、言語を使って思考していないと気付いた事だったからな…。生活の殆を運動神経の反射で生きてる癖に、変な所で繊細な哲学という言語で平常の生活をしてのける。

傍から見ていてこれ程アンバランスな奴も珍しい、と結論を出すと、ミロは自分の状態を『普通』だと思って生活しているのだ。

奴は、相手の人間の根源的な部分を嗅ぎ取り、言葉を解さずに肥えた舌に乗せ、気に入れば何処までもついて来るが、気に入らないものは見た事すら覚えていない。問題は、それが景色だろうが花だろうが、動物だろうが、総てが一緒くた同列になっている事だろう。

人間と言う生き物は得てして嗅ぎ取り過ぎる性質がある。ミロの記憶にも残らなかった人間は、彼の無関心に苛立つだろうし、では興味を持たせようとしても、相手の好意より自分の嗜好が最優先される動物であるミロの関心は得られない。

無関心を故意の無視と取られるか、悪意の傲慢と取られるか、悪循環はブレーキを持たない。おまけに、被敵愾者は売られた喧嘩は必ず買うは、義侠心は強いは、細っこいチビだは、そのくせルックスいいは…。ほんと、こいつの卒業する時の姿が楽しみだ。

身長が伸びる頃、顔も縦に長く長く伸びて、所謂馬面にでもなっていれば、唯の変人で済まされるようになっているかもしれないが……写真で拝見したミロの母親は極めて知的な

雰囲気を漂わせる小柄な女性だったし、家族の写真を一回見た限りでは、今のミロの造作がガチャガチャと崩れるとは考えにくい。せめて愛嬌のある間抜けなつくりの顔だったら、ここまでやっかみが過熱する事も無かっただろうに…。無邪気に人類の三大欲求の一つを満喫している後輩の姿を見る。

考えるのは止めよう…俺はサン＝サーンスの二楽章を開いた。

ようやく人が集まり、学指揮も現れた。そろそろチューニングだ。

俺は、弓の先でコントラバスのソフトカバーからはみ出した金色の塊を突付いた。

「そろそろ始まるぞ。お前のパートはあっちだろ？」

むくっと起き上がったミロは、くしゃくしゃになった頭のまま、徐にバイオリンパートの方を向くと、短く口の中で返事をしてのそのそと立ち上がった。

敷き藁、違う違う、上掛け及び敷布代わりに使っていた数枚コントラバスカバーを両腕に抱きかかえると、慣れた動作で部屋の隅に詰み上げ、半分寝ぼけた状態でふらふらと楽器の間を縫って正反対に位置するバイオリンパートの中に埋もれて行った。

ベースパートに安堵の息が漏れる。

あのな、いくら動物に近い人間でも、曲がりなりにも人間として暮らしているんだ。あの距離を無事にたどり着けないでどうするんだ？　どうも奴はえらい方向音痴らしいが…。だが、部屋の端から端までだぞ？

そう思いながら、自分も息を吐いていた事に気付いた。…だが、断じてこれは甘やかし癖が出て来たベース連中とは違うぞ。俺の、今日もあのしゃんとしない歩き方で楽器を引っ掛けなかった、それを安堵しているんだ。

なんだよ、クリス、何にやにや笑って人の事見てんだよ！

譜面、開いているとこ違うじゃないか！

ミロと同じ新入生、カミュ・バーロウのオルガンが出すAの四四二が室内にジーンと通った。

集中、集中！　本番はもう直ぐだ。

シオンが静かに何度か弓とペグを動かし調整を終える。カミュに向かって微かに頷く。オルガンの音が消える。ざっ、とシオンの視線がオケの全体の上を走る。後何回この姿を、この部屋で見る事が出来るだろう。シオンの発するAの音に管パートの調律が被さる。管が終わり、続いて弦。

ふと見ると、ミロの目はいつの間にか真剣な眼差しに変わっていた。ミロのパートのトップに座るサガの姿は、響き渡る幾種類もの音の中に起立する凛とした彫刻のようだった。空気が、そこだけ違う。

サン＝サーンスのオルガン付きは、猛烈に格好いい曲だ。聞くだけでは身の内に走る衝撃は収まらない。弾かなくては。巨大な音の渦に飛び込み、そこで暴れ狂う音の一つにならな

ければ到底満足出来ない。そういう曲だ。

ただ、バイオリンは強烈に難易度が高い。大学でも中々演奏されないのは、半テンポずらされて掛け合いされる中間部、アクロバティックな効果音が乱発される後半部のバイオリンパート、ソロが突出する管パートの事情に因る。

菅のソロは転ければ格好悪いだけだが、バイオリンの掛け合いとアクロバットが合致しなかったら音楽が崩壊する。指揮者泣かせの曲でもあるこの曲は、拍すら一定じゃない。

パーカッションのドウコが昨年案を提出し、管が尻馬に乗り、最後まで反対したシオンもとうとう折れた。パーカッションはいい。オルガンとのデュエットでここまで突恵ろしくクールな曲は無いと断言出来るからだ。管もいい。もともと奴等は目立ちたがりだ。気の毒なのは、バイオリンだろう…。常に音での団体行動を強いられるこのパートは、いくら群れのトップが優秀でも揃わなければ意味がない。

昨年まで技術の高さでファースト・バイオリンに座って居たサガは、サン＝サーンスに決定して直ぐにセカンドのトップに席を移した。

サガとしては、精一杯ザッツを分かり易い様に出したり、音をなるべく後ろへ飛ばすよう工夫したりしていたが、異例の若学年生でのトップと言う事もあってなかなか上手くセカンドはまとまり切れていない。今度のパート分けは、上級第六学年がファースト、下級第六学年と第五学年がそれぞれファーストとセカンド半分に別れ、第四学年総てがセカンドという布陣だ。

ファースト・バイオリンは弾けなければ話にならないから、そこそこ腕のいい奴等が揃っているが、セカンドは中々難しい…セカンドに配置された本人達がそこにつまらんプライドの折損を隠しもってたりするから余計にだ。音楽をやるために集まっている集団なのに、実は音楽以外で心を配らなければいけない事が大いにあったりする。所詮集団の成す事と達観するのが賢明と第三者の視点を持ってすればそうなるが、サガはどうか。意外に集団に接するのは上手くやるからそれ程心配しなくてもいいのかもしれないが…。

とにもかくにも、苦労が多い割に華やかじゃないんだよな、バイオリン。今回は。

夏の長期休暇明け、後ろから聞こえてくる音に歯を食いしばって居たサガの姿は悲壮感さえ漂っていたっけ。俺に言わせれば、サガが完璧主義過ぎるんだと…って、でもないか、セカンド、リズム悪いなぁ…。休符の後、バラバラ入るのはみっともないぞ…。あそこまではっきり出しているサガのザッツ、全然見て無いだろう…。頭痛いなぁ…。楽譜を睨み付ける気持ちは分かるが、休符の後一箱分は、休符の間に頭に入れて顔を上げないまでも目の端でパートリーダーの身体を見ていないと揃わないだろうが…。

ほら見ろ、セカンドだけやり直しだ。ミスター・ブレインが今度はセカンドバイオリンに向けてだけ指揮棒を振る。サガの正確な音と、今度はパートの一番後ろから明るいミロの

音がはっきりと聞こえた。
それでいい。ミロ、お前の役割は、確実にサガの意を汲み一緒にパートを纏める事だ。その為に最後尾に座り音でパートを挟んでいるんだ。いくら正しく音を出していても、お前の音が小さかったら意味が無い。
三度目、バラけて居た音も漸くまとまり、トゥッティが再開される。
本番三週間前、あの夏開けよりは、サガの、音に関する神経の張りは幾分和らいでいるようだった。

オケの練習後、同寮の弟、アイオリアと待ち合わせて寮を後にした。手荷物はお互い洗濯物の詰まったスポーツバック一つだけだ。俺のスポーツバックには、昨日の晩上級生から授かった『貴い』雑誌と、ミロから貰った誕生祝いが入っている。
実は、練習の後、新入生を含めたベースパート全員、コンマスのシオンと団長のドウコに呼び出されてミロの件で勧告を受けた。論旨は到って簡潔で、ミロを甘やかすな、と言う事だ。どうもバイオリン、特にセカンドのまとまりが悪い原因に、ミロが絡んでいるらしい。
『弾けるからっていい気になっている』そういう事だそうだ。
まあ、練習始まるまでベースの皮に包まってスカスカ寝ったり、休憩時感中に制服のボタン付け直してたり、ベースパートに馴染んで俺達上級生とタメ口利いたり、とそういう常識に当てはまらない行動の一々が勘に触るらしい。
けれど、シオンの話す所を聞いていて、俺の持った感慨はメンドクサイの一言。ベースの連中、新入生共々の共通の感想は、ひらったく言えば、そんなのバイオリンに関係あんのか？だ。
トップの上級第六学年のスチュアートは、バイオリンって難しいのな…と言い、やっぱあいつバイオリン、向いてないんじゃないのか？　と一言呈った。
ドウコも笑いながらそう思うと言っていたが、コンマスのシオンの表情は至って厳しかった。
だから、俺は、でもな、と、ミロ本人の前では絶対にする気は無い陳弁を申し立てた。
文句言い立ててる奴等の中で、どれだけの奴がちゃんとあいつを見ているのかと。
あいつは、事情の許す限り早くに練習室に来て椅子を並べているし、譜面立ての準備もしている。楽器を弾く奴、特にバイオリンパートは指を気にして重い荷物を運ぶ事を避けようとするが、ミロは率先してそういった作業にも手を出す。コントラバスに居た時は人一倍真面目にスケールの練習をしていたし、バイオリンに行ってからも急遽乗る事になったサン＝サーンスを必死でさらって居たじゃないか。ボーイングだって、サガの楽譜を借りて一晩で写しを仕上げて来た事を

俺は知っている。練習前にベースでスカスカ寝るようになったのだって、『Raid』の後、どうしても落ち着かないっていうんで準備済ませた後に床に転がってるだけだろう。それだってここ二週間の事で、場所はベースパートだ。バイオリンの連中に迷惑を掛けている訳じゃ無いだろう…。

自分が百パーセント正論を言っているとは思わない。確かに、ミロの行動は集団の中じゃ不注意だ。しかし、それに一々目くじら立てる集団も、十分幼稚だと俺は思う。

シオンは、黙って俺を見ていたが、一言いった。

「フェアファックスだけが至らないとは言わない。だが、オルガンのソロを同じく急遽担当する事になったバーロウは同級生はもちろん、上級生とのコミュニュケートもきちんとこなしている。そういった不用意な摩擦を避ける事の注意を怠っていると言っているだけだ。そして、その怠たらせている要因に、君たちの甘さがあるのでは無いかと見るから忠告している」と。

こういう言い方をされると、俺達はぐうの音も出ない。

シオン、この人も七十人からの学生オケのトップに座るだけあって、こういった『集団の掟』には厳格だ。その分団長のドウコが結構緩いんだが、団の仕切りの一切には、余程の事が無い限りシオンに任せている。

それでもミロの『Raid』の直後、烈火の如く怒り狂ったのはドウコであったし、冷たい怒りで全身を屹立させていたのはシオンだった。

ミロの『Raid』の後、どうしても来襲者達について口を割ろうとしないミロに手を焼いたドウコに俺が呼び出されている間に、シオンはさっさとミロの同室に当たり面割りを済ませていた。その後はお決まりの呼び出しと、お礼だったが、見張り番変わりに立たせていたサガも呆れ返る程無駄無く、徹底的に処理していた。

そういう人達だからこそ、浅はかな結論での勧告ではないと分かっている。だがしかし、だ。オケだけでは今の所伸び伸びと振る舞っているらしいミロのそれを、摘み取るような真似はしたく無い。

逡巡しているベースに向かって、ドウコがさらっと口添ええた。

「このままで行っても、ミロにもバイオリンの連中にもいい事は何も無い。お互いの正統性を言い合って不毛な気不味さを味わうよりは、お前さん達が協力して、ミロの教育を済ませた方が、ミロに取って意義のある事になると俺は思うぞ？嫌な事だと考えないで、あいつが集団の中でも楽に生きていけるようにしてやろうって思えばいいんじゃないのか？ それに、不条理な突き上げに曝されているのは今は寧ろミロの方じゃ無く、セカンドのトップだからな」

呵々と笑って同級のスチュアートの背中を叩いたドウコは、心底それがいい方法だと言っている。彼の言葉に裏は無い。

ただ、シオンは冷たく揶揄するような眼差しをそれとなく俺に向けている。

分かったよ。今のままだとサガも立場が悪くなるって言ってるんだろ？　どうせ親切ごかした顔した連中が、サガに管理能力を問うような発言をし、サガがそれを全部自分の所で止めているんだろう。

サガだって、際立ってきたあのミロの音を止めるような事はしたくないに違い無いから。

溜め息を吐いた。

俺達ベース全員だ。

取り敢えず、本番前の最後の連休である今週末明け、スチュアートの方からミロに練習前の蓑虫禁止を言い渡す事になった。俺のフォローはその後だ。

ベースの新入生、マイケルとマーチンに、クリスがそんなに怖がらなくてもいいとかなんとか言っている。全くだ。煩く言う奴等の影に怯える必要はこれっぽっちもない。

集団の強さは、規格外の事象や人物が混入された時に始めて発露する。ミロにも変わって貰う。でも、このオケにも変わって貰う。俺はその為に動く。そう決めた。オケもミロの事も気に入っている。それなら、この両方に対して俺のベストを尽くそう。

少し肩を落とし気味の新入生やクリス、スチュアート、いつその事またバイオリンから引き抜こうぜ、とぶつぶつ言い合っているジョンとマークスの背中を景気付けに叩いて言った。

「深刻になるのは止めよう。どっちにしたって、いい方向にしか転ばない」

「お前のその強気は、どっから出るんだ？」

クリスの言葉を、俺は一笑した。

「俺達が、このオケの事もミロの事も気に入っているからさ」

ベースの連中は、下品な奴等が殆どだが、それに輪をかけて冷静な判断力と時に滑るユーモアも持っている。滅多なことじゃ気落ちしきったりしないものだ。だから、お互い笑ってそれぞれの寮の前で散って行った。

俺が寮に戻って来たのは、アイオリアとの待ち合わせた時間を大分過ぎて居た。

スミスハウスに着いた時、まっ先にエントランスホールを覗くと、アイオリアとミロが並んでレカミエに腰掛け話し込んでいた。急いで部屋に戻って、食事を済ませて居たシュラに二日の留守を告げバックに衣類を突っ込んで飛び出す。

「じゃ、また来週！」

と言って扉を閉めたら、存外大きい音を出してしまった。きっと奴は顔を顰めたに違い無い。

その後、食堂の扉から中を覗き、サガがアンドリューと食事しているのを確かめた。アンドリューがこちらに気付き、サガを促す。サガが振り向く。俺が特大の笑顔を披露して、軽く手を上げると、小さく手を振ってくれた。

また明日、昼に会おう。

言外に思いを込めてもう一度笑顔を見せてその場を去った。

エントランスホールに漸く辿り着くと、予想道理、アイオ

リアが遅いと文句を言う。それに、済まん、と適当に謝って、先程から俺を見て居たミロに視線をやる。すると、随分と大人びた眼差しで正方形した紙袋を渡された。

「明後日誕生日だって聞いたから…。誕生日おめでとう」

静かで真率な祝いの眼差しに、少し息を飲んだ。普段のおもちゃ箱をひっくり返したような落ち着きの無い振る舞いや、苛烈な義侠心に爛々とする眼差しもない。非常にスマートで紳士的な態度だった。

やれは、出来るんじゃないか…。

そう思って呆然としていたら、じゃ、と言ってくるりと背を向け部屋に戻りかけた。照れ隠しなのかなんなのか、随分とあっさりした態度だ。

俺は慌ててミロの背中に向かって礼を言った。すると、くるりと振り返ったミロは、本当に幸せそうに笑って、小さく手を振り消えて行った。数瞬、俺は言葉をなくした。ああそうか、目の前からあっという間に去っていったあの小さな体は、自分以外の人間が喜ぶことで、心底幸福を味わえるそういう人間なんだ。あの笑顔はそれを物語るに足るものだった。

「それ、コントラバスの弦セットだよ」

アイオリアが少し得意そうに俺に告げる。分かってる。手にした時に分かったさ。コントラバスの弦は高いのに、あのバカは…。

ふうっと深呼吸して、俺はさっき思った事を自分にもう一度確認させる。

あいつの好意に応えられるだけの手助けをしてやろう。それは、あいつを可愛い後輩として只甘やかしてやる事じゃ無い。クリスなんかは、コントラバスに戻したらいいんじゃないかと言っていたが、それではあいつに取ってなんの解決にもならないし、あいつは一度自分で決めて出て行ったものを、もう一度戻って来るなんて事は絶対にしないだろう。

それに…あいつは、強い。落ち込めばかなり激しく深く沈み込む質と見たが、根源的なものは多分、誰よりも強い。人の幸せを喜べるというのはそういう事だ。下手したら融通という手管が無い分、俺なんかよりずっと強いかもしれない。

少し伸びて来た前髪を掻き上げると、不思議そうに見上げている弟の背を促して、家路に着いた。

物事は、良い方にしか転ばない。

何故なら、良い方へ望む気持ちは誰でもが持っているからだ。

陰鬱な十一月はもうすぐ終わる。一年最後の祭典の月がやってくる。

力一杯楽しもう。

俺は、芝を蹴る足に力を入れ真っ直ぐに歩き始めた。

十一月二十九日、土曜日

家に帰った土曜の朝は、搬入のトラックや人の声で始まる。外から進入する繁華な気配が全身に沁みるようにして覚醒。バラ・マーケットの喧騒だ。

ロンドンブリッジから徒歩五分。高架線下に、食品満載のマーケットが立つ。焼き立てのパン、煮込んだスープ、チーズやオリーブ、香辛料、四足動物の生肉、魚介類、新鮮な野菜や果物などなど、近場にスーパーなんてものがないこの辺りじゃ本当に重宝している市だ。バーモンジー、ランベス、時にはテムズを超えて人が来る。

イギリスに戻るに際して、とにかく母が新鮮な食料の確保に便があるところを譲らず、結局ここサザークに落ち着いた。父はもう少し郊外の閑静な場所を希望していたようだが、まあ、女性の希望が通る事が家庭円満の秘訣だから、父権に少々傷がついても諦めた事は賢明だろう。ただ、母共々俺にも十分な恩恵が有った。

歩いて直ぐにロンドンブリッジ駅。テムズを渡れば目と鼻の先にソーホー地区がある。トロカデロ、ヨーロッパ最大の中華街、カーナビー通り、リージェント通り、劇場、シアター、夜の町並み。平然としてれば大抵実際の年齢より二三才は上に見てもらえるから、パブリックに入るまでの九ケ月は随分と遊び歩いた。

サザークはテムズ川南岸に位置していて、河岸には倉庫が並ぶが今はあまり利用がない。それから、一九四七年に建設された巨大な火力発電所バンクサイド。これも今は閉鎖中。ジル・ギルバート・スコットなる人物が設計した特徴ある外観の為に取り壊しは免れている。

古いパブやワインの専門店、人骨博物館、ロンドン・ダンジョン、ディケンズの「オリバー・ツイスト」、ナショナルトラストのオクタビア・ヒルやクリンク刑務所。ロンドンを始め歴史を内包する街が持つ沁みるような独特の時間と深い沈黙を、石畳や木や、壁に感じる。これはアメリカには無かった。そして、それが俺は嫌いじゃない。

また、家の真向かいにはサザーク大聖堂が聳える。正式には『セント・セーヴィア・アンド・セント・メアリ・オヴェリ（オーヴァー・ザ・リヴァー）』。中央の塔は十四、十五世紀のものらしい。向こう岸のセント・ポールズ大聖堂に比べると大分地味で観光客もあまりやって来ないけれど、この二十一世紀への奔流から少し外れた静けさが、今年の五月からこっち、何度俺の頭を冷やしてくれたかしれない。ロンドンに戻り、この部屋から窓の外を見ると、ある光景がいつも再生される。五月に、自分の口から出た益体のない言葉が、耳の中に木霊する。なんであんな事を言ってしまったのか、消せるものなら両手でくしゃくしゃに丸めて屑籠に叩き込んでしまいたい。「お前、もし俺が付き合ってくれって言ったらどうするんだ？」

消せない言葉を、右手でぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜる事で紛らわした。本当に、馬鹿な事をしたってそう思う。

窓から外を見遣ると、まだ暗い。冬のヨーロッパは日照時間が極端に少なくて太陽が恋しくなる。

取り敢えず寝巻き代わりのシャツの上にセーターを被り、二階の居間に下りる。冬になると顔を洗うのが辛い。朝食の支度をする母の隙を狙って台所のボイラーを使って洗顔を済ます。母は邪魔だから早く移動しろと宣告するが、聞こえないふり。何時もは一秒で済ますくせにとか何とか後ろに立って再三の催促。仕舞いには押し出されるような形で食卓に座る父の傍まで流された。

タイムズを広げ、一杯の紅茶を目の前に、黙って椅子に腰掛けている父は、物珍しそうな顔をして俺を見ていたが、結局何も言わずにまた紙面に目を落とした。背後から再び母の声。「今度のバザーはいつ？　お金渡すから、忘れずに制服の古着買っておきなさいよ？」

父の溜息が新聞の隙間から漏れた。きっと父も言われたことのある言葉だったに違いない。丁度起きてきたアイオリアが呟いた。頼むから制服、大事に着てくれと。順調にアイオリアの背がエインズワース風に伸びれば、今着ている俺の服は間違いなく弟も手を通す事になる。狭い食卓に、男三人の湿った溜息が漏れた。

「それじゃ、今日は夕飯要らないのね？」

漸く揃った朝食の席で母が確認した。夕飯を外で適当に済ます、と言った俺に、サガが今回は家による可能性が低いと見て取っただろう少々残念そうだ。

母は、サガが大の気に入りだ。俺が連れて帰って来た友人達の中では群を抜いて礼儀正しく、清潔感があるんだそうだ。加えて、サガが受けてきた貴族的教育の成果、徹頭徹尾淑女として扱われる事にえらく乙女心が刺激されるらしい。父は見て見ぬ振りを決め込んでいるが、そんな父に対する当てこすりもあるというのが俺とアイオリアの共通の見解だ。

あいつはそんなに甘い玉じゃないんだけどな…。カリカリのベーコンを齧りながら思う。

実は、ミロの『Raid』一件で、報復の方法を決定したのはサガの提案だった。暴力に訴えるのではなく、相手の報復意欲を殺ぎ、かつ二度とミロに対する攻撃意欲も殺ぐ方法。サガは、押さえつけた首謀者達の肌に直接、深い反省又なり懺悔の言葉を書き連ねる事を提案した。結果、その有効性を認めたオケの上級第六学年生（実行部隊は最上学年生のみとドウコとシオンが決めたからだ。俺とサガはミロとの付き合いの深さから特別に参加の自由を選ぶ恩恵に与った）満場一致で採択され、報復の日、ゲリラ達の皮膚には油性マジックで、女性用の下着やバニーガールの衣装などが嬉々として描き込まれる事となった。

ドウコのかき集めてきた雑誌の切抜きを参考に、当初は彼

等の胸にはブラジャーを、下にはガーターが再現されるはずだったのだが、金箔の連中がまずは乳首の周りを茶色のマジックで拡大し、股に象の顔を描き始めて事態は暴走を始めた。

誰が一番恥ずかしくて服を脱げない内容を表現出来るか。

俺達ベースのパートはひっくり返してウサギの尻尾まで書き込んだが、ファースト・バイオリンのSM仕立てには負けたっけ…。普段頭固くて澄ましてる奴らが箍を外すのが一番寒い。シオンは早々に黙したまま見張り役のサガの隣に移動していたが…。

落着した後、ドウコに呼ばれてもあの二人は梃子でも見張りの場所から動かなかった。後でサガに理由を尋ねると、美しくないから、との答えが返った。あんなことに美しさを求めてどうするのかと思うが、まあいい。そういう奴なんだと納得する。これが、女の目から見ると綺麗な王子様にでも見える奴の本性だ。にこにことしながらサガの近況を尋ねる母に、知らないってのは恐ろしいという言葉が頭を掠めた。きっと、サガに交際を申し込む勘違い野郎供にもその辺が見えてないんだろう。

食事が落ち着き、珈琲に手を伸ばす頃、母が言った。

「ヴィンセント、あんまり変なところうろつくんじゃないわよ?」

「大丈夫。今日の格好じゃ裏道には入れないよ」

父が、新聞から半分顔を覗かせて尋ねる。

「何だ? 何処に行くんだ?」

「オペラハウス。ローエングリンを観に。誕生祝だって」

「お前にオペラねぇ…。そういうのって外れと判っている宝くじを買うくらい意味のないことじゃないかしら?」

隣のアイオリアが吹き出した。そりゃ、ね、母さん、俺は家ではロックばかり聴いちゃいるけど、スクールではオーケスラのコントラバス奏者なんだぜ? 何度言っても俺がクラシック音楽を演奏している事が実感出来ない母は、心底哀れむような眼差しで俺を見ている。珈琲を一口分喉に通して、俺は母に言った。

「それ、今度サガが来たら直接言ってくれ。多分、あいつは否定してくれると思うけどね、俺は」

「あの子、礼儀正しいじゃない。失礼な事は口が裂けたって言わないに決まっているわよ。そんな人物を弁護人に仕立てようなんて、甘いわ」

失礼な事を息子に言っている母親の自覚は無いのだろうか? 追求しようとする俺の脚を、父の膝が小突く。女の話を理論的に追求しない事。これも家族という集団を上手く運営していく秘訣だった。

十時五十三分。

軽くシャワーを浴びて、ベッドの上に広げてある本日の戦闘服に目を落とす。

白のオックスフォード・クロス、セミワイドスプレッドのシャツ。チャコールグレイ、シングル3釦一掛けのスーツ。タイ

はアプリコットを基調としたインド更紗。結びはセミ・ウィンザー。コートはハリス・ツィードで、ちょっと見た感じではガーズ・コートに見えるゆったりしたもの。取り敢えず、追い返される事はないだろう。

少し伸びてきた前髪を軽くムースで後ろに流す。サガとロイヤル・オペラハウスに行くのは初めてじゃないだろうに、何をめかしこんでいるのか、苦笑が漏れる。歯を磨く、鏡を覗く。母に呼ばれる。最上段の棚の上にある食器を入れ替える。母が、ちょっとびっくりしたように俺を見る。

「あら、随分ハンサムさんになってるじゃない？」

サンクス・マム。

緩めに締めておいたタイをしっかりと結び直す。ハンカチーフを持つ。腕時計をはめる。コートを羽織る。十一時一八分。やべ！　靴磨くの忘れた！　親父の靴を黙って拝借。いつの間にか足のサイズは同じになっていた。コートの胸を叩き、内ポケットの財布を確認。扉から半分身体を捻って、大きく声を上げる。

「行ってくるよ！」

サガと待ち合わせしたコヴェントガーデンへは、ロンドンブリッジからチューブで二回乗り換えて行く。

本当は、ロイヤル・オペラハウスならレスタースクエアやホーボーンからでも歩いても行ける距離だから二度もチューブを乗り換えなくてもいい。レスタースクエアならウォータールーでジュビリーラインからノーザンラインに、ホーボーンならノーザンラインからセントラルラインに乗り換えればいい。けれど行き先をまだサガが隠していることから、大人しく指定の駅までチューブで行くことにする。コヴェントガーデンは、ピカデリーラインでしか行けない。ピカデリーラインはブルーのラインで斜めにロンドンを渡る。そのうちの一端はヒースローに繋がっているから休日はわりと人が多い。

チューブ改札口にはそれぞれのラインの本日の運行状況が書き込まれた掲示板（ボード）が必ず表示されていて、それを見てロンドンっ子は利用するチューブを決めて移動する。今日はヴィクトリアが運行停止、ジュビリーラインが遅延との事。ホーボーン経由で行くことにする。腕時計をちらりと見ると少し時間が押している。この分だと約束の十二時はギリギリだ。慣れない首絞め（ネック・タイ）が息苦しい。チューブに乗り、真っ暗な窓の向こうを見ている間、何度か襟に指を当てる。窓に映る自分の姿が見慣れない。こんな顔をしてサガに会うなんて、どこか滑稽で面映かった。

十二時三分前、なんとかチューブはコヴェントガーデンに滑り込む。人混みをすり抜けリフトの先頭に陣取り扉が開かれるのを待つ。じりじりとする。腕時計をまた確認する。ラインプが点灯する。それでも扉はすぐには開かない。ようやく開いた扉にさっと切り込み、右脇に寄った。万杯に人間を詰

め込んだリフトがゆるゆると上昇する。そして、ようやっと地上に到着した。早足に改札へ向かう。改札を抜ければもう目の前に約束のジェームズ通りだ。ただ、もうそこらで大道芸が始まっているんだろう。あっちにもこっちにも人が居て、しかもその動きはとても鈍い。家族連れも多いから子供達の歓声も賑やかだ。

改札を抜けて、すぐ前の街灯の下で、といっていたが…。と、黒いすっと伸びた人影が眼に飛び込んだ。真っ直ぐに街頭の下で構内を見遣って起立する銀の頭。人の行き交うその場所で、どうしてサガの姿をこんなにもはっきりと確認してしまうのか、頭が痛い。大体において、サガが俺を見つけるより、俺があいつを見つける方が早いんだ。と、思っていたらサガは全然俺の事に気付かない。おいおい…。もう十分視野に入っているだろうが…。一歩二歩と足は進む。

「おい…」

結局、俺はサガの目の前まで歩いて来てそう言った。結構傷つくぞ。いくら人波が在ったからといってここまで気付かないでいるか？　普通！　すると、サガは更に身体中の関節から力が抜けるような事を言ってのけた。

「…ああ、びっくりした…　そんなきちんとした格好見たこと無いから…」

…。見たこと無いからどうだって言うんだ？　これでもこっちは全くの領分外にある服装を整えるのにそれなりに労力を払っているんだ。スリークオーター・レングスの漆黒ダブル・チェスターをさらっと羽織り、三つ揃えのスーツ、五つボタンのベスト、ボウ・タイをセミフォーマル・ノットに仕立てくる十五歳の人間の感覚を標準だと思ってくれちゃ困る。

けれど同時に、俺の頭の中で別の考えが冷たく響く。イートンの制服を、こいつはさらりと日常として着こなす事の出来る人間なんだと、今更ながらに思い知る。仕方が無いので、俺は溜息を口笛で隠してサガを賛賛した。

「やっぱそういうの似合うな、お前」と。

サガは礼儀正しく俺にも賛辞を呈する。

「君もよく似合っているよ。失礼だけど、本当に見違えた。…たまには他の人にも披露すればいいのに」

いとも容易く微笑み付きで語られる言葉に、俺は視線だけ空に上げた。他の奴らとこんな格好して何処かに行く努力なんぞ、この俺が払うだろうか？　答えは限りなくゼロに近く、俺は肩をすくめるしかなかった。

「首がきつくて敵わない」

他にどんな言葉が返せるだろう。でも、サガは声を立てて無邪気に笑った。

「そんなこと言ったって、君だって大人になって働き始めれば、毎日タイを締めて出勤しなければならないんだよ？」と。

大人になったら、ね…。とてもそんなに無邪気に未来の事は考えられない。成人し、自分で自分を養えるようになる頃、俺はこいつとどんな友人でいるだろう…。電話を？　手紙を？

待ち合わせを？

どれもこれも実感がわかない。きっと、ずっとずっと後になって、卒業後何十年もして同窓会でばったり再会し、今まであった色んな事をまるで平気に話せるんだ。そして、サガには新しい家族が居て…俺は？　俺にも『妻』という存在が出来ているだろうか…？　全てが、一切が、乾燥しきってまるっきり体から引き離された本の中の出来事のようになるんだろうか？　今、この瞬間が…。昨日の一瞬の息を呑んだ出来事が。全てが、全部が、何もかもが…。

想像も付かない。けれど、数年前の自分の幼さを笑うように、今日だって明日だってきっと、とても遠い他人事のようになるのだ。

ペースの掴めない頭で、濁る思考を奮い立たせて俺は言葉を返す。

「出勤に使うのは、今やってる首絞め（ネック・タイ）じゃなく、首巻（ネック・ウェア）だろ？　首に飾られてる事に意義があるんで、ボタンで止めてたってバレなきゃ平気さ」

「…そんな物が有るのか？！」

目を見開いてサガが俺を見た。普段の落ち着いた表情も好きだけれど、こんな風に何の警戒心もなく素のままの感情を表してくれると、狭量な俺の願いが、平素の穏やかなサガへの好意を塗りつぶすようにして胸の裏に寄り添ってくる。

こんな表情を他の誰にも見せたくないなんてバカな考えを起こさせる。

それは一人でも多くの人間と友好を築きたいと願うサガの希望の反対を行くもので、全くナンセンスな思考だ。けれど、最近引っこ抜くのに骨が折れる。もし、自分で上手く処理出来なくなったら、俺に出来る行動は二つに一つだ。

サガに関して一切の手を引くか、陳腐にして非生産的な望みを持つ事が少しは甘く見て貰える領域に自分達を引きずり上げるか…。そこまで考えて、カチリと思考が止まる。

引きずり上げる、つまり相手を、恋愛の対象にする事。そういう事は、今までの俺とサガの関係では普通の友人同士の場合よりさらにデリケートな問題を含む。いや、男同士だって事も十分障壁ではあるんだが…それよりも、サガが俺に対して持つ過剰な恩義がそういった事を脇に押しやって考慮してしまいそうで、それが怖い。

整理すると、まずは男として男に恋愛感情の告白をどうするか。次に、告白する相手が自分に無二の信頼を寄せている状況、加えて、相手はそういった同性よりの好意に困窮を味わっている。何度考えても頭が痛い。どう考えても俺の置かれている状況は不利だ…。

まぁ、俺が、自分の勝手な感情を上手く処理出来れば何も問題は無いんだが…。唯、困ったことに、俺はそういう消極的な態度が好きじゃない…。

すっかり気乗りしなくなったサガとの会話に、俺はなんとか枝葉を接ぐ。

「少なくとも、Tシャツにネクタイプリントしてジャケット着てるってのは、アメリカにはあったな」

サガは唖然としていた。サガは何処までも俺の前じゃ無防備だ。

俺は歩き出して会話のカードを別のものに変えた。自分にだけは無防備で居て欲しい。でも、無防備で居られるのは自分の堅忍不抜を試されるようで時々口もききたくなくなる。その自分の変動の幅が、あまりにも身勝手で目も当てられない。

「まあ、いいや。で？　どこに連れてってくれる訳？」

サガの目を見ていられなくて、すたすたと歩く。一瞬の間を置いて小走りに駆けてサガが俺の横に並ぶ。当たり前のように自分の横に並んでくれるサガは、時折どうしようもなく自分に幸福感を与え、手を伸ばしたくなる。もっと近くに引き寄せたいと。

「察しのいい君の事だから、この駅で待ち合わせた時点で既に予測がついていると思うけれど」

サガがコートのポケットから薄く細長い封書を取り出した。歩きながら目の端に捕らえる。俺の早足に合わせてサガも歩く。奴ひとりなら、もっと優雅な速度で歩くし、俺も余程の事がない限り、いつもはサガの歩調に合わせて歩く。明らかに今の俺の歩調は、いつもの二人でいる時の速度じゃない。それでもサガは何も聞かない。そして言葉を続ける。

「ロイヤル・オペラハウスのローエングリンだよ。…それなりに一生懸命考えたのだけれど、このくらいしか思い浮かばなかった…君の誕生日のお祝いに…受け取ってもらえるかな？」

差し出された封筒を受け取り中を確認する。やはりローエングリンのチケットだ。目を右端に動かし席を確認する。そして、その下に印刷された金額も同時に目に入った。

一六〇ポンドだって！？

思わず目を見開いて立ち止まってしまった。一六〇ポンド…！　被就労者同士で贈り合うプレゼントとしては、少々…いや、かなり値が張りすぎているんじゃないか？　これは！

呆然とする自分をこの時ばかりは俺も許した。一六〇ポンドもの贈り物を与え合う社会に、サガは居たのかもしれない。けれど、非資産階級にとっちゃ、非常識だ。贈られたって俺は同等のものなんて返せやしない。いや、サガは見返りなんて求めちゃいないだろう。でも…。俺の頭は混乱した。

サガがこの金額のプレゼントのやり取りになんの疑問も抱いていない場合、良識ある人間は受け取るかもしれないが、非常に戸惑うだろう。妬みや嫉みを受ける場合だってある。それ以上に厄介なのは、サガを『財布』と思う連中が必ず出て来るという事だ。そういう、サガの持つ世間知らずを自分としては随分勧告してきたと思うんだが…全く解って貰ってなかったのか？

贈り物は、相手の経済状況を見てやるもんだ…。もっともそれにすら作用されない親密な間柄、というものも世の中には存在し得るが…。俺がサガにとってその範疇に入っているということなのか？　それともサガは、この金額に遜色ない程俺に恩義を感じているのか…。立ち尽くしている俺の顔を、心配を薄く刷いた顔色のサガが覗き込んでいる。

溜息が零れた。

ここで俺がチケットの金額を云々したって、購入されてしまったもの仕方がない。変に遠慮や意地を張ったって二人とも全く面白くない。

今日は、今は、感謝の言葉をサガに言おう。そして、ほとぼりが冷めた頃、もう二度とこういう高価な贈り物は勘弁して欲しい旨、そう伝えよう。今、サガの好意(これは欠片も疑っちゃいない)を傷付けても、始まらない…。

ようよう、なんとか笑顔でサガを見ると俺は言った。

「……ありがとう…。滅多にない機会だから有難く鑑賞させて貰うよ。」と。

けれど、サガの緑の瞳からは影が消えなかった。

ああ…なんだ。少しは非常識だって自覚はあったんだな…。

俺はチシャ猫のように笑って見せ、サガの細くて柔らかな銀色の髪をかき混ぜた。そして、勢いよくオペラハウスに向かって歩き出した。そして、なんでもなかったようにサガに話しかける。

「ローエングリンか…俺、ちゃんと観るの初めてなんだよな…。お前は観た事有る?」

俺は極力普段どおりに喋っているつもりなのに、サガの返答には穏やかながら人が人と対話する際になんとか相手に分かって欲しいと要求する必死さが込められていた。サガは言った。

「私もないよ。以前、バイロイトの映像を一度観ただけ。流石にワーグナーのオペラでこの席をおさえるのは私も金銭的に厳しいから…でも、ローエングリンは去年の定期演奏会の演目だったし、どうしても君と観たかったんだ。それで、この先一年演奏会はおあずけという約束で、父に貯金取り崩しの許可を貰った。私が観たくて誘ったのだから、遠慮なく楽しんでもらえたら嬉しいな。」

何しろ、こんないい席、父と一緒の時だってとれた事がないからね、と。

そういって柔らかに笑った。

俺はもう一度止まりそうになった足を何とか動かした。右足、左足、右足…と。

貯金の取り崩しだって?

自分のスポンサーである父親ともこんな席に座った事がないと言う。むしろ、苦もなくこんなチケットが手に入ると言ってもらえた方が気が楽だ!

どうしても自分と観たかったとサガは言った。どうしても、とはワーグナーにかかるのか自分にかかるのか? 知らず溜息が零れた。ストップ、ストップ! ストップ!

アホな妄想は止めて紳士的に楽しむんだ。アイオロス・ヴィンセント・エインズワース! …ホント、最近サガと居るのはシンドイ…。

息をしっかり吸いなおし、観念して今度こそ本当にサガに笑いかけた。背骨と腹筋に力を入れて、背筋を伸ばせ! CFFでの教官の号令を思い起こし、くっ、と体に新しい力を

入れた。そして。

「了解」

そう言って、いつものようにサガの背中を軽く叩いてオペラハウスに向かった。

大分草臥れてきた内装を尻目に、クロークにコートを預けて席に向かう。到着してみれば、めかしこまされた子供とめかし込んだ母親と、泰然と構えた父親といった家族が多い。後はカップルか？　いや、品の良い老夫婦といったペアもかなりいる。それでも、こんな良い席にティーンエイジャーの男が二人…なんて、ないなぁ…。僅かに居心地悪さを感じながら着席すると、サガは周りなどお構いなしに本日のパンフレットを読み耽っていた。何処に行っても、こいつは自分のペースを崩さない。見ているうちに周囲を見渡していた自分がバカに思えて、暇潰しにサガを見る。

長い睫毛は色素が極端に薄いため烟るようにして伸びている。鼻は筋が通っていて真っ直ぐだ。イギリス人の鼻は細くて曲がりやすいからこの鼻は貴重だ。唇は薄い。色は淡いピンク。あまり血色の良くない頬は、滅多に染まることもない。ただ、最近、妙に俺に対抗意識を燃やしているらしく、悔しかったりすると時々耳朶からごく薄く染まる事がある。成る程。あまりまじまじとこいつの顔を見るなんてしたことなかったが、確かに酷く整っていて北欧の面影がある。母方の血筋に北欧系が入っていると、いつか言っていたから、そのせいだろう。肘掛に右肘をついて尚も観察を続けているとサガがふっとこっちを見た。

「何？　…始まるよ？」

サガが不思議そうに、少し首を傾げて俺を見る。

「あ、悪い。暇だから見てた」

そう言ってから俺は顔を舞台に戻した。数瞬と置かず、明かりが徐々に落ち始めた。ホールのあちこちから咳払いの音が響く。やがて、客席側の全ての明かりが落とされ、舞台に架かる緞帳をだけがぼうっと浮かび上がる。オーケストラピットから調音の波が寄せ始めた。

楽劇「ローエングリン」とは、一二八三～八八年にアントルヴェン（ウェルベ）現在のベルギーを舞台として成立した作者不詳の伝承で、リヒャルト・ワーグナーによってオペラとして再生され、現在も盛んに上演されている。あらすじは至って簡単で、こんな感じだ。

まず、ヒロインは公女エルザ。先代のブラバント侯爵の死後、公女エルザと散歩に出た弟のゴットフリートが森の中で行方不明になる。ゴットフリートは魔女オルトルートに白鳥に変えられる。魔女オルトルートの夫でブラバントの領主を狙う伯爵テルラムントはエルザを弟殺しの罪で訴える。伯爵テルラムントは、エルザが領主となり，秘密の恋人を宮廷に上げようと企んでいると言いふらす。

丁度ハンガリー軍を迎え討つ軍団を徴兵するためブラバン

トを訪れていたハインリヒ王はこの調停をすることになる。エルザはなんの申し開きもせず，彼女の名誉のために戦ってくれる騎士を待っている。そんなエルザのもとに、白鳥と共に一人の騎士が現れる。騎士は決して自分の名前、素性を尋ねないとエルザに誓わせた上で，彼女の夫となる。

伯爵テルムラントは追放の身となる。けれど、テルラムントの妻で，かつてブラバントを支配していた一族の末裔魔女オルトルートはエルザの夫となった名無しのブラバント公への不安を掻き立てる。エルザは来た時と同じく突然に自分の元を去ってしまうのではないかという不安に禁を破り、名無しの騎士の素性を尋ねる。騎士は自分が聖杯王パルシファルの息子ローエングリンであることを明かし、白鳥を弟に戻し、去って行く。後に残されたヒロイン、エルザは悲しみのあまりその場で絶命する。

とまぁ、こんな話だ。

去年の定演で、この楽劇の前奏曲をやった。

バイオリンの、微かでどこか悲しい旋律から入るこの曲は、霧が晴れるようにして次々と現れる楽器が重なり合い、それでも何処までも繊細で、綺麗な曲だ。

ワーグナーの仰々しさは好きじゃないが、弾いていると意識が曲に持っていかれる。気違いドイツ人の残した曲は、演奏回数に比例して、やはり偉大だと実感した。滔々と流れる音に、いつの間にか荘厳な気配を感じたし、クライマックスの管とパーカッションの響きは、そこにワーグナーが現在に向けて神話の扉を開かせる確固とした意思と恍惚を髣髴とさせた。終りは、再びバイオリンだけの霧のような音が寄り合わされて消えていく。少し、サガに似ていると、そういえば思ったっけ。

いつしか、薄暗い闇と静寂の隙から、聞きなれた音楽が流れ出していた。危な気なく構築された高音域のピアニーシモ。そこにやがて管の響きが重なり、低弦も交わる。何度も主題が繰り返され、クライマックスが始まる。パーカッションの参加からオケのテンションは上り詰め、トランペットの響きが霧を切り裂き管の連中の滔々とした主張が始まる。ここはベースもかなり気持ち良く弾いてるはずなんだが…やっぱり管の音にかき消されるか…。それでも、本職は、やっぱりまいよなー。ああ、畜生。

登場人物が次々と舞台に現れ物語が進行されていく。そして、本日エルザ役のジェシー・ノーマンが登場。

鳥肌が立った。生で彼女の声を聞くのは、これが始めてだ。レコードで聴くより遥かに存在感を持って彼女の声が皮膚に突き刺さる。キンキンとした、音域の限界や自己陶酔の極地を目指すソプラノが跋扈する中で、彼女の声は、いつも一番に今歌える事の幸せを噛締めているようで好きだ。声も、地に足が着いていて揺るがず、堂々としている。

凄い。分かっちゃいたけど、記録された音を聞くのとライブで聴くことから来る興奮の違いが、腹の底から競り上がる。

気が付いたら、食い入るように目を見開いて、前傾姿勢で舞台を見つめていた。ローエングリンが出て来るまでは。

ドミンゴも、悪くはない。悪くはないんだが…誰だよ…ローエングリンでジェシーと組ませようなんて企画したのは…。うーん…エルザの方が迫力勝ちして見えるのは気のせいか？

白鳥の騎士がデュエットの中エルザを引き寄せたが…なんとも言えない嘆息を俺は噛み砕いた。腕組みした肘に、膝に置いていたパンフレットが触る。帰ってから見ようと思ったので、これには目を通していない。ドイツ語の歌詞は全く理解出来ていない状態ではあったけれど、視覚を通して飛び込む情報は想像以上に豊かだった。

おそらく、レコードや何かなら絶対に最後まで聞けなかったに違いないオペラ『ローエングリン』全曲を、俺は踏破した。我ながら快挙といっていいだろう。手の込んだ衣装、計算された演技、安定した音楽、オペラというものは目で見るものなのだと、今更ながら痛感する。オペラ座に向かう間中、サガからチケットを渡されてからというものずっと頭の隅で蠢いていた幽かな不満がいつの間にか綺麗さっぱり昇華していた。そしてそこに、掛け値なしの感謝が広がる。ありがとう、と思える。素晴らしい誕生日の贈り物だと胸に沁みる。サガが渡したかったのは、高額な鑑賞券ではなく、この豊かな感動だ。それが分かっていなかった、と自らの度量の狭さを承知する。

しばしば、こういう事が起こる。

俺は、年よりずっと物事を飲み込んでいる人間だと思って生きてきた。それは、アメリカで暮らした経験や、父の元を訪れる様々な人生の重みを背負った人から学んで来た事だ。そこに、自分自身への過大評価はないと、実際その通りだと、そう判断している。その上で、同年の者にも自分を合わせていける柔軟性もあると自らの人品を定めている。それが、サガという人間を知ってから、時々足元を掬われる。自分の世界の狭さを提示される。それは、サガが俺を上回る知識や経験でもって俺に勝るのではなく、彼の純然とした俺自身に寄せる好意と信頼の結果が、俺の矜持に勝るんだ。

サガは、呆れるほど世間の事に疎かった。今も十三年間奴を育ててきた環境からくる小さなズレは、時々周囲や俺自身との感情の齟齬を生じさせる。それでも、サガの善意と素直な思考はそれを補って余る清冽さがある。そこが凄い。イギリスの貴族教育も捨てたもんじゃない、とそう思う。多分、サガは俺や周囲の人間には見せない特権階級独自の汚濁の世界もそれなりに知っている筈だ。さりとて、そこには呑まれない。呑まれない事が、おそらく成り上がりと脈々と歴史を保持してきた人間の違いだろう。

敵わない。

そういう土俵で俺はサガに敵わない。

そして、敵わない事がいっそ清爽として心地いい。

二度の休憩時間、俺はサガを誘ってラウンジに出た。サガは紅茶を、俺は珈琲を片手に人混みに立つ。雑多な言葉の渋

滞の中、俺たちは今し方見たばかりの楽劇の話をした。オケの演奏、照明の具合、役者の立ち居振る舞い…。それこそ取りとめも無く、気の向くまま、思いがけず耳に入った単語のままに。それはとても穏やかな時間で、外から入る薄く柔らかな陽射しと似合っていた。俺がサガに感じる性急な感情なんか気のせいだと錯覚出来るぐらいに、静かで明るい温度が互いの間にあるだけだった。

盛大な拍手とブラボーの歓声の中、ワーグナーのローエングリンは終了した。徐々に明るくなる客席の中央に座す俺達は、帰りを急ぐ予定も無いのでゆっくりと立ち上がり出口を眺める。まぁ、ぼちぼち出るさ、と俺が暢気に構えていると、ふとサガが俺を見上げて言った。

「アイオロス、この後何か予定ある？」

予定も何も、この後はどっかで適当に腹ごしらえするつもりだ。だから家の夕食は朝のうちに断ってある。そう言ってやろうとしたんだが、すっとこの席の列が動き出したのでパンフレットを片手に丸めて歩き出した。普段の歩幅の三分の一程度の歩みでじりじりとホールの外に出る。エントランスも相変わらず人の頭、頭、頭だが、なんとなしに呼吸が楽になる。サガを振り返って先ほど中断した『この後』の事を口にしようとした矢先、サガの方が先に口を開いた。

「食事、していかないか？　劇場のオープンエアのレストランに予約を入れてあるんだ…」

本日、何度目だ？　こいつの事をこんな風に凝視するのって…。一回、いや、二回瞬きをして呟いた。レストランだって…？　と。

「え…？　そうだけれど、何か…？」

今度は、サガの方が俺をじっと見る番だった。不思議そうな顔をしている。言外に、自分は何かおかしな事をしているかと問うている。そういう表情だ。

サガ・エセルバート・チェトウィンド卿…、お前さんの行動は奇天烈じゃない。ただちょっと、高級なだけだ…。

俺は、額を叩いてため息を封じ込めて言った。

「……いや…十八、十五のお子様が連れ立って予約席付きのレストランか…って思っただけだ。…普通、外の『チップス！』とか、ここなら露店やカフェ、適当な店なら山ほどあるだろう…」

思わず俺はコヴェントガーデンの方向を指差し言った。

そして、口の中で呟いた。少なくとも俺は予約を入れたレストランにお前を連れて入った事はないな、と。

比べるような事じゃないと頭で分かっていても、どうにも納得がいかない。俺は、はっきり言って、人を連れ回すのは好きだが、連れ回されるのは嫌いだ。手取り足取り引率されるぐらいだったら一人で遭難する方がいい。いや、本当に遭難したら社会の迷惑だが、それぐらいには一個性の質として出来れば我慢したくない状態だ。

多分、顰め面をしていたのだと思う。サガが慎重に言葉を重ねてきた。

「実は年齢を三歳ほど誤魔化したんだ。Fox だったしね」

俺は、深く息を吸い込み、吐いた。弱ったな…という言葉が胸に沸く。自分に主導権の無い状態はすこぶる居心地が悪い。けれど、それ以上に、この銀髪の友人にほんの少しの落胆も味合わせたくないんだ。天井を見上げて、手回しのいいこった、と嘯く以外に、俺にどんな行動が取れるだろう…。

取り敢えず、コートを預けてあるクロークまでは俺が先に歩いた。一人、二人…、すれ違う距離にすれすれはあっても肩をぶつける事はなかった。人混みの中、一回たりとも人に当たらずに歩けるかどうか、ゲームのようでいつもそのぎりぎりを楽しむ。不思議な事に、気がそぞろになっていたり、体調が悪かったりすると必ずこういった賭けは失敗するので、自分の体調を測るゲージにもなって楽しんで実行している。人より先も歩けるし、俺にとっては一石二鳥だ。

そして、本日の成果。

誰にもぶつからなかった。後ろについて歩くサガも、体を捻って追行するようなガイドはしなかったはずだ。完璧だ。完璧なのに…コートを受け取ったその後は、俺は銀色の髪の毛を揺らすピンとした背中を見て歩かなきゃならなかった。ガイドに気付かれないようこっそりと嘆息する。調子が狂うことのこの上ない。なんだか目の前を歩く人間が、馴染みの無い人間に思えて、そして一つ気が付いた。

俺が、サガの背中を見て歩くのは、多分、初めてだ…。いっそ、その事実に俺は呻然とした。

店の受付でサガは名前を名乗り、予約を確認し、ボーイが今度は我々を案内して進む。その後をサガがゆったりと進み、俺はそんなサガをまじまじと見て歩く。俺の方の椅子が先に引かれ、俺が着席する。そして、サガが着席。着席してから気付く。これって、差し向かいで食事するって事なんだよなぁ…、と。

本当に、ガラにも無く、頭の中でシミュレーションをしてしまった。テーブルマナーは、それなりに母親に叩き込まれているつもりだが、敢えて常に実践して来たわけでもない。

程なく、畏まったボーイがグラスとボトルを運んで来た。いよいよ開始だ！　と意気込んだ所で、目の前に注がれた無色透明の液体に目が吸い付いた。

無色透明かつ、無臭と思える…俺の、気のせいか？　気のせいだよな？　ここまでやっといて、まさか、この上『無』味まで加わりはしないよな？　半ば祈るような気持ちでグラスを干して、あまりの情けなさに泣きたくなった…。

これは、間違う事なき、ミネラルウォーターだ…。

首に力が入らなくて、俯きながら呻いた。虚しくないか？と。それに対して、サガは酷く模範的な回答を寄越した。『虚しいと、知っている事が問題だ』と。ふざけるな！　禁止されているプランデーを部屋に隠し持っているような奴が吐いていいセリフじゃないぜ！　そう思うが、腹に力が入らなく

て言い返せなかった。水に罪は無いんだが…。

まあ、俺があんまり落胆しているのを察してか、サガは直ぐに話題を別の話に振り替えた。

「で、どうだった？　ドミンゴのローエングリンは。」

その弾むような調子で、サガが如何にこの楽劇を楽しんだか知れた。休憩時間にも、お互い気の置けない感想を述べ合っていたから、多分その延長の話がしたいんだろう。けれど、俺には、その意思がなかった。サガに小過はないけれど、俺は昼からずっとこいつにふりまわされつぱなしで右往左往しているんだ。そんなに意に副ってばかりじゃいられない。それで、ゆっくりと、明瞭に、俺は一つサガに問いかけた。

「イタリア人のローエングリンってのは、イギリス人のロミオと比べてどっちが許されると思う？」

「…え？」

恐らく面食らうだろうな、と思った通り、サガは俺の意図を掴み兼ねて次の言葉を待っていた。

「もしローエングリンがイタリア人だったら、あそこで別れるなんて真似は絶対にしないだろう。っていうか、聞かれなくったってあったことでもなかったことでも自分の事をベラベラ喋って、エルザに呆れられて、離縁状叩き付けられて、跪いて許しを願い出てるってパターンだろ？　あれって実は最高のコメディの可能性をねじ伏せて悲劇に仕立ててないか？」

俺の意図した通り、この見解はサガに受けていた。一応、サガの進みたい道には行かないから、笑いぐらい提供しなきゃな。サガは、咄嗟と言うには十分優雅な動作ではあったけれど、スープを入れた口に軽く指を当てた。うん。ここまでは計算通りだ。

「…いや、確かにワーグナーにはちょっと軽い声かなとは思ったけれど…そうだな、イタリア人にはない精神性かも知れない…何しろ、中世騎士道の手本みたいな楽劇だからね。ドイツ人テナーと聞き比べてみたら、気になるかもしれない」

変化球に対して、それ以上の奇球をもって答えるのではなく、あくまでもサガはルールに則りクラシカルな答えを出して来た。曰く、自分はワーグナーだからドイツ人でなくてはならない、ということはないと思う。エルガーはイギリスのオーケストラでなくてはならない、とか、ウィンナワルツはウィーン・フィルでなければ云々、というお約束は、マニアの間ではよく交わされる会話だが、自分は音楽の可能性というものはそれほど狭いものではない、と思う。勿論、もっともワーグナーらしいワーグナーはやはりドイツのオーケストラの十八番であろうし、どんなに下手なイギリスのオーケストラでも威風堂々だけはエルガーらしく演奏する、という地域色はあるだろうけれども。と。

非常に素直で公平な意見だと感心していると、思っても見なかった言葉が続いて飛び出した。一瞬、本当に、わが耳を疑う。

「確かにイギリス人のロミオでは情熱的に口説けないかも知れないけれど、私がジュリエットだったらラテン系のロミオの

口説きには落ちないよ。世の中、多種多様のロミオがいていいんじゃないかな？　ローエングリンも然り」

もう一度、今聞こえた内容を頭の中で巻き戻し、再生する。泡を食らうといった状況なので、思わず目の前の発言者に確認してしまった。だって、こいつは、通常はよっぽどこういう誤解されそうな比喩とか方向性には完璧に自衛を期す人間の筈だからだ。

「お前がジュリエットだったら？！」

俺以外の奴がこの場にいたら、とつい焦るような心境に立っての発言だ。芸の無さは勘弁して貰おう。それに、この不用意が、この場限りでなく今後への階であるのかないのか、それは見極めておく必要がある。

「ラテンの情熱にも融かされず、アングロサクソンの理性にもほだされず、そうするとジュリエット＝サガはどんな人種の口説きになら落ちるんだ？」

頼むから、冷静に、自分で今の発言の危険性に気付いてくれ。俺はわざわざ辛抱しみた体で更にサガに質問を重ねた。

「お前のジュリエットって全然誰にも靡かずに、結局修道院にでも行きそうだ。お前って、なんかそんな事よりも好きな音楽とか『学問』とかやってる方が幸せだろ？」

請い願わくは、ここで、あっさりと、『そうだね』とかなんとか、そう肯定する事でこの話題に潜む危険性を否定してくれ。

俺は、ここで模範解答を一つ提示してやったつもりだった。全く、この手のかかりっぷりは、楽しくて仕方がないぞ。楽し過ぎて、気を付けていないと笑顔が引き攣りそうだ。

しかし、それなのに、あろう事かじゃじゃ馬の返事は、一瞬俺の視界を黒く塞ぐに十分なボケぶりで…。

「いや、そんなことはないけれど…いい人がいれば考えるよ？」

……。

ダメだ…。今は何を言っても無駄だ…。気付きゃしない…この天然ボケは…。

そういう事をさらりと言って、じゃあ、自分がそのいい人になると、立候補する勘違い野郎の存在を、俺は六人は知っている…。

仕方なく、にっこりと笑いながら二言いってこの話にケリを着けた。これは、また、時間を改めて注意しとこう…。

問答無用ですっぱり打ち切った話題に、サガは不満気だ。多分、自分だって普通の人間だ、とかなんとかぐずぐず思っているんだろう。自分だって、誰かを好きになったりするんだと、そう言いたかったのかもしれない。その権利を、取り上げるつもりは無いけれど…出来ればその主張は、俺の前では止めて欲しい…。六つの存在の内の一つは、多分、物凄く不本意な事に、今お前の目の前にいる人間なんだ…。

ああ、不毛過ぎる…。頭痛いぜコンチクショウ。

頭の痛さを引きずったまま、新しい話題を提供しなくては、と思う。それで、なんとなく、ぽつんと言った。サガはローエングリンを気に入っているようだから、少し意を異にした話題で済まなく思うが、議論出来る分、気が紛れるだろう。

「ローエングリンってあんまり共感出来ないんだよな…。自分が惚れた相手と親父の掟と量りにかけて、掟の方を選ぶもんか？　結婚しといてあっさりさよならってどうも『アホか？』って思うんだよなぁ…」と。

サガは、ほんの少し目を見開いた。そして、何かに納得したような表情をみせ、次に柔らかな気配に言葉を包んで差し出してきた。

「言葉と同時進行で、芝居ほど話が進まないから、どうしても物語はご都合主義になってしまう向きはあるよ。それでも、ワーグナーは結構物語の主題にも気を配った人物なのだけれどね」

サガは、一つ息を入れ視線を落とした。そして、ゆっくりと言葉を続けた。

「…でも、ローエングリンはこう言っている…『聖杯に背いてここに留まっても、私に与えられた力は全て奪われてしまう』と。ブラバンド公国の王として迎えられた自分が弱くなる事は許されない、とも取れるし、自分自身に与えられた聖杯の力を無くしたくない、とも取れる。…もっと穿った見方をすれば、もはや聖杯の恩寵を失った自分を、エルザが見限ることを恐れたのかも知れない。私は勿論君のような考え方の方が好きだけれど、そこで躊躇してしまう気持ちも分かるような気がするよ。…当たり前のように持っていたものをなくしても、人は変わらずにその相手を愛し続けることが出来るだろうか？」

それは、非常に真摯な問い掛けだった。今、ふと思いついたという問いかけではなく、きっとそれなりに何度も問い続けた疑問なのだと、そう取れた。

『人は変わらずに相手を愛し続けることが出来るだろうか』と疑問を口にするサガは、回答の出ない公式に疲れて途方にくれている生真面目な学生といった感じで、それはとても好感の持てる態度だった。俺の口角は引き上がり、目はサガだけに焦点が結ばれた。

俺はその答えをもう見つけた。

そう言いたい思いが胸に膨れ上がる。

実の所、うちの父親は再婚している。初めての結婚は一年もたなかったと聞いている。俺や弟のリアの母は父の二度目の結婚相手だ。その事を俺が知ったのは、こっちに帰ることになった直前の事で、両親の口論を偶然聞いて知った。訴訟王国アメリカで見た父の仕事ぶりは、クライアントの話にとことん耳を傾け、一瞬の結論より時間をかけ話し合い、協調の道を互いに探っていくような、数字の面で言えばあまり金にならないような勤務態度だったので、そんな父が何故？と少なからぬ衝撃だった。しかも、父はそれを俺たち息子には隠していた。いや、隠すというのは違うかもしれない。その離婚した相手というのは俺の母ではないし、実際俺たちには何も関係がないのだ。それでも、知ってから、二ヶ月程は一人で考えていた。父は何故離婚したのか。何故彼らの関係は続かなかったのか。彼女に子供が居た場合も離婚したのだろうか。子供がいなければ離婚にはあまりリスクはないのだ

ろうか。でも、だったら恋人同士と結婚の違いはなんなのか。父の最初の妻であった女性は俺に何の関係もないが、父と俺の間には、関係がある。

二ヶ月して、リアも母も留守にしていた時、父に尋ねた。父は最初は本当にびっくりしていたが、結局五時間にも及ぶ議論の相手になってくれた。その時父から受けた答え、その全てに納得は出来なかったが、出来なかったことで、自分が何を求めているか分かったように思う。父はただ苦笑していたが、しかし、俺がその時最後に言った結論は、父が様々頼り訪れるクライアントに対して見せる『理想』を裏切る物ではなく、まさにそこが父の苦笑を誘ったのだろうけれど、俺には譲る事の出来ない『理想』だった。

アメリカでは、何人かシングルの親を持つ友人が居た。そして、ダブルの両親を持つ友人も居た。彼らが一律不仕合わせだったとは言わない。どうしょうもない父や母と縁が切れた事で道が開けた奴も居る。

千万の理由で互いに惚れ合い、生きていく。その過程や終わりに、食い千切られる憎しみや苦痛は、無い方がいい。自分の弱さを埋める為に他人に愛しているという言葉は使いたくない。

サガは、どう考えているだろう。

彼の主張が聞きたい。彼の、意志が聞きたい。

サガは、人を愛するという事を、どんなふうに考えているのか。

サガの、生の考えが知りたい。

俺は、挑発するように問いかけた。

「お前は、それが至難の事だと思う?」と。

サガは少し躊躇したようだったけど、すぐに俺の突き出した問題に取り掛かった。

「エルザは、聖杯の掟を知ってなお、ローエングリンを引き止めた。でも、そのままの言葉を信じて彼が公国に留まったとして、彼らは本当にその後幸せに暮らせただろうか? エルザは、夢の中に現れて、彼女の危機を救ってくれた強いローエングリンを愛したんじゃないのか? 夫がもはや強くないことをその目で目の当たりにした時、彼女はそれでも変わらぬ愛情を夫に対して抱き続けることが出来ただろうか…」

サガの言葉は切れ味が鈍かった。俺は、短く先を促した。一瞬、サガの唇が強く引き結ばれた。そして、次にそれが開かれた時、サガの口調は変わっていた。今まで落とされていた視線がしっかりと上がり、言葉には張りが戻った。ただ、その張りは、何か切実なものを押し殺さんとした独特の緊迫感があった。何かが、必死だった。

サガは言った。

「器量が良い、お金や地位がある、強い、という魅力も、本人そのものに起因する性格や価値観からくる魅力も、どちらもただそれが『在る』という事実によって人の感情が動かされる、という意味では変わらないよ。お金や地位がどうしても大事な人には、その他の全てが些事に見えるだろう…相手の性格

を愛した人が、その他のことに全く頓着しないように。そこに卑俗な愛か高尚な愛かといった区別を付けたがる人も居るけれど、私には大した違いがあるとは思えない。ただ、一生のうちの些細なことで相手を失いたくなければ、互いに相手のより失われにくい部分を愛することを祈るだけだ…人を好きになるという感情も、その感情がある時失われてしまうことも、己の意志ではどうにもならない事だから。」

その薄い必死さは、最後の数語の上では深く自分の内面を覗き込みさらに恥じるようなものになっていて、正直、俺は慌てた。そこまで、引きずり出すつもりはなかったんだ。話は、俺の想像以上に空気を重くした。

サガの、誰ともまだ接触していない、深い部分を知りたかった。そこにも俺を受け入れてくれる事実に自己満足したかった。

きっと、サガは、今俺に話したような事を誰にも話したことがないに違いない。一瞬の戸惑い。一瞬の決意。そんなものからそう推測を立てる。ちっぽけな優越感。それでも、そんなものでも、今の俺には価値がある。自分をいまいましく思いはじめる前に、俺は談論に集中した。

「お前の言っている事はこうだよな？　まず一番目」

親指を折って、言葉を続けた。

「聖杯の力を失ったローエングリンが、自分自身の価値観の再確認とエルザの自分への感情の再確認を強いられる事になっただろうと言う事」

一呼吸空けてもう一本、左手で右手の指を折った。

「二番目、人が人を愛し続ける場合、相手のより失われにくい部分を愛せた場合にその関係が長続きする可能性がより高くなるのではないか」

三本目の指を折る。

「三番目、人を好きになる感情も、それがある時消えてしまう事態が発生する事も、意志の範疇にない」

一呼吸置いて、俺は自分の小題の確認を取った。サガは短く「是」と答えたので俺も戦闘開始とばかりに腹に力を込めた。

「まず三番目からいこう。…意志の範疇に無い相手への好意は、likeであってloveじゃない。affectionでもない」

俺は言い切った。危険な断言だ。でも、こう断言しなければ、進まない。一つの答えには辿り着けない。

「人を永続的に愛して行けるかどうかは強い意志が必要だ。覚悟、信念と言い換えてもいい」

たまたま通りかかったボーイがジロジロと俺を見たが無視した。

「相手の何かが自分に好ましく写る。それが惹かれると言う事だ。そして、相手の好意を得たい、と願う事、そこにあるのは既に意志だ。自分の意志によって相手に自分を認めさせ、自分も相手を認め、その関係が長く続く事を希望する。全て、相互の意志だ。その意志と強い欲求が無い限り、好きという感情がふらふらしたって当然だ」

長い時間の中で、後悔や目移りや気が変わるなんて事ありえないなど、たった十数年生きただけの俺に言える訳がない。

でも、そういうことが起こり得るとみんなわかっているのなら、それを避ける努力をすべきだ。

するからこそ、成立する関係なんだ。きっと。

「一番目。相手のより失われにくい部分を愛せた場合…なんて弱気な事を考えるんなら、最初から止めとけ。結局この問題は相手の上辺を愛しているかどうかって事だからな。卑俗・高尚なんて考える事もナンセンスだ。自分にとって必然性のある上辺なら、どんな努力をしてもそのオプションを相手が取り零さないようにしてやればいいんだ。『金持ち』が大事な問題なら、すってしまった金を相手が取り戻せるように、自分が相手にもう一度付けてやればいいんだけだ。『容姿』に価値を持ったんなら、相手のそれが失われないように自分も努力すればいい訳だし、失われたら整形でもなんでもしてやればいい。それをせずに、相手のそれが失われたから愛が冷めましたってのは手抜きだ。出来合いの物が好きなんであって自分がその相手の魅力の保持に力を出すという手間暇を出し渋ってるんだ。『金持ち』『容姿』なんだっていいさ。そこに惚れたった、惚れられたっていうんなら死守すればいいだけだろ相手も自分も。だから、意志が必要だ。そこに執着されるのが辛いっていうんなら、それは最初から愛し合ってた訳じゃない。そこの確認も怠った、さらにお粗末で手抜ききな『こっこ』だ」

自由の国と歌われる巨大な大陸に残してきたん何人かの友人達の姿が目に浮かぶ。大人は『違った』と思えば別れることも、捨てることも自由だ。でも、そこから生まれた子供には、親を選び直す自由はない。愛し合うということが、なんの規制も制限も設けられないものであるなら、それは動物と一緒だ。

「最後の一番目。以上の俺の考え方から行くと、そこに必要なのは失われた聖杯の力をどうやって取り戻すかって事であって、別れるか別れないかの話じゃないだろ？　父親に返して貰うのか、ブラバンド公国でそれに代わる力を自分で得るのか、そりゃローエングリンの考え方次第だが、何にせよ行かないでくれと言われたんだ。そこにはエルザのまだローエングリンを愛し続けたいという意志があるんだろうから、もしエルザに愛して貰いたければ死ぬ気でなんとかすりゃいいし、それが出来ないんならエルザの事を愛してたって訳じゃなく、聖杯の力を持つ自分が自慢だったってだけだぜ？　あの男。却下だ。結婚なんか一生するな、相方に迷惑だって感じだな。あ！　だから親父はなんとかバカ息子を売りに出したかったのかもしれないぜ？　無理矢理あんな条件出して押し付けてきたのかもしれないな。全くいい迷惑だ」

俺は一息に言い切った。

言い切りすぎてしまった。

過激な発言だった、と思う。けれど、決して俺のかっこつけや夢想だけで言ってるわけでもない。

俺は、そうありたいんだ。

誰かを『愛する』なら、全力で愛したい。愛し続けたい。その愛情が不用意に消えることで周囲に無残な傷を残したく

ない。きっと、自分も傷つきたくない。

誰かを愛するなら、そういう愛し方に協力してくれる人間がいい。

最後は冗談に紛らせたつもりだが…うまくいかなかったな。椅子の座り心地が急に悪くなったような気がする。

けれど、これは、ｓｅｘの話を恥ずかしがって必要以上の罪の皮を被せ「人間」のふりをする為に目を逸らす「人間」の悪癖だと思う。「愛」も「ｓｅｘ」も「死」も常に「動物性」に近い場所にある。少しでも気を抜けば、それは「人間」としての尊厳を失う。そこを踏まえた上でのこの三大タブーに対する議論は、なかなか同学年の連中はもとより上級生とも、教授陣とも出来やしない。

サガは、どう受け止めたかと見ると、言葉なく俺を凝視していた。何か反撃を思索しているのかと暫らく待ってみたが何もない。かといって、俺の温度に呆れている訳でもない。どのくらい待っただろう。サガは、精一杯のコメントといった体でやっと一言呟いた。

俺らしい、と。

サガの言う『俺らしさ』が何なのか、知れなかったけれど、あまりにも飽和状態にあるサガにそれを問うたところで答えは返らないだろう。

俺は、言いたいことは全て言い尽くしていたので「そうか？」とだけ言い、笑って頭を食事を続ける事に切り替えた。

本当は、何に対してサガがあれ程に圧倒されていたのか知りたかったけれど…。気が向けば、サガが自分の気持ちの整理が出来たところで話しかけてくるだろう。もっともそれまで、俺がサガの友人であり続けられていれば、の話だが。

ゆっくりとした食事の後、チューブと国鉄の乗換えで分かれるはずだったチャリングクロスの駅で、サガが突然ロンドンブリッジまで送って行くと言い出した。

送っていくって…女じゃあるまいし、ましてまだ五時を少し回ったぐらいだ。サガの場合、言葉の選び加減が時々こちらの受け取り方と異なる場合があるから、今のもそういった違和感に過ぎないのかもしれないが…。俺は、少しオーバーに呆れた色を発言に乗せて伝えてみた。それじゃ、まるっきりデートみたいだぞ？　ってさ。さてサガはなんと返すのか？

俺といる時間を惜しんでの発言なら、嬉しいのだけれど。

落ちてきた切符を掴み、振り向きざまにサガを見ると、幽かに思案に余った様子のサガが立っていて笑ってしまった。きっと、特別な意味なんてないんだ。時間があるから送っていく。色々あるサガの礼節の中の一つの行動でしかない。少しだけ、サガが自分と離れがたく思ってくれているのかもしれないという自惚れが咽に支えて、耳の奥に沁みた。その痛みを静かにやり過ごすのが寂しくて、わざとサガをからかうような真似をした。

「世間に疎い割にはちゃんと女の喜びそうなとこは押さえている」

と、そう言った。少し厭味に聞こえるだろうか。言わなくてもいい一言が、最近多くないか？　俺。

ところが、サガの返答は俺の思惑に微塵も影響されず、酷く物堅く、澄んでいた。

「…そんなに特別なことをしているつもりはないけれど…普通、一日楽しく過ごして、帰りの電車まで時間があれば、もうしばらく一緒に話していたいと思わないかな？」

参った…。自分が、どんどん詰まらないヤローに思えてくる…。卑怯な事ばかりしているように思う。俺が、サガと離れがたいんだ。それを隠して、サガの反応の中から自分と同じ感情を探り回すのは、浅ましい。

くっそ！

もっと、きちんと、俺の望みと、目の前にあるサガの姿を区別できなきゃダメだ。でなきゃ、サガの、素直な、人間として素晴らしい資質を潰す事になりかねない。

サガの感情は、間違ってない…。一日楽しく過ごして、まだ時間があれば、もっと話していたいって、思うさ。全然可笑しな事じゃない。そういうふうに、自分の感情に素直に従うって言うのは大切だよ。ただ、俺がもう少し、密度の濃い感情を望んでいるだけで、サガがそんな俺の失望のしわ寄せを食らうのは不当だ。ごめんな。

俺は、だから、静かにサガに賛同した。

地下へ地下へと潜るエスカレーターで、ラインとラインを結ぶ地下道で、取り留めもなくオペラの話やふと思いついた事柄を口に上らせ時間をやり過ごす。さっきの反省もあって、俺はなるだけサガの楽しめそうな話題を振り、サガからの話も楽しく聞いた。サガの柔らかい表情が、俺の選択を支えたけれど、手も足も出ないとはこの事か。灰色のジュビリーラインに乗り込んだ頃は人も疎らで、車内もガランとし、俺の話題も尽きかけていた。

本心を隠しての当たり障りない会話は、集中力に欠け自分の首をどんどん絞める。座席と扉の端にサガを寄せて、俺は頭上に走る手摺りに腕を預け、乗り降りの客からサガの体を遮断した。座席は空いているが、二つ目がロンドンブリッジだ。わざわざ座る必要もないだろう。

さて次は何を話そうか、と思っていると、静かに座席側を隔てるプラスチックボードに肩を寄せていたサガの視線が、俺の肩を越して走った。何か興味惹かれるものがあったらしい。サガの注意が逸れているのをいい事に、俺は少し息を付く。

ぼんやりサガの柔らかな銀色のウェーブを眺めた。そんなに長い時間じゃなかったと思う。まだサザークに着く前、サガに声を掛けられ我に返る。が、声を掛けられたと分かはしたものの、何と言ってるのかが聞こえなかった。

サガは発声をいつも落としている。その気になればよく通らせもするが、普段は少しハスキーでこんなチューブの中で

の会話には向かない。
　ちょっと体を屈めてみたけれど、やっぱり途切れ途切れで、聞こえない、と言ったら今度はサガの方が俺の声が聞こえなかったらしい。首を伸ばして来た。
　正直、かなり、ぞっと来た。
　ボウタイで締めてる襟口から、サガの白い首筋がすっと伸びて、首筋がはっきりと浮き出ていた。そして、筋の裏は窪み、その影は襟の奥に続いていた。
　視線が離せない。
　気付かれない様に瞳を伏せて、顔を寄せた。耳元に口を近づける。
　囁いた。
「何？」と。
　サガの皮膚から、ほんの一インチのところに俺の皮膚は在った。その皮膚に、サガの体温が伝わるような気がした。ふわっと暖かく、そのままサガの肩口に顔を埋めてしまいたくなった。でも、お笑いな事に、サガは一向お構いなしで何処から思い付いたのかミロ・フェアファックスの話題を振ってきた。
「昨日、コントラバスパートがシオンやドウコに呼ばれていただろう？　随分深刻な顔をしていたけど、何だったんだ？」
　仕事熱心なパートリーダーだよ、全く。俺は意地になって、さっきと同じく口をサガの耳に寄せて答えた。幾筋かの銀髪が鼻先に触れた。
「ああ、あれ？ミロの蓑虫禁止令が発布された」
　サガの反応は、今度も無し。男同士なら、そんなにひっつくなとかなんとか、そんな反応が返ってきてもいいと思うんだが？　何だか馬鹿らしくなって背筋を伸ばした。まだなんとか手摺りに頭を着かないでいるが、それでもチューブの中は窮屈で、落ち着かない。すると、伸ばした背に追い着こうとするようにサガが背中をぐんと伸ばして何か言ってきた。ところが不幸なことに、チューブが軋んだタイミングと被ってまた聞こえない…。こいつ、意外とタイミングの悪い奴だな。
　しょうがない。俺はもう一度、今度は自分の耳をサガの口に向けて言葉を待った。
「そうか…確かにその方がミロにとっては良いかも知れないけど…でも、寂しがるだろうな。言うのは君が？」
「スチュアートが。一応、ベースの総意ってことで。後の細かいフォローは俺がする」
　今度は俺が首を回してサガの耳に言葉を届けた。さっきから代わる代わる、何やってんだか…。男二人が互いの耳元に口を寄せ合って…。それに、このミロの話って、チューブの中でわざわざ骨を折って話すようなことか？
　サザークに着き、扉が開閉し会話が途切れた。けれど、すぐにまたサガは会話を進めにかかった。
「君がフォローしてくれるなら有難い。ミロもそんなに落ち込まなくて済むだろうし…」
　は？　俺は我耳を疑った。ついつい大きくなった声で、正面にサガを捕らえて言った。

「あいつって落ち込むのか？　取り敢えずベース区域立ち入り禁止ぐらいは言っておくつもりだけど」
「立ち入り禁止？　どうして！」
サガのくっきりとした緑の瞳が見開かれた。珍しい。こんな風に『びっくりしてます』って顔をする事って滅多にないんだよな。でも、俺もびっくりだぞ。どうしてそんなにムキにならなきゃいけないんだ？
結局ロンドンブリッジに到着してしまったので慌ててホームに降りたが、サガも俺に付いてチューブの改札を出てしまった。
こりゃ、サガの中で結論が出るまで長引くぞ。
何かが、納得できなかったんだろうけど、こうなると長いんだ…こいつ…。
サガと議論するのは刺激があって楽しいけれど、こんな風に、俺の中で答えが出てしまっている事をサガの納得いくまで付き合うっていうのは、実はあまり気が進まない。なんか、時々、物凄く遠回りして結論に辿り着くように見えるからだ。サガの思考回路。丹念で精密だって言えば聞こえはいいが…。
俺は、最短距離がいい。それもなるだけ直線。分岐まで丁寧に辿って結論を出すって言うのは、性に合わない。今度のはどうだろう。俺の家まで来て一時間くらい…で納得するか？
いや、俺が、サガに納得出来るように話せば時間が短くてすむんだから俺次第か…さて、どうやって話を運ぼうか…。
まだサガに、家に寄るかどうかも聞いていないのに、俺はサザーク大聖堂へ向かうべくロンドンブリッジ口を目指して歩いた。俺の家へは、チューブから出てバラ大通り口に出ればすぐなんだが、サガはサザーク大聖堂を通り抜けて歩くのが気に入っているので、サガを連れて帰宅する時はいつもロンドンブリッジ口から地上に出、ぐるりサザーク大聖堂を抜けて大回りに歩く事にしている。
サガも、何も言わずに付いて来た。途中、壁に寄りかかり座り込み、腹が減ったと書かれた紙を差し出している男の目前にある紙コップに、サガは一ポンドコインをそっと落としていた。

ロンドンブリッジ口から顔を出し、駅を背にして右に折れると公衆トイレの数歩先に小さな花屋が店を出していた。俺の視覚のずっと奥で、突然、脈絡なく言葉が点滅した。
花を、買おうか？
サガに。
花束なんて急に渡されたら、きっとサガは驚くだろう。でも、今日の礼だと言えばサガの事だ、無下には扱えまい。俺は、深くは考えなかった。
ちょっと、とサガに声を掛けて花屋にざくざく接近した。
近付く程その小さな花屋の様子がはっきりと確認出来た。電話ボックス一個半といった大きさの中に花がぎっしりと詰まっていて店先にも溢れている。こういった店を見る度感心する。花って、こんなにあるものなのかと。

俺が知ってる花なんて、バラ、チューリップ、ひまわり、…後何かあったろうか？

店内にざっと目を走らせた。赤と白と黄色のバラがあったが、流石にバラの花束を買うのも渡すのも気が引けたので、百合の花を五本買った。大きな白い花で、オシベは切り取られているからサガの服を汚す心配もない。真っ直ぐに頭を擡げている姿は、バラなんかよりずっとサガに似ていると思う。いや、いつだったかサガを褒め上げるのに誰かがバラに譬えたのを思い出したので、意識的にバラは避けたのかもしれない。

丸眼鏡を鼻先にかけた小柄な店主が、長さはどうするかって聞いてきたので、適当でいいって答えた。そしたら、随分長めにしてくれて…。贈り物ですか？　リボンは？　と矢継ぎ早に聞かれて、すべてにイエスと答える。リボンの色はモスグリーンにした。手早く出来た花束を、俺は肩に担ぐようにしてサガの待つ場所に戻った。意外に大きな花束になった。

「サンクス」

短く待たせた事を詫びて家に向かう。サガはまだ何も言わない。

高架を抜けると視界がすうっと開けて、赤い夕焼け空の下、早足で通り過ぎる人波や、襟元に首を埋めるようにして歩く人が不動の建築物の谷間を行きかっていた。大分冷えてきた。長い裾をバタバタと翻し、駅を背にして俺も無言で進んだ。

当然の事のように、俺は家に向かって歩く。結構早いスピードの筈だ。サガには相変わらず何も聞かない。わざわざ尋ねて立ち話でいい、なんて言われても面倒だからだ。どんな話にせよ、暮れなずむ十一月のロンドンは、立ち話には向かない。サガも、ずんずんと歩く俺に何も聞いてこない。チューブから降りて、サガはずっと無言だ。まだ考えているに違いない。あの、規格外れの新人生について。

と、サガが早足に俺の横に並び、こっちを覗き込んできた。

「ミロは、漸く畏縮していた態度が和らいできたところなのに…唯でさえ堅苦しいこと言われてまた硬くなってしまうかもしれないのに、どうして立ち入り禁止まで？」

ほら、来た。

サガの『何故？』だ。こいつは、ほんとに質問が多い。納得するまで食い下がるし、その時にこの『何故？』が発言されなくても、こっちが忘れた頃にやって来たりするんだ。もっとも、今の『何故？』の気持ちはまぁ、理解出来なくもないんだが…。

俺は、ちらっと車の往来を確認すると、とっとと渡ってから答えた。

「どうしてって…。それが道理だろう？　問題解決策として」

信号を無視することに若干の抵抗があったのか、それでも素早く後に続いて来たサガが、予測どおりの疑問を投げかける。

「道理？」

その表情を見て、一生懸命なんだよなぁ…と思う。なんとか、ミロに都合を付けてやろうとしている。でもさ、こういう事ってどちらか一方だけの肩を持とうとすると失敗する。不満を

言い立てる奴等の言葉は、必ずしもその不満そのままを言っている訳じゃない。寧ろ、声高に言われる不満は隠れ蓑だ。

「問題は、あいつが練習前に蓑虫になってることじゃなく、そもそもコントラバスに入り浸ってるって事だろうが？」

俺は斜めにサガを見下ろして言った。サガは、言い淀み、沈黙した。顔を正面に向け、自分の思考に集中している。俺は、黙ってサガの答えを待った。

どのくらい口は閉ざされていただろう。サガが、大きく息を吸って俺を見た。猫の目みたいな形の、綺麗なグリーンの目だ。目頭と目尻がくっきりと立っていて、普段はそんなに気にならないけど、こんな風に意志をきっかり乗せて相手を見詰めるときには大きくて、少し、幼く見える。幼く見えるっていうのは、強く我を出さないサガが、こうしたいっていう感情を物凄くはっきりと見せるからで、時折見せるこの表情を、俺はとても気に入っている。なんて、のんびり思っていたら、サガはとんでもない事を言い出した。

「そうだな…ここから先は私の仕事だな。わかった。後は私がなんとかするよ。」

いきなり、何を言い出すんだ？　こいつは！　俺は、慌てて体ごとサガを振り返った。

「ちょっとまて。お前の仕事とか、後はお前がなんとかするとか、そういうことじゃないだろ？」

一瞬冷や汗が出たぞ。なんで、そう変な方向に思い詰めたんだ？　お前。

「いや、私の仕事だよ。これはバイオリンパートの問題だ。正しくはセカンドバイオリンの、ということだけれど」

あ、何か、嫌な言葉だなぁ。そのパート意識に凝り固まった台詞。俺はちょっと眉を顰めてサガを見た。サガは、俺のコメントを待たずに言葉を続けた。

「…ミロは、確かに他のバイオリンのメンバーとは少し違っているかもしれないけれど、仕事はきちんとしているし、練習にも遅れないし、それほど目くじらを立てられるような事はしていない。彼に向かっている不満の半分は、むしろパートをまとめきれていない私に対するものだ。…それが、より弱い立場にあるミロに向かってしまっている。私はミロに頼んでバイオリンパートに来てもらった。それならば技術云々より先に、彼がどうしたらバイオリンに溶け込めるか、真剣に答えなくてはならなかったんだ…それを怠って、ミロの技術ばかり重視した。今ミロが責められているのは、むしろ私の責任だ」

ふうん…。そう来たか…。

確かに。もし、俺がサガの立場だったら、他のパートから引っこ抜いて来た奴を、むざむざ以前のパートに通わせたりしない。どんなにそいつに煙たがられても、そいつが新しくきたパートに馴染むまでは、首根っこ押さえても野放しになんかしない。

だってさ、誰だって自分の居場所の在る所に居たいもんだろ？　どうしたって今まで居て、親しんだ環境に戻りたいものさ。それが、目と鼻の先にあれば、尚更。でも、それじゃ、

いつまでたっても自分の居場所は新しい場所には作れない。その事を、十二・三の新入りに気付けといっても難しいかもしれない。だったら、サガがコントロールしてやらなきゃいけなかった。バイオリンパートにミロの居場所が出来るまでは、ミロを気安くコントラバスに寄越しちゃ行けなかった。

もっとも、俺達コントラバスも、ミロを返さなくちゃ行けなかったんだけどな…。

ただ、恥ずかしながら、俺達も嬉しかったんだ。結構気安くないと噂され、実際、えらく選好みの激しい奴にコロコロと懐かれ、無警戒で笑れ、頼りにされる。

ミロにこそ、気の毒な事をしたかもしれない。先を読まずに、皆、その場の感情に満足していた。誰かが注意してやればよかった。

いや。誰かがじゃない。俺が、注意してやらなきゃいけなかった。

自惚れでもなんでも、オケでは一番に俺があいつに慕われていると思ってる。俺も、アイオリアと同年という事もあって、弟のような気持ちで兄貴風を吹かしていた。だから、俺が厳しい事を言ってやらなきゃいけなかった。それで、月曜日、ミロに『コントラバス立ち入り禁止』を話そうと思っていた。今からでも遅くない。多少手間は掛かるかもしれないが、完全にバイオリンから外れてしまう前に、バイオリンパートの中に、ミロの居場所を作ってやらなけりゃ…。

暫くは俺もビオラのアンドリューやチェロのシュラ、そこら辺に話すついでを装って、バイオリンまで足を伸ばせばいい。サガ以外にも同学年のバイオリンはいるし。奴らと話すついでにセカンドの連中に声を掛けて、ミロもそこに引きずり込んで…。

「だから、私ももっと積極的にパートのメンバーと話をするよ。勿論ミロも連れて。どんなきっかけでもいい、まず声をかけなければ始まらないって、君が教えてくれただろう？」

何処から声が入ってきたのか、一瞬分からなかった。

俺の考えていた事が、すっぽりと抜き取られ、音になって外から入って来た。

今のは、俺の言葉か？　いや違う。サガだ。

俺は、驚愕の一念でサガを凝視した。

立ち止まって、目を凝らしてサガを見た。

サガの表情は静かで、そこに見える意志は不動だった。

サガは、サザーク大聖堂の芝に真っ直ぐに立ち、全身に落ちる夕日の金色の粉を纏っていた。

その中に、俺が居た。

サガのその姿の中に、確かに俺の姿があった。

正真の俺は、自惚れ屋で、強引で、自信過剰の鼻っ柱の強い未完の人間だ。けれど、精一杯「善い」方向へ向かおうとしている。その、精一杯の部分が、まるで挿し木をしたようにサガの中に宿っている。大切に、サガの中で守られて息づいている。受け入れられ、飲み込まれ、温められている。

味わったことのない衝動で体が膨らんだ。喜び？　幸せ？

感激？　感謝？　どの言葉も不十分だ。脹ち切れそうな感情に、笑うしかなかった。

「子鴨が、殻を付けた雛を連れて練り歩くわけだ」

ようやく、そんな一言を言ってサガの髪をくしゃくしゃとかき混ぜた。ほんとは、俺達みんな、やっとこすっとこの雛に違いないんだけれど…。指先が、サガの髪や熱を感じてピリピリする。もっとこいつに触りたい。触れていたい。

「…子鴨か……。まあ、シオンの親鴨に比べれば十分子鴨かもしれないけれど…」

サガが、微笑ましくなるほど素直に心情を吐露した。無防備に、サガはサガ自身でしかない状態で、それは白い頬を軽く膨らませるといった極めて新奇な行動で立証された。

俺は、もう一度手をサガの頭に伸ばした。何を勘違いしたのかサガは、すっと首を竦めた。

ああ、またくしゃくしゃにされると思ったんだな。だったら、首を竦めるなんて消極的な行動を取らずに、俺の手を払い除けるか、体をずらすかして避ければいいのに…。俺は、サガの予想に反して、そっと掌をサガの頭髪に置き、静かに撫で下ろし、指に残る最後の数インチを惜しんだ。

「ここまで来たんだ。寄ってけよ」

自分でも、想像が付かないほど優しい声が出た。そして静かに笑んだ。全部、意図してやったことじゃない。サガに優しくしたいのも、微笑みかけたいのも、全部思考の制御下に無い行動だ。

多分、自分はサガに言うだろう。これまで言わずにいようとした全てを伝えるだろう。

今日。

サガが、この誘いに乗ったら…。

果たして、サガは頷いた。領くまで、何やら思案していたが、日の暮れかかった今の訪問が、礼法に適うか否か逡巡していたのだろう。うちはそんな事を気にするような家じゃないって、何度来ても飲み込めない奴だ。苦笑を隠して、俺はサガにちょっと待つように言い置いて教会の中に入った。

聖堂内では、ちょうどミサを行っていて、俺は軽く頭を下げるとお御堂を突っ切った。キリストにも神父にも含むところは何も無いが、どうも教会は苦手だ。母は教会のボランティアに参加しているが、家族揃って教会に行くといった事は、祖父母でも来ない限り無い事で、俺もアイオリアも堅信礼は受けてない。教会に寄ったのは、売店が目当てだ。降誕祭を控えて店の中は賑やかなクリスマス・カラーに染まり、賑々しい。何個か気を引いた小物を手に取り、母への土産にアヴェントの蝋燭セットと、もう一つ、サガへの土産を買った。

母へ土産を買おうなんて思ったのは何故だろう。きっと母は驚くだろう。母に対して距離を取っている息子ではないが、それ程まめな息子でもない。母はいぶかしみながらも受け取るだろう。それでいい。母は、こうした小道具の好きな人だから、喜んで使うだろう。

踵を返して教会の裏口からでようとした所で、聖堂の様子がちらりと視界に入り込んだ。

サガが、お御堂の一番後ろに、ひっそりと直立していた。

ああ、この聖歌隊とオルガンの為か…と、何とはなしに木霊する音を追いかけ高い天井を仰ぎ見た。何の曲か知らないが、会衆席の人々がみな起立している。視線をサガに戻す。サガは、固く明るい表情で両手を握り締めて起立していた。

固く明るい表情なんて、自分でもおかしな形容の仕方だとはおもうのだけど。何かがふっきれたようだった。そうか。ミロの事、納得できたんだっけ。

俺はため息を一つ吐いて、ミサが終わるのを待った。

聖歌隊が去り、会衆席から人が腰を上げ疎らになった頃、サガの緊張がようやく薄れてきた。

「おい、もうそろそろいいか？」

そう尋ねると、吃驚したように俺を見た。そして、待たせたかと聞かれたので、音楽には勝てません、とおどけて言ったら、サガはすっと笑い返した。サガを待つ間、ずっと手に抱えているのもだるいので石床に置いた荷物に手を伸ばした。目敏く、増えた荷物の中身を聞かれたので降誕祭の蝋燭だと答えて袋を少し乱暴に振って見せたら、もう一度、サガはにっこりと笑った。

教会の柵を出ると、T路地形に道が走っている。Tの頂側にサザーク大聖堂。聖堂から向かって左が市場。右手が住宅や事務所の入った古い煉瓦建築。うちはそのレンガ建築の一番端。角のフラットで、まさに教会はお向かいさんだ。

チャイムを鳴らして帰宅を告げると、母が扉を開けた。ほい、土産と、先ほど買った蝋燭を渡すと何か怪しむような視線を流してきたが、それも目の前のサガのご利益に吹き飛んだ。

母は、サガの正装姿に小さな歓声を上げ、父をわざわざ呼び寄せた。見世物にされるサガに母を任せて、俺は飲み物の確保に台所へ直進。マグカップにサガには紅茶、自分にはコーヒーを作って部屋へ上がろうとしたところに母がやって来た。紅茶だったら自分が入れてやったとかなんとか言っていたが、先手必勝。お気持ちだけ頂くとする。取り敢えず、薬缶を火にかけて自分の部屋に向かう。

一階が台所やバス。二階が俺とアイオリア。三階が両親とゲストルームの部屋で、四階が半屋根裏の荷物置場になっている。

階段を上がると、アイオリアが顔を覗かせ、サガが来ているのかと尋ねるのでそうだと答える。部屋の扉を開けると、空いたスペースのほぼ中央にサガがコートを腕に掛けて立っていた。

「うわっ。ロス、部屋汚ねぇー」

後ろから顔を覗かせたアイオリアが冷やかした。うるさい。今日こいつがここ来る予定はなかったんだよー

ベッドの上には昨日の晩から散らかしっぱなしのカセットやレコードが散乱し、今朝脱ぎ散らかした寝巻き代わりのT

シャツやらズボンも床に放り出されている。挨拶を済ませた弟をさっさと退散させ、サガを勉強机の椅子に掛けさせると俺は散らかっていた物を一緒くたにかき集めて部屋の隅に積み上げた。ついでに百合の花束もベッドの上に放り出す。いつまでもサガが腕に掛けていたコートを奪い、自分のコートもカーテンレールにひっかけたハンガーに掛けた。

もう一度、適当にしててくれと言ってサガを部屋に残し、階下に下りる。湯は完全に沸き立っていたが、結局母が紅茶用のカップとポットを新たに用意し直していた。くそ、負けた。お前はインスタントでいいんでしょ？　と言われ、黙って自分のマグカップにコーヒーの粉末を入れ、お湯を注ぎかき混ぜた。大きめの盆の上に、サガの為の紅茶のセットと俺のマグカップ。それから、多分、今日市場で買ったんだろうブルーベリーで作ったタルトも添えてくれた。取敢えず礼を言って二階に上がろうとしたら、背中に声がぶつかった。

「花、あげるの？　貰ったの？」

「……」

なんで、このタイミングでこう聞くかな…この人は。

しかも、振り返ったら、もう居ないし…。

気を取り直して部屋に戻ると、サガは散らかったままのカセットやCDのジャケットを指で摘み上げては表裏眺めている所だった。俺は、サガに何か気に入ったモノはあるかと聞きながら、盆を机の上に置き、襟元を締め付けていたタイを外し、ついでにボタンも二つばかり外した。自然ため息が漏れた。やっぱり首絞めは慣れない。

サガが、心もとなげに返事を寄越した。

「…一番静かなのはどれかな……」

吹き出してしまった。

何しろ、散らかっている音源のジャンルはハード・ロック、もしくはヘヴィ・メタルというものが殆どで、もちろんロックはウルサイだけじゃなくバラードや、クラシックに発想を得たプログレもあるんだが、でも…。

クイーン、ツェッペリン、ディープパープル、ブラック・サバス、キングクリムゾン、イエス、デフ・レパード、ヴァンヘイレン、エアロスミス、メタリカ、スコーピオンズ等々、一体どこらへんがサガの言う『静か』に当てはまるのか。発想からしてズレているとしか思えない。

「静かって…お前…。まあ、いいや。取り敢えずこれとか聞いてみるか？　ウィ・ウィル・ロック・ユーとか、有名だぞ？」

俺はクイーンの『NEWS OF THE WORLD』を取ってサガに渡してみた。

「知らない奴って、結構希少」

サガは、黙ってテープを受け取りミニコンポにセットして聞き出した。

何とも言えない緊張感の中、ウィ・ウィル・ロック・ユーが演奏される。サガがしかめっ面でコンポと睨み合っている間に、俺は壁からパス椅子を掴み上げて来て、広げて座った。刻一刻とサガの表情は灰色の苦悩に塗りつぶされていき、そ

してとうとう根を上げた。
「…ごめん…。やっぱり合わないみたいだ……」
そのなんとも言えない、苦痛の表情に、俺は声を出して笑ってしまった。何も、そんなに我慢して聞くこともないのに…！
唯の真面目なのか、融通が聞かないのか、チャレンジャーなのか…いや、きっと全部だな。零れる笑顔が止められない。こんなたわいの無い話をサガとすることが、楽しい。
「ミロは結構 Queen は好きだって言ってたぞ。そっちのは今度貸してくれって言われたから持ってくやつ」
小さな小山を指し示すと、その一番上を取ってサガは眉を顰めた。
「Red…何？」
「レッド・ツェッペリン。聞いた事ないか？」
「…名前だけなら……」
味わっている困惑を隠しもせず、サガは言葉を続けた。
「…やっぱり、普通は少しは聞くものなんだろうな…こういうのも。…慣れれば大丈夫なのかも知れないけど……」
そして、一つ、お上品にため息を付いた。
……！
俺は吹き出しての大爆笑！　コーヒーを手にしてなくて良かった！　仕舞には涙が滲んでくる始末。
「……　絶対慣れないよ、お前は……！」
ああ、もう、呼吸困難に陥りそうだ！　あんまり笑って、流石に悪いかなと思ってサガを横目で確認すると、不本意ながらも、慣れないでいる事が許されるのなら慣れずに居たいという願望がありありと見て取れ、笑いに拍車が掛かってしまった。
「無理するな」
どうにも収まらない笑いと共に、サガの髪に指を入れ撫でる。サガは逃げない。大人しくされるがままになっている。少し、ふてくされているようだけれど。
俺は、積み重なったカセットの下から、また一本カセットを引っ張り出し、テープを取り替えた。
「今度はどうだ？」
再生ボタンを押す。細い弦の音が流れ出す。サガが、すっと肩の力を抜いて言った。
「…ああ、なんだかほっとする……」
さて、この感想が、いつまで続くか？　実はこれ、去年の俺たちの定演の録音だったりする。案の定、行く瞬もしないうちに、サガのはっとした声が上がった。
「…間違った！……これ、去年の定期演奏会か？」
大当たり。さて、どうする？　続けて聞くか？　そう思ってサガを見遣ると、もうサガは記憶を手繰り寄せる事に夢中になっていた。
「…前言撤回…胃が痛いかも……」
見えない奏者達を音の向こうに捉えてサガは呟いた。きゅっと眉を寄せ、じっと音に聞き入るサガは、まったく音楽以外に心を割く余裕はない状態だった。さっき聖堂でも言ったよう

に、サガが『喜楽』に夢中になったら、誰もそれには勝てない。そして、夢中になっているサガは、普段よりずっと華やかで……うわっ…俺、可愛いとかって思ったぞ。今。……重症だ…。なんだか、今までにも増して感情に歯止めが掛かってないと思うのは、気のせいか？　いや…気のせいじゃない…。サガが、何となくいつもと違うんだ。服装とか、俺の誕生日という事で何かと先導したがったとか、そういうことじゃなく、色んな表情をしていたと思う。

昼、待ち合わせの場所で俺を見付けようと首を伸ばしていたサガ。俺に気が付かなくてびっくりしていたサガ。チケットを渡す時の不安気な表情、ほっとした表情、こちらの視線に気付いた時の怪訝な顔。一生懸命に俺の真意を掴もうとする顔。パートリーダーとしての責任を果たそうという顔。教会の中、蝋燭に照らされた生新として静かな決意の表情。

顔、顔、顔…。サガの表情が何度も何度も目に再生され、そのことをよしとする自分が居る。

目の前にいる男が、正真正銘、可愛くて、力一杯抱きしめたいと、そう思ってる。笑っちまう。…笑うしかないよな…。

「あはは……　バイオリンは全然気持ち良くないよな、この曲。一瞬だけおもいっきり弾けるかと思ったらまたかそけき音だもんな。オレだったらフラストレーションが溜まって堪まらない。そのかわり、コントラバスは美味しかったぞ！」

言葉と思考が全く別物。よくここまで器用な事が出来るもんだと自分で自分を称賛する。チラリとサガを盗み見たが、こっちのなまくらな状態に気付いてなかった。

一層、サガを見る眼差しが優しくなった。

詰まらないな。これが、もしサガが女の子だったら、自分の部屋に入ってリラックスしているっていうのは暗黙の了解として成立するだろうに。肩に、手を回すくらい許されているかもしれないのに。

この中途半端で曖昧な関係。いや、サガにとってはきっかり明瞭な関係だろうが、これに、どうしたら終止符を打てるだろう。急いてこちらの全てをバカ正直に曝す必要はないのかもしれない。

けれど、騙し続ける訳にもいかない。そう思う。

いつ言ったものか。言えば、こんな風に時間を過ごす事も無くなるだろうか…。

そう思うと、急に、このなんの事はない、サガの親友として過ごす時間が、大切なものに思えた。当たり前だと思って流していた時間が、一瞬、一瞬が、噛んで含んでもまだ味わい切れない貴重なものに思えた。

瞳が緩む。限りなく、サガが大切に思える。

共有出来る過去があるそれ自体が、誇れる何かのようだった。

「ああ、あの時は本当にコントラバスが羨ましかったよ。Toti に入ってからはどうせフルヴァイオリンになるのだし、自分一人くらいベースと一緒に半音界進行やってても大丈夫なんじゃないか、と本気で思った。コントラバスの面々、本当に気持ちよさそうに弾いていたしね。…少々、音量が大きすぎ

たけれど」
「おいおい、そんな無茶な……　半音進行なんてボーイングが違うんだ、一発でバレるじゃないか！」
「ボーイングなんて、どうにでも合わせられるよ。いつも旋律ばかり弾いていると、たまにはベースもやってみたくなる」
論理型思考を滅多な事では崩さないサガが、今は屈託なく突拍子もない事を言ってのける。
調子に乗って、俺もサガを煽るような事を言う。
「でも、確かに気持ち良かったよなぁ…。またやりたいな、オレは」
こんな時間がずっと、続けばいい…。一瞬一瞬で、サガより気の合う奴は居る。サガよりスリリングな共感を共有出来る奴も居る。でも…。サガがいい。こいつがいい。横に居て、結局全てを曝け出して歩いていくならサガがいい。
「いつか、きっとまた機会があるよ。在学中は無理かもしれないけれど、OBオーケストラもあるし…」
サガが、静かに笑ってそういった。OBオケもあるし…と、淡々と口にした。俺は、もちろんUKに居る限り参加するつもりだ。でも、サガ、お前は、そこに居るのか？　爵位を継いで、ソールズベリ伯になり、それでもOBオケになんかお前は居るのか？　俺が、アンドリューやシュラ達と未来を語るのと違う未来が、サガの背後に一瞬だけ、見えた気がした。今の言葉は、その中にサガ自身を含めての言葉なのか、それとも、ただ単に俺の望みの言葉への慰撫なのか。

『お前って、OBオケに入るつもりなの？』すぐさまそう言えば良かったのに、どうもタイミングを掴み損ねて飲み込んでしまった。きっと問えば、笑って『もちろん』と、事情の許す限り所属したいと思っていると答えるに違いない。
机の上に置きっ放しだったマグカップに腕を伸ばす。一口咽に流しいれてから捻り出した言葉を繋げた。
「…バランス、確かにベースが大きいな…。でも、ここ、チェロも一緒だったんだよな…。オレ達のせいだけじゃないぜ？　シュラの奴も結構気持ち良く弾いてた」
サガは、クライマックスでシンバルが遅れた事に、くっと唇を引き結んで顔をこちらに向けて答えた
「まぁ、ワーグナーだからね。これくらいベースが鳴ってるのも好きだけれど？　私は。ただ、気持ちよさそうなベースを横目に自分がヒステリックな高音を弾いていなければならない、というのがちょっと悔しいだけで」
俺は、にやっと笑って見せて答える。サガもカップに手を伸ばした。
「思い出した。そういや、お前、かなり神経質な顔して弾いていたよな？　シオンなんかは途中で諦めてたけど？　一瞬、ホールの天井仰いでたからな。耳がいいのも考えものだ」
最後の最後に、オクテッドの連中が崩壊したんだ。ショーン上級六年生の出す音が上り切らず、気持ちの悪い和音がホールに響いた。こうして思い返しても色々あったもんだ。やっぱ、ビデオカメラ欲しいな。来年の予算に計上出来ないかな？

こういうのを何年かした後、仲間が揃ってわいわい見れたら、絶対に楽しいだろう。

その仲間の中に、サガの姿も入れて俺は想像した。

「ああ…思い出させないでくれ…あれは私の努力ではもうどうにもならなかったんだ…」

片手でサガが頭を抱え込むようにして呻いた。

俺の頭は忙しくサガとの会話と、自分だけの思考の展開を往来した。この二重の対話は、いい加減止めにしよう。今は、考えるのは、目の前のサガとの会話だけにしよう。俺は、力任せに、根拠のない未来への寂然とした思いを頭から振り払った。もう一度、あのサザーク大聖堂で見た、夕日の中に立っていたサガと、その中に見えた自分を思い出そう。

俺は、両の口角を引き上げてサガを見た。

「いや、あれって、お前の努力でどうにかなるものだったわけ？」

「…いや…どうにもならないけど…でもこの和音は違う！　って分かっているのに同じ音を弾き続けると言うのは、かなりつらいものだよ？」

サガの瞳がその時の辛さを訴えかけていた。

おかしいな…。どうして、こいつのこういう仕草の一々が、物凄く可愛く思えるんだろう。軽く吹き出しつつも、俺はその実、参ったなぁ…と思っていた。無性に、サガに触れたくなるんだ。

「成程な！　そりゃ確かに辛いだろうな！　でも、あの後、ショーン先輩、土下座せんばかりだったじゃないか。オレは、あの瞬間のオクテッドのメンバーの顔が忘れられないね！　円卓の騎士もかくやな表情だった！　でもまあ、低音は楽しかったよ、凄くな！」

こそばゆい衝動を、体中で笑う事に紛らわせていたら、とうとう下から母の声が階段を伝って届いた。

「ヴィンス、ヴィンセント！　埃が落ちるわよ！」

うわっ！　やばい。本当に埃が落ちてたら、サガが帰ってから絶対に掃除の命令が下される。

俺は、大人しくバス椅子に足を納めなおした。ベースを始めた頃、格好つけてこの椅子に座って弾くことに慣れるためと父を説得して買った椅子だけど、そろそろ足を持て余す。背凭れも無いから長時間座るには向かない椅子だ。僅かに残った温もりを両手で受けてコーヒーを啜っていると、サガが楽しそうに笑いながら言った。

「ああ、そう言えば、あの花束、母上へのプレゼントじゃなかったのか？　持って行ってあげればきっと喜ぶのに」

サガの言葉に、すっ、と自分の表情が強張るのが分かった。まったく予期していなかったタイミングで、サガに渡そうと思って買ってきた花束の存在を、サガ自身が尋ねた。制御出来しそこなって一瞬だけ、鳩尾がぎゅっと縮こまった。

サガといると、サガのどんな小さな表情や、仕草や、姿勢にも覆いこみたくなるような熱を持て余す。サガの行動、生活、時間の全てに、自分の存在を楔のように打ち込んでおきたくなる。その正体が、独占欲だと、半年前に思い知らされている。

この詰まらない、人間の持つ多大な欠点の一つ、独占欲のその向こうに、自分がサガに対して月並み以上の好意を抱えて立ち、だからこそ同等以上の好意をサガに求めている事も知っている。そして、少なくとも今は、サガの特別な好意の溢れる先が、自分以外の者であって欲しくないと…、残念ながら切実に希望している。

ここまで、自分が何かに執着するとは想像したこともない。出来なかった。何でも人並みには出来るし、好意も貰って来た。だからこそ、執着しなくても望むものは手に入れてきた。

執着は、独占欲は、醜いものじゃないだろうか？

相手の都合を考慮出来ずそれを押し付けるなら、醜い以外の何物でもない。

例えば、今ここで、サガに特別な好意を自分に与えてくれるように願った場合、それが拒絶された時、自分は醜くならずに居られるだろうか？

じっと自分の中の暗闇を覗き込む。

何も見えない。

当然だ。予測なんて、つく訳がない。すでにサガ対して持て余す感情が予測可能の検知を超えているんだ。跳ね返った場合なんて、おそらく相応に痛みがあるだろうとしか予想出来ない。

当たって砕けるだ。

今までサガに告白した奴らより、自分の度胸が劣るとは思わない。

腹に力を込めて、もう一度思い返す。

聖堂の脇、夕日の差す宵闇の中、サガの中に居た自分。

そこに到達した人間は、まだきっと、俺以外には居ない。

もう覚悟は、決めたんだ。サガが、自分の誘いを受けこの部屋に来たなら、と。

気付かれないように、サガから顔を反らして息を吸い込んだ。

平静に、いつも変わらぬ受け答えで会話を進めよう。そう計算していたのに、バス椅子から立ち上がると、一回だけ、大きく息を吐いてしまった。笑ってしまう事に、どうやら少しばかりは緊張しているらしい。

「ああ、あれな」

と、呟いて、何でもないことのように素っ気無く花束に手を伸ばした。

リボンで纏められた部分より下を持ってベッドから百合を持ち上げる。サガの目の前に背筋を伸ばして立ち、もう片方の手を花束の中程に添えて傾きを作りサガが受け取りやすいようにしてやる。

驚きを隠そうともしないサガの顔が見える。緑の瞳が真円に開かれていた。もしかしたら、こんな風に間近にサガの表情を見られることは無くなるかもしれない。そんな不安も、小さく泡立った。けれど、なるべくあたう限り沈着に、威儀を正して言葉を発した。自然な笑みが浮かんだ。自分にとって、どれ程この目の前にある存在が大切か、それを思うだけで笑える自分が居る。

「…これは、お前に」
腰を折り、サガの胸の位置に花束を下ろす。
「今日の礼」
サガは、訳が分からないと書かれた表情で俺を見上げた。それから、徐々にその硬い表情は融け、ゆるゆると柔らかく、淡く、次にはっきりとした悦びに変わった。
「…有難う…」
心から満足した笑顔が、咲いた。咲いたとしか言い様がない。無防備で、本当に心からサガは喜んでいた。腕に抱え込んだ白い花を、満足そうに眺め香りを楽しんでいた。目を細め、いい匂いだと呟いていた。
俺は、左腕を腰の後ろに隠し、右腕をサガの銀色の髪に伸ばした。両腕で相手に触れないのは、決してその人間に対して危害を加えない事の意思表示でもある。
伸ばした右腕は、指先からサガの髪に触れ、潜り込み、ゆっくりと銀色の髪を梳き下ろす。
三度目にその頭髪に指を差し入れた時、掌でサガの耳を撫でた。と、今日何度目になるか知らない、サガの驚愕の表情が目に飛び込んで来た。
一瞬、背筋が冷えた。
けれど、俺は出来るだけ丁寧にサガに話しかけた。まるでインフォームドチョイスを促す医者のようだ、と頭の片隅で皮肉る声がする。その通りだ、とその声に答える。俺には自分のこの現状を、なるだけ的確に、そして十分にサガに説明する必要がある。その上で、サガは今後の俺との関係を自分で選択する権利がある。その権利を、不当に曇らせたり、楽観視させたりするような情報提供は無責任だ。慎重に、言葉を選んで俺は話さなければいけない。
指の背で、おもむろに、サガのまだあどけなさの残る頬を撫でた。
「お前を驚かすと思う。不快にもさせるかもしれないし、怒りかもしれない。けれど、俺がそういう感情をお前に抱かせる事は、全く本意じゃなかったって事だけ信じて欲しい」
サガは、不意に変容した俺の状態に目を見開いたまま凝視し続けている。息をし忘れているんじゃないかと思うほど体が硬直していて、気の毒だと感じた。
まさか、俺にまでこんな告白をされるとは、夢にも思っていなかったに違いない。その一点に関しては、心からサガに済まなく思う。
俺は、ちょっと笑うと、サガから腕を離して言葉を続けた。
「お前が好きだ。お前がこの手の事で苦労しているのは知っているから、自分がこんな事を言うのはかなり良心が咎める。…半年ぐらい、自分で何とか制御出来ないかと努力して来た。それでも、お前に対する自分の…望みは変わらなかった。どうしても、お前に触りたいし、触れていたいと思う」
新しく息を吸い込んだ。サガは、相変わらず硬直して俺を見ている。その瞳に恐怖の色はないけれど…。俺は、自分の失敗を確信してこれからのことを思い描いた。

これでサガは、パブリックで最も信頼していた友人を無くした訳だ。まあ、今は、アンドリューやシュラが居るものな。何とか持ち堪えてくれるだろう。それで、俺はどうする？仕方ない。なるべくサガに近づかないようにしてやるさ。サガも、今までのように気安く俺には近付くまい。

俺は、サガから視線を外し小さく嘆息した。あんまりサガのショックが大きくても、今後、俺にアフターケアの機会が与えられるとは思えない。取り敢えず、今、サガのショックを何とかしてやらなくては。

俺は、大仰に笑ってみせると丁寧な話し振りから、快活な会話へと声のトーンを移した。

「黙ってそういう目でお前を見てる方がお前に対して失礼だろ？　だから、俺の今の状態をお前に報告しただけだ。今後、お前に余計な気を使わせる気はない。これでお前に丁重に断られたからと言って変にオレがお前に対しての態度が変わる事も絶対にない。ただ、知って貰いたかっただけだ」

サガは、まだ強直の状態にいるらしく、ピクリとも動かない。

参ったなぁ…。そんなにショックだったのか…。こいつ、一人で寮に帰れるんだろうか。何かこちらの予測不可能な方向に思い詰めたりしないだろうな？

少々、思案に余った。

これ程衝撃を与えられるほど、近しく信頼して貰っていたと考えれば慰めにもなるか。

サガも困っているだろうが、俺も困った。しょうがないので、なんとかサガの負担の一端でも軽くするべく約束を口にした。

「お前に対しての態度は変わらないといったが、過剰なスキンシップは控えるようにする。それ以外で、お前に対する俺の誠意と信頼と友好の念は変わらない。お前が望むなら、一定の距離を置くようにする。約束は破らない」

こんなもんじゃ、駄目か？

後は、部屋を替わって、寮を替わるか…。いずれにせよすぐには適わないかもしれないが、次の手として提案するには有効だ。特に、部屋は替わって欲しいかもなぁ…サガは。

怒りでも、嫌悪でもそろそろ何らかの反応が欲しい。こんな事にまで我侭な自分に反省を促しつつ、新しい解決策を提案しようとしたその時、サガの口が僅かに動いた。

「…まさか、先を越されるとは思わなかった……」と。

そして、見る間にサガの頬は淡く血の色に染まっていった。といっても、すぐにサガは顔を伏せてしまったのであっという間の視覚情報でしかないんだが…。

この反応は、一体、なんだ？

「……有難？…本当に嬉しい……。少し悔しいけれど……」

「悔しい？」

何が悔しいっていうんだ？

サガは、今度は花を見詰めっぱなしでいる始末。今度はこっちが呆然とする番だった。何なんだ？　その反応は！　こっちの方が無性に恥ずかしくなってくるじゃないか！　大体、嬉しいんだったら、顔ぐらい見せろ！

なんとなれば、この場合、俺も馬鹿な問いを返してしまったが、つまりは…つまりは、だ。

俺が現在の自分の状況についてインフォームした事が、サガを追い越したという事で、サガも俺に通知したい事があった、と。そして、通知したい内容が、どうやら重複していたらしいと、そう言う訳だろ？

要するに、アイオロス・ヴィンセント・エインズワース氏の部屋に存在している二人の人間。立っている人間と、座って花束抱えている人間は、相思相愛である可能性が高いと、双方共に男性であったりする障害にも拘らず、と、そういう事だ。

一気に肩の力が抜けた。笑い出したい気分だったが、サガが話を聞いてくれというので努力して畏まったままそれを促した。

「…まず、君に謝らなければならないことがある。5月に君が私にした質問に、私は正直に答えなかった…『先輩からの申込みは断ったから』なんて、一番狡い逃げ方だけれど、あのときは何かを考える前に勝手に口がそう答えてしまったんだ。…あとから考えて、何故あんな反射的に答えてしまったのだろうと思った」

黙々と俺はサガの言葉の連なりを追った。かなり神妙な態度だった…はずだ。けれど、徐々に咽喉の奥から突起が生え出して嚥下を妨げる。

は？　とか、そんな事考えてたのか？　とか、そりゃ初耳だ、とか…。

サガの話を冷やかし半分に聞いていたわけじゃない。けれど、どうも巧くサガの心情に迫れない、というか、集中出来ない…頭と体がふわふわと別個のものになってしまったかのように纏まらない。収拾が付かない。思考と、五感から入る情報の不調和がキーキーと耳元で音を立て、更なる思考の疲弊を生み出す。

サガは、俺の心中などお構いなしに、一心に言葉を継いで来た。

「本当に君に対して友人以上の興味が無いなら、正直に言えばよかったのにと思った。『君は友達だ』とでも、『申し訳ないけれど同性に興味は持てない』とでも。でも、私はそうしなかった。…そうして、気付いたんだ。あの瞬間、これ以上話が進んだらまずい、と感じたのだと。これ以上のことを訊かれても、自分はまだ答えを持っていない、だから、あやふやな状態でずるずると答えを引き出されてしまうことは避けなければならないと、ほぼ反射的に思った。…君の言葉に嫌悪を感じた訳でも、戸惑いを感じた訳でもない…私にとって、十分に受け入れられるものだったから、余計に警戒したんだ」

思考の混乱の中で、すう…っと、自分の口元が緩むのを感じたが、止められなかった。半年前から、目の前の、この真面目で真摯な友人は、懸命に考えていたんだ。ずっと、静かに。その懸命さを、とてもいとおしく思う。そして、やっぱりどこか間が抜けているようにも思えて、笑んでしまう。

オケにあれば優秀にして優雅な奏者、学内にあれば沈着にして明晰な頭脳の持ち主として確固たる人間が、今、目の前にある人間と同一とはとても思えない。

「そこまで考えて、先輩に対しては駄目だったのに、どうして君なら受け入れられたのだろう、と思った。それは、私自身が、君という人間に興味を持っているからだ…おそらく、ただの友人、という以上に。勿論、長い間、私にとって君は人生の先輩と言うか、兄のような存在でもあったから、そのためなのかも知れない、とも思った。…結論を出すまで、結局半年かかってしまった。君が、コントラバスの新人生をそれこそ君の持てるもの全てを使って集めようとしているのを見た時に、初めて分かったんだ。私は君の助けになりたかったし、喜びも悲しみも、君の背負っているもの全てを一番に分かち合える位置にいたかった…いつの間にか、私は自分がその位置にいることを疑いもしなかったし、その場所を誰かに譲り渡す気も全くなくなっていたんだ」

どうして、こんなに人を喜ばす事を、全身全霊の懸命さをもって打ち明けてくれるんだろう。物凄く嬉しい。喜び一杯で、叫びまくりたいよ、部屋を飛び出して。

でも、サガの話はまだ続くらしかった。

俺は震えてきた口元を片手で覆った。こいつ、もし、いつか女の子相手に告白するような事があった場合って、やっぱりこんな風に延々喋り続けたりするのか？　序論から始まって結論まで、黙って相手に聞かせているのか？　普通の女相手だったら、もたないぞ…この饒舌。色恋沙汰に必要なのは説明じゃない。論理で相手を納得させるんじゃなく、その場の雰囲気とか、押しの強さとか、スピードで呑み込んでもらうことじゃないのか？　俺はそう感じるぞ？

覆った片手から、勢い余った空気が漏れるのを必死で抑えた。手に汗が滲む。まずい……！　肩まで震えてきた！

息苦しさで、顔がじわじわと熱くなる。堪らず、俺は視線を床に落とした。サガが、悪いわけじゃないとは思うけど…

「…だから、もう、言ってもいいのだと思う…私は、君が好きで、いつも君にとって一番の地位にいたいと思っている…今だけでなく、これからもずっと。…一度そう気付いてしまったら、君の一挙一動が気になってたまらなくなった。君は私に触れたいと言ったけれど、私もずっとそうだった……。これは、普通の友達に抱く感情とは違う、と思う」

サガは、漸く顔を上げてこの最後の科白を言い切った。

でも、俺はその頃には、本当に唇の震えを堪えるのに必死で、見つめ返すなんて出来なかった。もう、腹筋が堪え難いくらい小刻みに痙攣していて、息をするのも危うくなってきている。それで、サガの上に屈みこみ、その肩に顔を隠した。そして、とうとう、くつくつと笑いながら、何度もサガの背中を叩いた

お疲れ様。

…これだけの事を自分で考え、答えを探し出し、伝える決心をし、今伝え切った。真面目で、初心なお前がどれ程葛藤

したか、想像に絶する。
ありがとう。
同じ思いを抱いてくれて、そしてそれを伝えてくれて。本当に嬉しいよ。でも、笑いが止まらない。きっと今日のこの長い必死のサガの告白は、一生忘れないに違いない。
サガのなんとも頼りなげな質問が耳に届く。どうして笑っているのか、と。これには不意をつかれ、とうとう全開で爆笑してしまった。なんとか、謝罪の言葉を口にしたものの、やっぱりどうにもならない。いや、酔くなったかもしれない。しゃっくりの止め方はあったが、笑いってのはどうやって止めるんだ？
しがみ付く様にして笑っていたら、俺の腕の中に囲われて一瞬緊張した背の主の、低い声が耳に響いてきた。
「アイオロス…」と。
うつ。ご機嫌斜めだ。でも、笑いが…収まらない…！
とうとうサガは、決然とした態度で立ち上がり、俺を引き剥がしにかかった。これには流石に俺も笑いを収めるしかなかった。今、告白したばかりでもう機嫌を損ねて帰らせる、なんて真似、出来るはずがない。
俺は、確固とした誘惑の意志をもって、サガの耳元に囁いた。
「キスしたい。…いい？」と。
さては、サガの耳はさあっと染まり、俺は再度吹き出すのを堪え（こんなに俺は笑い上戸だったか？）、頷いてくれた頭の主の耳元にキスをした。
ずっと、触れたいと思っていたものに、今、初めて触れる。
ずっと、近付きたいと思っていた距離をゼロにする。
頬にキスをし、目の下にキスをし、顔を傾け、唇にキスをした。
唇に、唇で触れた。
静かに離れて、キスした相手の顔を視界に入れると、相手も真っ直ぐに、俺を見ていた。
額を付けて囁いた。厭じゃない？　と。銀色の波が、ゆっくりと横に揺れた。
「サガ…」と名前を呼んだ。
初めてその名を呼ぶような気がした。
声の上る道が、熱い。
なるべく、性急な動作にならないように、また唇に唇を合わせた。
今度は、サガの上唇や、下唇を軽く挟むようにしてキスを繰り返す。すると、少しづつサガの結ばれていた唇は開き、やがて同じ仕草を返してきた。
無言にして、圧巻。静寂にして有言。
相手の存在が痛い程全身に突き刺さる。サガの項に手を差し入れ、サガの緊張を揉み解す。サガの唇が温かい。その温かな唇が、たどたどしくも俺と同じ動きを返してくる。
多分、そうだろうな、と思っていた通り、サガにはこういう経験がない。はっきり知れるのに、同じように返そうとする姿がすこし背伸びをしているように見えて、からかってやりたくなった。

緩んできたサガの唇を舐める。サガの体は小さく跳ね上がった。

「これ以上は、止めとく？」

微笑んで尋ねると、サガは「…どうして？」と逆に尋ねてきた。本当に不思議そうに。

どうしたものか。

うまくやれる自信はある。でも、サガがそれを気に入るかは…よく分からない。サガが、結構負けず嫌いで、やられたら絶対に同じだけ返そうとする人間だという事を知っている。特に、最近俺に対してそれが顕著なんだ。けれど、こういった類のことを理性で同等に返されても困る。

例えば、今、俺はサガを抱きこんでいた腕を外して、右手をサガの顎にかけ、親指の腹でサガの薄い唇を何度も撫ぜている。本当に、サガはこういう事を受け入れられる態勢にあるのか？

俺は、慎重にサガのグリーン・アイズを覗き込んだ。すると、すうっと、両の目蓋が閉ざされた。唇が、軽く開いている。撫でる指にセクシャルな意味合いを感じてくれていれば上々だ。

確認しなくてもいい、自明の言葉を俺はサガに囁いた。ぴっくりしていただろう？　と。

「…嫌だ。止めない。…折角触れられるようになったのに」

！

どきっとするのを通り越して、俺は再度吹き出した。駄々を捏ねているように取れなくもないが、でも、折角っていうのは何だ？　折角っていうのは！　俺は懐かない野生動物か、獰猛な肉食獣か？　なんとなく、いつまでたってもこいつの頭の中って色っぽい雰囲気になってないような気がするのは、俺の錯覚か妄想か？

仕方がない。ゆっくりやるさ。サガの髪を何度も梳きながら、俺はサガに頼んだ。

「腕、抱きしめて…」

サガはゆっくりと両腕を俺の背中に回してくれた。ぎこちないと思うけど、仕方がないんだろう。ま、ガチガチに緊張していると言う訳ではなさそうだから、気にしないことにする。

きっと、本当にどうしたらいいのか分からないんだ。そういう事に、しておこう。

俺も、サガの体をゆったりと抱え込む。もう少し、何か、サガの方から熱に任された反応が欲しいな、と贅沢な事をちらっと思う。

その時、緩く俺の体に回されていたサガの腕が、きゅっと締まった。そして、今度はサガが、俺の耳元で俺の名前を呼んだ。

アイオロス、と。

背筋が震えた。右腕をサガの項に回して撫でながらサガの顔を引き寄せた。

唇を、合わせた。

昔、映画なんかでキスシーンを見た時、何をやっているの

か判らなかった。そのうち、どうやらただ唇を合わせているだけではなく、相手の口内に自分の舌を入れているのだと知った時には、何が気持ち良いのやらと、友人同士で笑いあった記憶がある。『気持ち悪い』とかなんとか。ゲタゲタ笑った記憶が確かに残ってる。さらに後、好奇心の強いもの同士、手近な『男の子』と『女の子』は仲良くなって、共通の秘密を抱え込む。大人の真似をしてみる。大人の真似をして、知識で得たキスをしてみる。お互いの顔や首にキスをしてみる…。そして、時にはもっと進んでみる。

それでも、気持ちいいって事はあんまりなくて、なんだ、こんなもんかとそれで普通の関係に戻ったり、忘れてしまったり…。

そういったものであったのに、今味わっているものは、一体何なんだろう。

どうして唇を擦り付けたままいつまでもひっついてたのか、完璧に理解出来る。今なら。

どうしようもなく、気持ちいいんだ。申し訳ないぐらい、相手の唇や舌が恋しい。

だから追う。

だから離さない。離しがたい。

ごめん。サガ。大分夢中だ。一度舌を差し入れ知ってしまったサガの口内は、頭の芯まで痺れさせて、気持ちがいい。人間の口の作りをどう考えたって、入れて気持ちのいいものじゃないと思うんだが。サガは、特別だ。

味わうとしか言いようがない程、深々と相手の口内を舌で探った。歯も、歯茎も、上顎も、もっと奥までも、触れる範囲には全て触れたい。鼻から息を吸う。自分の胸が深々と広がる。まるで水中にどれほど深く潜り込めるか没頭するように、キスに溺れる。

ふっと、サガの様子が気になって僅かに唇を離し視界を開くと、肩で息をしているサガが居た。半開きになった唇は、濡れているためだけじゃなくかなり赤くくっきりとした色になっていたし、額にはうっすら汗をかき、頬も上気している。

うっわ……マズイ…。やっちゃったよ……。

自分が夢中になりすぎて、サガがどんなに一生懸命に努力して同じ事を俺に返そうとしているのか気付かなかった。かなり、一生懸命色んな事をしてくれていたような気がする…。覚えてないけど…。

苦笑が漏れた。

この、サガの一生懸命って、どうやったら無くさせられるんだ?

何度もサガの髪を撫でながら、頬やこめかみにキスを繰り返し、サガの息が落ち着くのを待つ。そして、ふっ、と耳に息を吹きかけて、一瞬ぴりっと起立したサガの腰と肩に手を回してベッドに着地させた。階下に響かないように、かなりの注意を払って静かにサガをベッドの上に『置いた』んだが、やっぱりサガにとっては『押し倒された』と認識してしまったらしく、全身の毛が逆立っているような状態になった。恐

らく露骨にそんな態度を見せないように努力はしたんだろうけど、明らかに警戒はしていた。

……別に、襲うつもりはないんだが…。立ったままでいるより、寝っころがっちまった方が、サガが楽なんじゃないかと、そう考えただけなんだけどな…。俺、そんなに信用無いか？

サガの腰の下に敷き込まれていた腕をそっと外し、サガの体の上から自分の体を退かせ、僅かに首から上だけがクロスするようにサガに覆いかぶさり笑いながら質問した。

「俺はサガに触れたいけれど、サガは？」

サガは、何度か言葉を言いかけては言いあぐね、とうとう小さな声で囁くように言った。

「…もう少し、抱きしめていてもいいかな…服の上から」

笑いを噛み殺した。わざわざ、服の上から、なんて限定をかけるっていうのは、どういう了見なんだ？　一体、こいつに俺はどう映っているのやら…。いいけどね。だったら、その警戒心に便乗させてもらうさ。

「服の上から？　下から触ってくれても俺は構わないけど？」

なるべくさらっと言ったつもりだったけれど、サガにはバレたらしい。下からピリッとにらみつけてきた。

「…それはまた今度。下にはご家族も居る」

つんとしたその態度に、ちょっかいをかけたくなって、こちらを見上げていたサガの頭を横に押し退け、項に掛かる柔らかな髪を撫で上げた。そして、髪の生え際、首の真後ろをきつく吸った。

「……っ……」

サガの背中が、予想以上に跳ね、首には思惑どおりの痕が残った。紅く、鮮やかに、残りやすい体質なのかもしれない。それは、いとも容易くあっけなく付いたから。

自分の反射に唖然としているのか、サガはじっと息を殺しているようだった。

一つ、提案を持ちかけた。サガのしたいように触ってくれと、その方がお互い安心出来る、と。

俺の真似じゃなく、サガの本当の気持ちの動きが知りたい。

耳元に、出来る限り甘く囁く。

少しでも理性が飛んでくれるといいのだけれど、と希望しながら。

サガの緑の瞳を覗き込みながら、もう一度微笑みかけると、サガも目を合わせてきて、バイオリンを引き続けてすんなりと伸びた腕が、ゆるゆると俺の体に巻きついてきた。

そして、その腕は、存外の力で俺の事を抱きしめた。肉付きの薄い腕だったけれど、案外力はしっかりしている。妙な事に感心しながら、抱きしめられる事に気持ちよくなっている自分が居た。

サガの頬を両手に挟んでキスをする。サガはもう驚いたりせずに自分の方から招き入れてくれる。サガの口内で舌を絡めあう。

サガの背が僅かに反り返り、体と体がぴたりとくっ付き合う。俺はサガの背中を何度も撫でる。唇を外して、サガの頬や、

耳元にキスをし、首筋に降りる。かっちりと立ち上がったカラーが邪魔だった。ボウタイを左手で外し、サガの注意が戻らないように素早くボタンを二つ外した。

一気に開放されたサガの首筋は、本当に綺麗だった。何度も何度もキスをする。そして、ああ、やっぱり、と思う。

サガは、耳元から首筋にかけてが弱い。フレンチ・キスをしている時よりも体の反応が大きくてじっとしていない。今も、どんどん背中が浮き上がって、殆ど横向きになってしまっている。仕方が無いので俺も姿勢を変えて横向きに寝転がりサガを抱き直す。と、サガの両手が伸びてきて、俺の顔を挟み、サガの方から何度も唇が押し当てられて来た。額、頬、鼻、耳、そして唇。それは、積極的に、と言って構わない位の熱を伝えてくる。それに、腕で抱きしめられない代わりかどうか知らないが、サガは、自分の両足で俺の片足をきゅっと巻き込んだ。

笑いが零れる。でも、やられっぱなしは性に合わないので再びサガの両肩を体重で押し戻す形でベッドに貼り付けた。絡んだ足はそのままだった。

サガの頭を抱き込む様にして首を覗くと、左顎の下に紫の痣が見える。バイオリンとビオラ、顎で楽器を支えている奏者につく特有の痣だけれど、こんなにまじまじと近くで見たのは初めてだった。

「痣、痛くないか？」

そう言って軽く痣を舐めると、サガの体が跳ね上がった。片手でサガの薄い肩を押え付けつつ、もう片方の手でサガの頭や耳、首筋をなでて宥めながら、俺はその痣を何度も舐め、キスをし、吸い上げた。立ち上がる首筋を辿り、寛げた襟元に顔を埋める。

サガを撫で付けていた左手が、すっとサガの手に掬い取られた。

サガは、ゆっくりと俺の手を持ち上げ、多分、自分の口元に持っていった。俺が気付いたのは、耳から背骨、そして背骨から腰にかけて痺れるような強烈な疼きを感じたからで、それで、サガが俺の指を、…小さく舐めている事を知った。一瞬、頭が、真っ白になった。

普通、そんなことするか？　左指ってのは、楽器弾くのに弦を押さえている指で、それを、そんなふうに舐めるな！　っていうか、口の中に入れるな！…

けれど、これで、さっきからサガの背中が震える原因だったインパクトの正体が分かる。正直、こりゃ堪らない、と、思う。

気持ちがいい事は大歓迎だが、自分が受け取るこの種の刺激は願い下げだ。この疼きに今溺れたら、立場が絶対逆になる。俺は、あくまでも受身に回るのはいやだ。

さりげなさを装い、俺は左手に暖かく添えられているサガの指を絡め取った。指を交互に絡めてぎゅっと握ると、サガも握り返してきた。そんなふうにして、サガの口から自分の指を外す。

……気付かれてないよな…？　我ながら姑息な事をしている、とは思う。でも、指先舐められて感じたなんて、サガにバレるのは絶対に嫌だった。

もう一度顔にキスを降らせ、サガの上質な黒の毛織のベストのボタンを外す。絡めていた指を外して袖口から指を差し入れ手首をなぞる。サガが感じているのが分かる。カフスを外し、そっと枕元に置いた。広がった袖口から手を上腕に向けて滑らせると、想像以上にサガの体が捩れた。

サガの体はベッドに体をこすり付けるようにして動いている。高価な衣装がしわくちゃだ。マズイ、と思うものの、サガの姿を見ていると止める事が出来なくて、わかっているのについついもう少し、と手を滑らせる。

きっちりとズボンに納まっていたはずのサガのシャツが、どんどんとずれ上がって来ていた。背中を撫でていた腕で、その裾を引きずり出した。

そして、サガに、直接触れた。

温かな皮膚に触れたと思った瞬間、サガの背中は逃げを打って、掌から離れた。それでも、気落ちすることなく、もっと腕を差し入れてサガの背中を何度も宥めた。サガを、じっとさせないで居る衝動の正体を俺は知っている。

サガの背中は時々強く反り返る。その度、俺の胸にサガの体が強く押し当てられる。俺もしっかり受け止める。絡まった足もそのままに、サガの背中を抱いていると、ふとベースの先輩が言っていた事を思い出した。

曰く、ベースを弾くのは女を抱くのに似ている、と。

そうかも、しれない…。

サガの背中で、左手を、弦の上を滑らすように動かしてみる。

サガが、しがみ付いて来た。

……先輩……。この後、どんな顔して楽器を弾いたらいいんだ？　俺は…。

取り敢えず今は、使えるものは全て使わせて貰うけど…。

サガをうつ伏せにし、感じていた箇所を強く吸う。紅く痕が残った。腕を前に回し、サガを腰と胸の位置で抱きしめる。背骨の真ん中ぐらいから腰椎にかけてが特に刺激になるらしく、物凄く逃げようとする。ちょっと意地が悪いかと思いつつも、気持ちいいのかと聞くと、何拍か置いて小さな頷きが返ってきた。

いとおしい。

正直に、素直に、臆する事無く感情を開いてくれるサガが、本当にいとおしかった。まだ使い慣れない言葉が、自然と口から零れ落ちた。愛してる、と。

言葉と共にキスを降らせていたら、サガの背中の震えがどんどん大きくなって…鼻をぶつけた…。かなり、痛かった…。でも、ここで気が逸れたら、それこそ恥だと思い直し、三度程続けてキスしてみたが、三度とも鼻をぶつけた。サガの動きは反射だから、それなりにスピードもあって、まともに食らうとえらく痛い。……ちょっと、これ以上は堪らないと思い、そんなに暴れてくれるなと頼むと、そんなことを言われても

とかなんとか、何だか必死の様子で答えが返ってきた。サガに覆い被さっていた上半身を起こし、ただ背中を撫でながら暫くそっとしておいてやると、漸く息が整ったのか、サガの『なぜ?』が到来した。

「どうしてそんなに慣れてるんだ…」と。

……ああ、そう?…。こういう事してても『何故?』、なんて知的神経経路が健在なんだ、お前…。

肩が柔らかく上下し、首を捻ってこちらを仰ぎ見ようとするサガの容色は、今まで見たこともないくらい綺麗でも、俺がちょっとうっとりとし過ぎて、黙って背中を撫で続けてしまっていても、まだサガが尋ねてきた。経験があるのか、と。

眉間に皺が寄った。

どんな気持ちで尋ねてきたのか、正確には分からないけれど、多分、俺に誰か好きな人間が過去に居たかもしれないっていう嫉妬ではなく、単にまた一つ俺に先を越されていたらしいって事が引っかかっているんだ。こいつの場合。

余計な事を考えるな。

今は、その好奇心と理性、捨てろ。

両手で、サガの無理矢理さらけ出された背中を撫で下ろした。その腕をわき腹にずらし、前へと滑り込ませ抱きしめる。片方の腕をそこから外し、サガの頭を撫で付けるために伸ばす。そして、もう一度サガの背中に全身で覆い被さる。サガの銀髪を撫で付けながら、そっと耳元に唇を寄せて、一言、囁いた。

「ある」と。

そして、後ろからサガの耳を甘く噛んだ。

腕や、指先や、時には足も使って狭いベッドの上で互いに満たしあった。

女でなくても胸の突起を刺激すれば感じるんだと初めて知ったし、一ミリの厚さだってない衣服の上から撫でるのと、直に相手の肌を手のひらに感じるのとでは全く受け取る満足が違う事も身に沁みて分かった。

横抱きにサガを抱きしめ、絡みつく足の熱さに腰を撫でていた手を回し前の硬さを確かめる。自分も同じ体だから分かる。このまま寮まで帰るのは辛いだろうと、前のボタンに手を掛けたとき、その腕にサガの手が掛かった。力が篭っていなかったので、宥めるようにしてその腕をあげ、額の際から頭を撫でて落ち着かせた。もう大丈夫かと思って再度下に手を伸ばすと、再びその腕にサガの熱をもった指が掛かる。

「それは、ダメだ」

「なんで?　気持ちよくない?」

「下に、ご両親がいるじゃないか…」

ひそひそと、熱い息と一緒に囁き合う。声を抑えてくれれば大丈夫、と一つサガの口にキスを落とし、俺は、強引に指を動かしてボタンを外しそのまま手を滑り込ませようとした。したんだが、サガが、どこにそんな力が残っていたんだ?と思うほどきっぱりとそれを拒絶した。

「駄目。…抑えられない」

「でもそのままじゃ辛いだろ?」

もう一度、サガの耳元にサガの理性が飛ぶ事を願いつつ言葉を注ぐ。顔に乱れて掛かった細い髪を掬い上げ、皮膚を撫でる。精一杯やってみたんだが、結局、サガの答えは大丈夫の一言だった。

ふうつ…。俺だったら、ぞっとしないな。この状態のまま電車に乗って、寮に帰って…、あれ？　寮での浴室の利用はもう締められてるぞ？　おまけに寝室は共同だ。本当に大丈夫なのかよ？

ため息をついてサガの首に腕を巻きつけ、唇を合わせた。互いの体を撫であい、体をこすり合わせ、抱き締め合った。サガの耳に唇を落とし、サガの唇にするように触れた。サガは両手両足を使って俺を抱きしめて、首を反らせた。サガの喉から小さく音が漏れている事に気付く。無性に嬉しくて、サガの鎖骨に顔を埋めた。

肩口に顔を埋め、サガの熱やその肌の感触にかなりうっとりしていた俺の頭に、サガの指が潜り込んだ。

あやすように、サガの指が俺の髪を何度も静かに梳く。背中や、肩もなで擦られている。それに酔いながら、またサガと唇を吸い合わせる。サガが、小さく、愛していると呟いた。初めて聞いた。

俺を、愛しているというサガの言葉。

嬉しくて、嬉しくて、サガをきつくきつく抱きしめた。サガの腕もきつく抱き返してくる。俺もだよ、と返すので精一杯だった。

愛しているんだ、とサガの熱に浮かされたような言葉が耳元に届く。

分かってる、と返す。全身で訴えかけるサガの熱に、不覚にも、目頭が熱くなる。自分が愛するものに、愛し返される事の深い充足感に、胸の内で唸った。両親や、弟や祖父母、友人、ガールフレンド、誰とも違う。誰とも似ていない。熱と、肉の厚さと、存在感と、全てが今までの経験を凌駕する刺激と感情を沸き起こさせる。

一体今までこんな熱が何処に埋もれていたのかと息を呑む。この塊を、手放したくないと思う。

飽きずに、言葉など捨てて俺はサガの体に触れ続け、サガもそれに副ってくれた。

正直、こんなにサガが自分を投げ出せる人間だとは思っていなかった。普段のサガの行動や、ものの考え方から推し量られる彼の人との接し方において、こんなにも無防備に自分を曝け出せる奴だとは全く想像していなかった。羞恥心や、見栄や、ほんの少し自分を優位に立たせる為の計算も、何かも全て放棄して、俺が与えるものを飲み込み、その何倍ものものを差し出してくれる。そのサガの全ての行動が、俺に、言わせる。深く、深く感謝を伴って。

「アイ　ノウ…」と。

どれぐらい時間が過ぎただろう。突然耳に入ってきた大聖堂の鐘の音にはっとした。

今、何時だ？

視線をすばやくベッドの上に転がっている大振りの目覚まし時計に走らせた。十九時四十五分！

びっくりだ。二時間近くもこうしてたのか？

「サガ、」

柔らかく瞼を閉じ、顎を反らしていたサガの耳に、俺は囁いた。

「時間。そろそろ帰らないと門限を過ぎるぞ」

ふわっと、サガの瞼が上がった。その下にあった瞳を見て、一瞬眩暈を感じた。

本当に、人間の瞳って潤むんだ…。

今見た光景が言葉として脳に伝達されるや否や、俺はサガの視界から自分の顔を外した。必要以上にきびきびと自分の衣服を整え、コートを羽織り、サガを送って行ける仕度を完了させた。そして、準備万端の体で振り返る。

振り返った先の光景は、緩んだ目元のまま右手で額に落ちかかる髪を掻げているサガだった。それは、とてもゆっくりとした振る舞いで、乱され本来の用途を無にされた着衣もなんの修正も受けていなかった。硬直してしまいそうになった足を叱咤し、俺は出来るだけ事務的な事に意識を集中させて、サガの頬を軽く指の背でノックした。

「おい、サガ、時間だ。起きてるか？」

サガは、ぼんやりと天上を見ていたかと思うと、ゆくりなくその両腕を俺の首に絡め引き寄せた。再び近しくなったサガの体の熱が沁みる。言外に離れたくないと主張してくれた事が嬉しい。その体を惜しんで味わう。サガが静かに一つ、額にキスをくれた。そして、互いの体はゆっくりと離れた。サガの体はぎこちなくベッドから起き上がり、外された諸々の整合をたどたどしく正しにかかった。その姿があまりにも心許無く、自分の欲に負けてサガの着衣に手を貸した。

手早く開けた釦を留めなおし、枕元に置いてけぼりにしていたボウ・タイを首にひっかけ首下の始末を任せる。再度腕を伸ばし今度はカフスを掴み寄せる。普段なら考えられないくらい覚束ない手つきでタイを纏める手首にカフスを止めてやる。黙って俺に世話を焼かれている柔らかな素顔に、ついちょっかいをだしたくなって、意地の悪い事を聞いた。

「初めてだっただろ？」と。

聞くまでもない。分かりきった質問だったのに。

サガは、途端に瞳の端に険を載せた。その表情を最後まで見ずに、俺はカーテンレールに引っ掛けたサガのコートを取りに歩く。少し尖った声が背中に当たった。

「君が早熟に過ぎるんだ。キスまでならともかく、それ以上、なんて……」と。

そんな、悔しさを全身に漲らせなくても…。ほらみろ、俺も皮肉に歯止めが効かなくなるじゃないか…。口元が緩む。サガのコートに手が掛かる。

「そうか？　でも、俺が言う付き合いたいって、こういう事がしたいって事なんだけど？　純情なエルザ姫？」

言いながら、もと来た線を辿り、すでに立ち上がり背筋を伸ばしているサガの目前に袖を通しやすくコートを広げて立った。

サガの顔に、さっと朱が走った。一瞬、物凄く強く睨まれた。でも、その表情も、堪らなく綺麗で、好きだと思えるんだから、ほんと、重症なのは俺の方だ。

サガの手は、つれなく俺の意図を拒否してコートを持ち去った。そのつんと反らした銀の頭に、ますます目がたゆむ。

キスしたのは初めてじゃない。人の体に触れたのも初めてじゃない。でも、芯から気持ちよく酔ったのは、今日が初めての経験だよ。

姫と当てこすられたサガは、ふいっとそっぽを向いたままコートに袖を通しながら、サガを構成する重大な要素である『利かん気』を遺憾なく発揮して答えた。

「一生君の素性など聞いてやるものか」

と、一言。

あまりの素敵な回答に、俺は爆笑に次ぐ爆笑で、絶対に頭が緩みすぎて変になっているとしか思えなかった。こんな脅し文句なら、何度でも聞きたい。

ただ、あんまり酷く笑ったものだから、サガの方はかなり傷ついたらしく、俺が気付いた頃には僅かだが眼に滲むものがあった。

息を呑んでようやく笑いを収めた俺は、立ち尽くしているサガの頭をなだめやさしく撫でた。

「からかって悪かったよ。でも、本当に嬉しいんだ。嬉しくて、自分でも笑いが止まらない」

そう言って、もう一度フレンチ・キスをサガにねだった。サガは上手にそれに答えてくれて…頭のよさっていうのはこういうことにも反映されるものなのかと、妙に感心した。

離しがたい体温を手放す。

「ロンドンブリッジまで送るよ」

そう言ってサガの口の端にキスをすると階下に向けて怒鳴った。

「母さん、サガを駅まで送ってくるから！」

慌しくサガを階下に下ろし、部屋を出るときにサザークで買ったもう一つの蝋燭の入った紙袋を手に取った。玄関で母の相手をしているサガに間に合わないぞ、と声をかけ背中を一発はたいて外に飛び出した。

ひやっとする冷気、サガの体温が恋しい。ふと横を歩くサガの顔を見つめると吐く息が白かった。

もう一度、唇にキスがしたかった。

が、まだ人通りのある道すがらでは適わず、ただ、サザーク大聖堂の脇を通る数秒だけ、もう一度手を触れ合わせた。

あっけなく改札へ辿り着き、何を言ったものか悩んだが、結局いつも通りに、気をつけて帰れ、などとしか言わなかった。ただ、お互い視線は離し難いようで、サガも中々改札を抜け

よっとしない。
まだ学校で会える。授業で、オケで、寮で会える。そう分かっていても離れがたいのだから、可笑しなものだ。
「ほら、そろそろいかなきゃ、ほんとにヤバイぞ」
笑って言いながら、百合の花束を持つ手に紙袋を押し付けた。
「もう一つおまけのお礼。なんとなく、お前に合うと思ったから」
サザーク大聖堂の売店で買ったアヴェントの蝋燭だ。ちょっと凝った造りで優美な蝋燭だった。それでサガを連想する自分もどうかと思うが、思ってしまうものは仕方がない。寮に帰って中を開けて見られた時、サガがあまり仰天しなきゃそれでいいさ。今は、有難うなんて言ってるけどな。
「帰るのは月曜？」
サガが、伺うように尋ねてきた。俺は苦笑し、あっさりと自分の予定を覆す答えをサガに告げる。夜になるが明日中に帰寮すると。視線が合う。サガと俺、根底にあるのは、きっと同じ感情だ。尚もサガの言葉が零れる。
「：電車に乗る前に寮に電話くれるかな」
「なんで？　迎えにでも来てくれるの？」
言わずと知れた問いを掛けた。多分、もう素直にサガは答えない。ぴんと伸びた背筋、整えられた表情、静かに纏められた声のトーンがそう告げている。けれど、俺も大人しく分かった振りなんかしない。鈍く装うことで引き出したい反応もある。もちろん、お互い相手の手の内なんて分かっているのだけれど。
サガは、一瞬目の端を細めて笑った。
「それじゃ、また明日」
そして、一言だけ言い残して改札口を擦り抜け、淀み無く地下へと姿を消して行った。そのきっぱりとした歩きぶりが、如何にもサガらしくて、俺は銀色の頭髪が沈み切るまで笑いをかみ殺しながら見送った。それから、くすくす笑いながら帰路を辿り、何度も吹き出しながらシャワーを浴び、ぴくぴくと痙攣を繰り返す頬の筋肉を宥めながら散らかったカセットやＣＤを片付けた。
外は結構な寒さだったのに、何時までも部屋の中は暖かく、どんな音楽も聴く気になれず、かといって買ってきたパンフレットも読む気になれず、仕方がないのでベッドに仰向けにダイブし目を閉じた。目蓋の裏には、今日見た何十ものサガの表情が消えては現れ、現れては消え、俺はとうとうその幻に屈服し、その事に罪悪感を持たなくて良いことを感謝した。

十一月三十日、日曜日

着替えの入ったバックに、ワイン二本、ジン二本、ブランデー二本、ウォッカ一本を詰め込んでロンドンブリッジで家族と別れた。アイオリアは予定通り明日の朝スクールに戻る。家にいれば、テレビも漫画も見れるからな。

約束通り、俺は駅からスミス・ハウスに電話をした。電話口に出たミス・ベネットは快くサガへの伝言を引き受けてくれた上、誕生日おめでとう、と言うのも忘れなかった。

十九時三七分。

ちらっと確認した時計の針が丁度カチッと動いた。寮に着くのは二十時過ぎだ。

早く、もっと、早く、寮に着きたい。

目を閉じて深く息を吸うと、じんわりと腕が熱くなる。サガは、今頃夕食を済ませた頃だろうか？　あいつは、今日一日、何をして過ごしたんだろう。サガのことばかり考えている自分に苦笑した。

すっかり日の落ちた夜闇の中、スクールの門扉の影から僅かな月明かりを受けて淡く輝く銀色の頭髪を見付けた時、俺の口ははっきりと笑った。受付口から顔を覗かせた守衛が、俺の学生証を確認しながら、仲がいいな、と言う。控えめに黙して立っていたサガを振り返ると、サガも口の端に笑みを浮かべていた。

守衛から帰寮の許可を受け、スクールの敷地に入る。たった四十時間程前にこの門を潜ったばかりというのに、とても懐かしかった。そして、受ける印象が変わっていた。

暗闇に黒く現れる木々や建物の影、踏みしだく草や石の音、こんなに澄んでいただろうか？　横を歩くサガの気配、こんなにはっきりと感知出来るものだったろうか？

サガが、誕生日はどうだったか、と尋ねる。

俺も、今日はどうしていたか、と尋ねる。

でも、答えが続かない。

寮へと続く道が、緩いカーブに差し掛かる。左手は雑木林になっている。どちらからともなく道を外れ木陰に紛れ込んだ。下草や落ち葉がパキパキと鳴る。けれど、そんなことには構わない。息を潜めて木々の間に入り込み、サガの腕が俺の首に回り、俺の手は担いでいた荷物を手放しサガの腰を抱いた。

一日ぶりにするサガとのキスは、相手を感じること以外の全てを拒否するくらい幸福で熱かった。

「おかえり」

サガが、俺の髪を撫で付けながら囁き、俺の唇を啄む。

「ただいま」

サガの腰を強く引き寄せ、深く舌を差し入れながら、合間に囁く。

時折飛び込むサガの眉目の物柔らかさに息が詰まる。そして、本当に奇妙な事に、サガの皮膚が、サガの髪が、指先が、仄かに光沢を発しているように見える。きっと、どんな美人・麗人が今この横に立ったとしても、サガのこの清美さには適わないだろうと誓って言える。そのぐらい、サガは綺麗だった。

サガって、こんなにも美人だったっけ？　と俺にすら疑問が生じる程。

サガの一挙手一動が目に焼きつく。五感に香る。離したくない。

やがて、ゆっくりと離れた互いの距離の分だけ、冷気が川のように流れ込んだ。

寮へ戻れば今まで通りのアイオロス・エインズワースとサガ・チェトウィンドにならなくてはいけない。それは、とても歯痒い事だけれど…。

十五の時の俺は、サガの体の熱や、唇の柔らかさなんか知らなかった。

十六を迎えた俺の腕は、『恋人』の確かな感触を知っている。

最高の十六歳への幕開けじゃないか？

俺は、サガの背に手を回し、大きく一歩を踏み出した。この誇らしい気持ちを、一生持ち続ける事を自分に誓って。

意識が、眠りと覚醒の間でぐらぐら揺れた。耳元で、ピロピロと能天気な電子音が響く。アラーム付の腕時計だ。左頬に冷たい金属の熱を感じる

セットしたのは……、サガだろう。サガしかいない。

もそもそと起き上がると、部屋中の目覚まし時計がそれぞれに鳴っていて、シュラもアンドリューも似たりよったりの状態でベッドの上にむくっと起き上がり始めていた。いや、似たりよったりでもないか。シュラはなんとか正気を保っているようだけど、アンドリューのあの顔色、あれは絶対に二日酔いだ…。

サガのベッドには、心霊オタクのデスマスクが高鼾をかいている。こいつは途中から、部屋に紛れ込んで来て、一番最初に撃沈した。

あれから、俺が持ち帰った土産で祝杯を挙げた。寝たのは五時を回っていたか…。うん。回っていた。最後には、残った酒みんな混ぜこぜにしてシュラと飲み比べをやったんだ。もちろん勝ったのは俺だ。あいつから『降参』の一言をもぎ取れることなんて、滅多に在ることじゃないから、なかなかいい勝負だったな。一人思い出し、笑う。

最初は確かに椅子に腰掛けていたのに、いつのまにか床に車座になって飲んでいた。お開きになった後、シュラは早々にベッドに転がり込み、俺は、板の上で丸くなっていたアンドリューを担いでベッドに戻した。さて次は酒の痕跡を消さなくては、と床を見ると、林立していたはずの酒瓶が綺麗に片付けられていた。後半、俺の横でウトウトしていた筈のサガの仕業だ。俺もひんやりとしたシーツに潜り込んだ。暫くして、ベッドを奪われたサガが尋ねた。隣に寝ていいか？　と。

俺は、落下寸前の意識の中で体を横にしてスペースを空け

た。物音立てずに滑り込んで来た体温が、随分と心地良かった。特に触れたりしなかったけれど、十分だった。

一息に床に足をつけ、窓に寄りカーテンを広げた。サガの目覚まし時計にも、人の気配にも全く頓着なく眠り続けるデスマスクの頭を一発殴ってやって、大きく伸びをする。

十二月だ。定演、降誕祭、カウントダウン！

どこかで見たような光景が背後に広がっているが、気にしない。少々の寝不足なものともしないくらい、気分は上々だ。

スクールに入学してから二年と三ヶ月。人生で最大の勝負に勝ったと思われる俺、アイオロス・ヴィンセント・エインズワースの現状は、まさに、無敵と言っていいくらい意気揚々としている。口が自然と綻び、目に生気が溢れていることを自分自身で感じるんだ。背骨が弾力をもってすっくと伸び、何処へでも駆け出して行ける。そう感じる。

さあ、行こう。

新しい一日が始まった。

これからの前進は、常に二人分の足跡を残すだろう。

誰よりも長い、力強い軌跡を残してやろう。

出来ないことなどあるものか。

俺は、未だ動きの緩慢な友人たちを掻き分け、真っ白なシャツに袖を通した。

"The Late Autumn" Side vision of AIOLOS, Nov. 1989.

Title : THE LATE AUTUMN
Author : Seigi Sagame and Wakai

英国寮生物語(2)
えいこくりょうせいものがたり

薪朝文庫　**B - 5 - S**

平成一五年一二月三〇日　発行

著者　祥曲星祈（さがみせいぎ）・和海（わかい）

発行者　高橋　鼎

発行所　株式会社　仔牛ともぐら舎

http://moo-and-mole.com
info@moo-and-mole.com

定価　六八〇円

乱丁・落丁本は送料当舎負担にてお取り替え致します。

印刷・製本　緑陽社
Printed In Japan

ISBN4 - 10 - 208802-4 CO197